アメジスト色の瞳の彼女と自分と

fire—cat

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

温泉地に研修に来たトレーナー資格を有するウマ娘専門スポーツ診療医の卵。

彼がそこで出会ったのは……。

シリアス×

シリアル○

な、お話。

【注意】この作品はウマ娘が出てくる時点でフィクションであることは明白です。実在の人物や団体・地名・病気などとは関係ありません。

とある作品のリメイク版。

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 8
第3話 …… 14
第4話 …… 28
第5話 …… 44
第6話 …… 55
第7話 …… 60
第8話 …… 69
第9話 …… 74
第10話 …… 83
第11話 …… 94
第12話 …… 102
第13話 …… 114
第14話 …… 121
第15話 …… 125
第16話 …… 141
第17話 …… 155
第18話 …… 173
第19話 …… 182
第20話 …… 190
第21話 …… 204
第22話 …… 209
第23話 …… 214
第24話 …… 222
第25話 …… 230

第26話 244
第27話 256
第28話 275

第1話

「暑いな……」

とある県の山間にある長閑な温泉郷。

そこで一両編成の電車を降りて駅舎の外に出ると焼けつくような日差しに目を細めた。

文政四年開湯と言う由緒ある歴史を持ち、放射能泉、硫黄泉、酸性泉の三湯が自噴しているこの地が大きく発展していないのは、温泉の八割が個人の敷地にあると言うだけでなく、あまりにも広大な森林と湖沼のせいだろうと思っている。

この温泉にも１５０年ほど前に病院が建てられ、古くからの湯治と並んで近代医療に基づいた長期療養も行なわれるようになった。らしい。

その病院の医師――特にウマ娘スポーツ医学科の医師が不足しているという事を知り、研修医として働くようになったのは年末の事だ。

医師免許を持つ身とはいえ、地域に根差した開業医や薬剤師の家系に生まれでもしない限りは本格的に将来の事を考えなくてはならない。

そんなわけで。某中堅私立大学医学部に現役入学したが早々に内科や眼科などのヒ

ト相手の医科に見切りをつけ、なぜか年中不足しているウマ娘専門のスポーツ医学科と外科を選択したが、そこでも名門トレーナー一族の出身者が幅を利かせ、特にコネのない者はこうして病院や療養施設に潜り込み、少しでも顔を繋いでおかなくてはならない。何らかの役に立つかと思いトレーナー資格試験も受験し、無事取得出来たが果たしてこの資格が死格にならない事を祈るばかりである。

そんなコネのない者でもこの時期はすでに卒業後の進路が決定しているものがほとんどで、将来に向け予定が詰まっている。

従って、私みたいな進路が決まっていない者には大学からの

「進路が決まっていないお前らは暫らく講義の出席を免除してやる。代わりにどんなコネを使ってでもどこかの病院か施設に顔を繋いでおけ！」

との有難いお達しがあり、コネと言っても叔父が院長を務め、大叔父が理事長になっているこの病院ぐらいしかない私は半ば強制的にこの地へ送り込まれたのだ。

「……こんな所でのんびりするのもいいかな。トレーナーにも少し未練が在るけど、どのみちトレセン学園には入れないだろうし」

肩の荷物を軽く掛け直し、冬の間、半ば雪に閉ざされていた長い長い坂道を歩き出した。

標高のそこそこ高いこの地も夏ともなるとさすがに暑い。

切り開かれた道は影を作る物もなく、首筋を焼き付ける日差しは、済んだ空気の恩恵を余すことなく味方につけて攻め立てる。
「……避暑地じゃないよな、やっぱり」
療養を目的とした温泉郷ということで、此処に来るまでは整った環境を想像していたが、来た当初にそんな幻想は打ち砕かれていた。
「此処を過ぎれば……木陰路だ……」
そう解っているものの、周囲の景色などを楽しむ余裕は消えていた。
「……水が欲しい……」
まさかこれほど暑くなるとは思わなかった。
切り開かれたアスファルトの照り返しは、暴力的なまでにこの身を焼きつける。
「……なんでこんなに切り開かれているんだ……」
冬は『何でこんなに狭い道なんだ』と言っていた気もするが、そんなものはとっくに何処かに蒸発している。
切り開かれた路をそれ、木陰路に入る。
木陰路に入ると、両端の爽やかにして瑞々しい若い木々が初夏の空の一部を覆い、足元からは土の涼気がなんともいえない幸福感を伴って伝わってきた。
蒼穹の空を横切る白い雲が、涼陰に瞬く木漏れ日の囁きが、さわさわと揺れる風の調

べが、語りかけてくる。
森の中に湧き出た冷冷とした泉を横切る、羽のように舞う清涼な自然の息吹が、その翼をこの場全体に広げると、焼かれてしまった肌から熱を消し去っていく。
何もかも忘れて地面に倒れこみたい衝動を押さえる影が道の先に小さく見えた。
木陰路の向こう、日差しの映える影の切れ目。
「あれは……」
その影もこちらを見つけたらしく、小走りに駆け寄ってくる。
「こんにちは、お兄ちゃん」
「ダイヤちゃん。久しぶりだね。お迎えありがと」
息を切らせて出迎えてくれたのは、この地で親しくなったウマ娘の女の子だった。
ダイヤちゃん――サトノダイヤモンドちゃんは、体調を崩してこの温泉郷で湯治中のお爺さんの付き添いで逗留中のウマ娘ちゃんだ。
学校の授業はオンラインで受けているらしいが、トレセン学園を受けるにはやはり不安なところもあるという事で御爺さんが家庭教師を探していたところに院長の推薦を受けた私が冬の間だけという事で家庭教師を引き受けていた。
冬の間病院の見習い医師とダイヤちゃんの家庭教師という二足の草鞋で生活していたが、春になる頃にはすっかり懐かれ、帰るとなった時に随分大泣きされたものだ。

「こんにちは。またお世話になるよ、ダイヤちゃん」
迎えに来てくれたダイヤちゃんとの間で会話を温泉郷の中央にある病院まで楽しむ。
一頻り会話を楽しんでいると、目的地は目の前だった。
「あら、今日も元気ね。ダイヤちゃん」
病院の前で、年末お世話になった看護師さんに出会った。
「お久しぶりです、デイジーギャルさん」
「あら？　ああ、そう言えば今日だったわね。お久しぶり。またよろしくね」
その言葉を聞き妙に緊張感が走る。
年末この病院でお世話になったとき、この人には随分と絞られたものだ。
言葉の当たりは優しいが、仕事に関しては自分にも他人にも厳しい人だった。
「あら。随分緊張しているわね。この前、そんなに厳しく接したかしら？」
そう言って肩をすくめるデイジーギャルさん。
「院長達が待っているから挨拶してくるといいわ。尤も、一番楽しみにしていたのはダイヤちゃんだけど」
笑いながらそう言うデイジーギャルさん。
「あぁ！　内緒って言ったのにぃ」
剥れるダイヤちゃんの背を押して病院へ送っていくデイジーギャルさん。

「内緒だって言ったのに……」
「ごめん、ごめん。仲良さそうだったから、つい……」
「もう……」
病院に消えていく二人を見ていると何となく微笑ましい物を感じた。
「相変わらず仲良いな、あの二人」
少し歳の離れた姉と妹。そんな言葉が似合う二人だった。
「さてと、そろそろ行こうか」
荷物を担ぎなおし、病院の入口に向かって歩き始めた。

この温泉郷の病院は国立でも公立でもなく私の母方の叔父の一族の先祖が設立したらしい。
去年の秋ごろ、実習先が見つからず途方に暮れていた私を見かねた叔母が声をかけてくれた。院長は私にとっては叔父にあたるが、あまり交流もなく実習先がすんなり決まっていたら此処には訪れなかっただろう。
着任の挨拶の為院長室を覗いてみたが人影は見当たらなかった。
……待てよ。この時間なら……。
冬を思い出し、病院を出て温泉にまわったところで。

「おう。来たな」
力強く肩を叩かれた。
振り向くとそこに院長以下、この冬に知り合った医師のほとんどが揃っていた。
どうやら総回診にうまく当たったようだ。
早速『こき使ってやるから覚悟しろよ』だの『患者の女の子に手出すんじゃないぞ』だの手荒い歓迎を受けた。
「まぁなんにせよ、これから暫らくの間、宜しく頼むぞ」
「はい。此方こそ宜しくお願いします、院長」
「よろしい！　またビシビシ鍛えてやるからな。……尤も、殆どデイジーギャル君が面倒を見ることになると思うがな」

第2話

ここに来てから数日が経ち、冬に行なっていた仕事も少しづつ思い出してきていた。

早朝、手すきの時間で事務仕事を手伝っていると、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「あら？　おひさ～。いつここに来たの？」

この声は……。

「あ……」

ちょっとケバ…ゴホン　派手…ゴホン　ゴージャスな服装をした女性が近付いてきた。

「マルゼンスキーさん……」

「あら。覚えてくれていたのね。嬉しいわ」

……忘れる筈もない。この人の旦那さん――マルゼンスキーさんの元トレーナーさんらしい――に僕はえらい目に遭わされた。

ここに来た当初、旦那さんに『好みの女性像』に付いて聞かれたことがあった。その際、『未だそれどころじゃありませんから。早く巡り会ってみたいですけど』と迂闊にも気安く答えた僕に、彼は『それなら好みの女性に巡り会って来い』と言うや否や事もあ

ろうに、塀を挟んで反対側のすぐ隣の女性専用区域に放り投げてくれたのだ。投げ込まれた先は運が良いのか悪いのか男性側と同じ作りだったので洗い場とかではなく露天風呂だった。

そして投げ込んだ自分はその足でいち早くその場から逃げ出していた。周囲の人達と一緒に……。

おかげで入浴中だった患者さんや看護師さん、女医さんから変質者呼ばわりされて肩身の狭い思いを3日ほど味わったのだ。確かに眼福ではあったが、割に合わなさ過ぎた。覗き魔の変質者という誤解が解けた。というか、流石に気の毒に思ってくれたらしい一部始終を見ていた通院治療中の男性患者によって露天風呂に飛び込んできた真相が判明した後は逆に同情されたが……。

その後、暫らく避け続け遠くから観察しているうちに基本的には気がいい人であることはわかった。時偶、豪快に悪乗りするだけで……。ただ、あれ以来あの人が本当にヒトなのかは非常に疑わしく思っている。機会が遇ったら解…ゲフン、全身隈なく徹底的な精密検査をしてみたいものだ。

「いつから来たの？　調子は如何？」

矢継ぎ早に質問を浴びせてくる。

「あ、ええ、数日前から……調子の方は何とか……マルゼンスキーさんこそ調子は……」

圧倒されながらも、マルゼンスキーさんに体調を聞いてみる。
３０代前半の筈だがまだ２０代半ば、下手すれば１０代後半に見えるときもあるマルゼンスキーさん。相変わらず元気そうだったが、暑気中りぐらいはしているかも知れない。
「私？」
自分を指差すマルゼンスキーさん。
「何言っているのよ。見ての通り私は元気よ、どこも彼処も」
胸を叩いて笑うマルゼンスキーさん。
「はぁ……」
やっぱり……。
「ここには皆の顔を見に来ているのよ。色んな人が集まるから」
待合所を見渡すマルゼンスキーさん。
「暇な人たちで集まって色々とお喋りするのが楽しいのよ」
ここは療養の場なんですが。と一言言いたい。相変わらずだ、この人は……。
「何はともあれ、これからもよろしくね」
あまりよろしくされたくなかった……。
これから数ヶ月か数年かわからないけど、長い付き合いになりそうだ。

午前の仕事も終わり、食堂へ足を運ぶとそこで会いたくない人に出くわしてしまった……。

「ウゲッ　清一さん……」

苦手な人だ……思わず身構えてしまう。

「おいおい、久しぶりに出会って最初からこれか？　随分と警戒されたもんだ」

マルゼンスキーさんの旦那さんになる清一さんは、かつて中央のトレセン学園でトレーナーをやっていて、そこでマルゼンスキーさんと知り合い結婚したらしい。かなり有名なトレーナーだったらしいがマルゼンスキーさんのリーグ引退と同時にトレーナーを退職し、今はこの地でマルゼンスキーさんと悠悠自適の生活をしている。

……未だ４０代後半だというのに。

「あ、いえ……そんな事は」

口篭もっていると、

「まぁ、最初がアレだったからなぁ。仕方ないと言えば仕方ないか。いや、済まん。あの時の事は謝る。……この前はきちんと謝っていなかったからな」

頭を下げる清一さん。

如何したものか困っていると助け舟があらわれた。

「あら、清一さん。……何やっているの？」
「ん？　ああ、マルか。いや、前の事を謝っていたんだ」
「呆れた。未だ謝ってなかったの？　全く……」
そう呆れるマルゼンスキーさんの盆には色取り取りの料理が所狭しと並んでいた。
「……すごいですね……相変わらず」
お好み定食の他に照焼き丼、ムニエル、深蒸し、アンコウ鍋……。あ、自分でもわかる高級ワインまで……。
……四人前は軽く超えているだろう……。
「最近ご飯が美味しいのよ。これぐらいあっという間に食べちゃうのよね」
そう言ったそばからムニエルに齧り付いている……。
あの食欲で現役時代の体型を維持できるんだから、ある意味生物離れしている……。
その様子を見ているだけで満腹になりそうな勢いだった。
「あなたは何にするの？　ここの牡丹丼はお手頃価格でお薦めよ。あなたがいなくなってから出来た新メニューなの」
「牡丹って猪じゃないですか。鍋じゃないんですね。でも、へぇ……丼物は、久しぶりだな」
「何？　何食べるの？」

「……じゃぁ、牡丹鍋、じゃなかった、牡丹丼にします」
ムニエルとお好み定食を平らげて、照焼き丼に取り掛かるマルゼンスキーさんの前を離れて、丼物を買いに行こうとすると、
「ん、何か買うのか？」
と、一心不乱に目の前の深蒸しを平らげていた清一さんが、
「ついでに俺の分、何か麺を適当に頼んでくれ。金は後で払う」
と頼んできた。
これ以上食べるのか……？
そんな表情が顔に出ていたのか、清一さんは事も無げに
「麺でさっぱりと〆るよ」
と宣ってきた。
相変わらずすごい食欲だ。これでＢＭＩが２１．５というのだから、世の中は……。

第3話

ここに来て1週間が過ぎた頃からようやく朝から暑さが厳しくなり、夏真っ盛りになってきた。

シャワーを浴びて病院に向かうと、何やら浴場前が騒がしい。

何事かと通路の角から覗いてみると、患者の中でも年若い女性達が温泉療養を行なうらしく通路の前に集まっていた。

彼女達から何となく目が離せずにその一団を見つめていると、その中に混じって見覚えのある長い髪が見え隠れしている。

……頭の中に警告が木霊する。

その場を離れようとしたが、肩をがっちりと握られてしまった。

恐る恐る振り返ると……居た。温泉の常連、清一さん――別名『温泉のヌシ』が。

「何やってるんだ？　ん～？」

目が笑っている。

僕と同じように角から顔を覗かせると

「ほぉ。これはまた……花園の花が揃って。……一人枯れかけているのもいるか」

そこまで言うと頭を引っ込め、
「……なるほどなぁ。君、なかなか見かけによらず……」
この人、何か身体を害しているのかと微かに心配していたが、こんな様子を見ているとまだまだ大丈夫そうだ。
そう思ったが沈黙を守る。此処に着いた早々、この人に出会い、口を滑らせ酷い目にあわされた事は未だ覚えている。
「仕方ないな……。君、君にとっておきの場所を教えてあげよう。温泉の前にある樫の木に登ってみたまえ。多少遠いが、君の視力なら露天が覗き放題だぞ。……それでも満足できなかったら男用の露天の岩場を探してみろ。隙間から同じく――」
一頻りからかわれていると、いつの間にかマルゼンスキーさんが居た。
「どうしたの？」
「ん～？　……何だ、枯れかけた花…ぐぉ」
マルゼンスキーさんの拳が清一さんの顔面を直撃していた。
「花がどうしたの？」
あくまで、にこやかなマルゼンスキーさん。
「……痛つつ。何、さっきまで通路にいただろ、可愛い娘達が。……どの娘が好みか訊いていたんだよ」

そこまで清一さんが言うとマルゼンスキーさんの目が輝いた。
「あぁ。……うん、確かに今が一番良い時期かもね。……で、どの娘？」
「な、何がですか……？」
「何って……決まっているじゃないの！　そんなこと言わせないの！」
そう言いながら僕の肩を叩くマルゼンスキーさん。
「で、どうなの？　どうなの？　そっちの方は？」
身を乗り出してくる二人。
知らず知らずのうちに壁際に追い詰められていた。
更に詰め寄る二人。
「ど、どうって……そっちの方って何がですか？」
「決まってるでしょ。アレよアレ」
「何ですか？　アレって」
「惚けちゃって。どうなの？　誰か好みの娘見つけたの？」
「は？」
「ほら、此処の病院って結構若くて可愛い子多いじゃない？」
「そうだよなぁ。お前もあの娘達も未だ若いしな、堪らんだろ？　おまけに今は夏真っ盛りで薄着の季節だしなぁ」

清一さんがニヤリと笑う。
「あの……」
「誰？　誰？」
「もったいぶるな。言えば俺達が紹介してやるぞ？」
「いや……その」
「気にするなよ。ここにいる娘達は皆知り合い見たいなもんだ。な、言っちまえよ」
「はぁ……」
「あら？　遠慮しているの？　ダメよ、そんなんじゃ……。清一さんなんてトレーナーの頃はそりゃもう凄かったんだから。あなたも……」
「……」
喋り続ける二人。
……誰か助けて欲しい。
延々と続く二人が若かりし頃の話。
「……って、何の話だっけ？」
マルゼンスキーさんが脱線に気づいた。
「女の子を紹介する……って、あ」
しまった……。

「おお。そうだったな。すっかり忘れていたよ。……で、誰を呼んでくれば良いんだ？」
二人に追い詰められた時、通路の向こうの方で僕を呼ぶ声が聞こえた。
……助かった。
予定がありますからとこれ幸いに逃げ出せたが……。
あの二人のことだ、明日辺りで会ったらまた聞かれるんだろうな。
そう考えると少し憂鬱な気分になった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

昨日は通路前で騒いでいたことがばれて厳重注意を受けてしまった。
午前中の診療を終えると、午後は丸々休暇を貰えた。
……温泉や病院にいるとあの二人に出会う可能性もある。今、二人に出会ったら何言われるか解ったものじゃない。外に出るに限る。
そう考え、食前の腹減らしを兼ねて前にダイヤちゃんに教わった丘にいくことにした。
温泉から見えるその小高い丘に登ると、辺り一面に草花が咲き乱れていた。その草原を心地よい風が通り過ぎていく。
草原に寝転んでいると、何か影が見えた。
「あれ……？」

こちらに登って来る人影。頭の上に見える耳からダイヤちゃんかと思ったら近づくにつれはっきり見えてくる服装が、とある人を連想させた。まさか……。
「あら、珍しいとこで会うわね！」
マルゼンスキーさんだった……。
「……何やっているんですか？　こんなところで」
「え？　散歩よ、散歩。たまには身体を動かさないとね！　現役の時みたいに一日６時間とはいかないけど」
「……そうですね」
あれだけの食事量だもんな……。
「それにしても……」
マルゼンスキーさんが丘からの山並みを眺めていた。
「いい景色よね、ここ」
「そうですね」
ダイヤちゃんに教えられたこの丘は、夏の日差しを一瞬忘れてしまうような、荘厳な眺めだった。
こうして見ると、この地は山と森に囲まれ外界から切り離されているような印象を受ける。

この景色を見ているのは、マルゼンスキーさんと二人だけ……。
マルゼンスキーさんが溜息をつく。
「まるでこの世界に二人きりになった気分ね……」
僕も頷く。
「そうですね……」
ん？　……待てよ？　マルゼンスキーさんと二人っきり？
……。
……。
…。
「冗談じゃないですよ！」
とんでもない光景が浮かび思わず叫んでしまった。
「どうしたの？　急に大声出して？」
「……いえ、別に」
仕事がありますからと誤魔化し、大慌てで丘を駆け下りた。

少し遅めの昼食を摂ろうと食堂を訪れると其処にマルゼンスキーさんがいた。
「あら。さっきぶりね～」

「うっ……。マルゼンスキーさん」
「どうしたの？　さっきは突然……」
「はぁ。……少し疲れているみたいです」
　そう誤魔化す。
「あらあら大変。駄目よ、気をつけなきゃ」
　そう言うと、マルゼンスキーさんは目の前にあった皿からナポリタンを豪快に頬張った。
「……」
　相変わらず豪快な食事だなぁ……。
　呆れてその様子を見ていると、マルゼンスキーさんが大皿を目の前に差し出してきた。
「何？　食べるの？」
「い、いえ」
　思わずのけぞって首を振るう。
「美味しいのにねぇ。食が細いと大変ね」
　食が細いわけじゃない。マルゼンスキーさん達ウマ娘の食事量が凄いだけだと思う……。

ナポリタンを頬張りながらマルゼンスキーさんが話し続ける。
「でもねぇ……。だめよ、君くらいの子が一人でお昼なんて……。そりゃ清一さんみたいのはちょっと困るけど」
苦笑を顔に貼り付けたマルゼンスキーさん。
「ねっ。君には彼女いないの？　お弁当を作ってくれるような甲斐甲斐しい人は？」
「いませんよ……」
苦笑して答える。
「あら。可愛い子いっぱい居るのにね」
「毎日こき使われてそんな暇ありませんって」
「嘘ばっかり言って……。お気に入りの子が居るらしいって噂じゃないの」
「え？　な、何ですか？　誰がそんなことを？」
迂闊な事は言えない……。
下手な事を言うとマルゼンスキーさんが噂の元になる。
多分この噂も元は清一さんかマルゼンスキーさんに違いない。
僕がここに来ているのは恋人探しのためじゃない……。
それなりに忙しいし、そんなことをやっている暇も……あまりない。
話を逸らさなくては。

「そんなの、根も葉もない噂ですよ。それより、お身体の方、大丈夫なんですか？」
「あら？　心配してくれるの？」
「え？　そりゃ……まぁ」
「嬉しいわ。若い子からそんな事言ってもらえるなんて。あ、もしかして……あなたのお目当てって、私の事……？」
「え!?」
　思わず後ずさりしてしまった……。
「そう言えば、私の事ずっと追いかけていない？　私が行くところ行くところ、必ず居るし……」
「み、研修医ですから、あちこち回されるんです！」
「そんな遠慮しなくっても……いっそのこと、今日の舞踏会、御一緒しない？　招待券もあるわよ～？」
「え、遠慮しますって……舞踏会？」
　この場には似つかわしくない単語が聞こえたような気がした。
「舞踏会ってそんなのあるんですか？」
「あら……知らなかったの？」
　なめまかしい視線を注ぎながらマルゼンスキーさんが教えてくれた。

ここの上の丘にある庭園で毎年シンボリ家の主催で舞踏会が開かれるらしい。ここの住民が皆楽しみにしているもので近隣からも人が多く来るとか……。

「どう？　君も一緒に……」

ジリジリと詰め寄るマルゼンスキーさん……。

思わず目をつぶった私に、

「あはは……。君ってホント、面白いわね」

と、いきなり笑い出す。目に涙まで浮かべて笑い転げている……。

「本気にしちゃダメよ。ホント、からかいがいがあるわね」

と招待券を押し付けさっさと立ち去ってしまった。

周囲の忍び笑いが耳に痛い……。

「よう！　精が出るな、若いの」

研修を終え、仕事の一つである温泉の管理に訪れた僕の肩を強く叩く手とその持ち主。

清一さん……温泉の『ヌシ』だ。

「んで、どうだ」

肩に手を回しヌシが聞いてくる。

「どうって……何がですか？」
　笑い声とともに肩が強く叩かれる。
「何って……これだよ、こ・れ」
　耳元に口を近づけ、目の前に小指を立てて見せるヌシ。
「可愛い娘がこれだけいるんだ。一人ぐらいはもう手つけたんだろう？」
「なっ！」
　あまりの言葉に二の句が継げない。
「アツムテキちゃんだろ、ウインジェネラーレちゃんだろ、ポジーちゃんだろ、年上が好みならデイジーギャルちゃんかな。あの普段の優しさと仕事の時の冷たい感じの差がいいんだよな……。お、そうそう、将来性ならダイヤちゃんが一番だな。あの子は後３年もすれば必ず美人になるぞ」
　指を折り数えるヌシ。
　この人はいつの間に……。
「で、誰に手つけたんだ？」
　身を乗り出してくる清一さん。
「そ、そんな事、患者の女の子達にはしませんよ。大体僕はウマ娘が対象のスポーツ医療の研修医ですよ。ウマ娘のスポーツ医療医というものは……」

「んなこといってもなぁ。お前まだ若いんだし……俺がその歳の時はあちこち覗きに行ったけどなぁ」

ニヤリと笑い、更に声を顰める。

「何なら、紹介してやるぞ、昔俺のチームにいたウマ娘。今は同僚のチームに移籍してるんだが俺の家に休暇で遊びに来ているんだ。あいつなら歳も近そうだし…ぐぉ」

何時の間にか近付いていた『ヌシの奥様』が後頭部を殴りつけていた。

「馬鹿言ってないの、清一さん。全く。……邪魔したわね」

引き摺られて去る『ヌシ』の姿。

……マルゼンスキーさんの方が強そうだなぁ。やっぱりヒトはウマ娘には勝てないんだな。

そんな感想を抱いた。

一日の仕事を終え、自分の部屋に戻る。

……寝台に横になってもなかなか寝付けなかった。

本当に疲れたのだが……。

いや、疲れたのは身体よりも心の方かもしれない……。

「……からかわれているんだろうな、あの二人に」

あの二人とは、何故かよく顔を合わせる。

出会ったが最後、良いように遊ばれてしまう。
ここにいる間は、あの二人に玩具にされてしまう……そんな気がする。
窓から入る夜風が心地よい。
遠くから微かに楽しそうな音楽も聞こえる……。
「そう言えば、マルゼンスキーさん、舞踏会が催されているって言ってたな」
身体を起こし、少しの間考え込む。
「……行ってみようかな」
あの二人に遭う可能性もあるけど、外だったら何とかなるだろう……。

第４話

「へぇ。予想していたよりも華やかだなぁ、ここの舞踏会」
着飾った男女が満面の笑顔で歓談を楽しみ、料理に舌鼓を打っている。
友人に連れられて人数合わせで参加したトレセン学園の卒業パーティーを思い出す。
……いや、それ以上の華やかさか。
「まぁ、たまにはこんな場所も良いか」
歓談する男女の妨げにならないように人の流れに乗って会場をさ迷うと、噴水がある広場に出た。
楽団の曲に合わせ踊る華やかな一団。
僕には縁遠いな……。
少し寂しい気もするが、相手もいないし振り付けも良くわからない。
無理に踊らなくても見ているだけで華やかな気分を味わえる。
金管楽器の旋律、踊る人影。
絵に描いたような華やかさが、そこを支配していた。
「あれ？」

そんな空間に違和感があった。
一人で水が止まった噴水の前に立ち、踊りの輪を見つめる少女。
しなやかそうで、すらりと伸びた手足を、白を基調としたドレスで覆っている。
紫がかった銀髪と儚げな容姿に凛とした雰囲気を身に纏うその姿。一見すると勝ち気な印象も抱くが。
「……」
しかし、広場の灯りに照らされたその顔には微かに寂しげな表情が揺れていた。
華やかな雰囲気が支配する空間で、それが違和感の理由だった。
「……？」
彼女と目があった。
慌てて視線を逸らしたが、彼女が僕を見つめまっすぐやって来る。
「踊らないのですか？」
それが彼女の第一声だった。
「え？」
予想しなかった言葉に一瞬頭が空白になる。
「あら？　何かおかしな事言ったかしら？」
首をかしげる彼女。

「君こそ……君は踊らないの？」
その質問に、
「え？　……ええ、すこし」
彼女のその様子になんとなく納得がいった。
「……君も、地元じゃないんだ」
会ったばかりの彼女になんとなく親近感を抱き話しかけた。
「一人？」
彼女がその言葉に鋭く反応してきた。
「……あら？　早速ナンパですか？」
そのアメジスト色の瞳に強い光が宿る。
「え!?　い、いや…違うよ。ただどうして君みたいな娘がって思っただけで、別に……ごめん」
我ながら呆れるくらい必死に謝っていた。
「うふふ。冗談ですよ、冗談。ええ一人……ですよ。あなたも？」
彼女がその表情に笑みを浮かべ聞き返してきた。
「……まぁね」
研修医としては休みの間もなるべく勉学に励む必要がある。必然的にこういう華や

かな場では独り者になる。
「お互い寂しい独り者ですわね」
　呟く彼女。
「さびしいですわね？」
　そういって彼女は笑う。
　その言葉とは裏腹にその口調は全く寂しさを感じさせなかった。
　つられて思わず笑みが零れた。
　二人の笑い声が少し大きくなる。
「でも、こうやって、旅先で偶然知り合った男女って……」
「？　……何？」
　金管楽器の音が一瞬高くなり聞き取れなかった。
「知り合った男女って」
「うん……」
「……恋に落ちたりしませんか？　それも運命的な恋に」
「え!?」
　突拍子も無い彼女の言葉。
「……でも大抵、どちらかに恋人がいるんですけど……」

「……えっと」

なんと言えばいいのだろう……。

「妹分が書いている漫画とかだとそんな感じですよ」

「……」

「も、もちろん私にはおりませんけど……。あ、あなたは……あ！　お一人でしたね」

「ああ、うん……残念だけどね」

「漫画みたいには、行きませんね」

「……」

「あら？　どうかしましたか？」

「誘ってるの？　ひょっとして……」

「え!?　誘ってなんていませんわ！　言ってみただけです」

「言ってみただけ？」

「そうですわ。……がっかりしましたか？」

「そんなことも無いけど……」

「そんなことも無いのですか？」

暫し見つめ合った後……。

どっちからともなく笑い声が零れた。

「あなた、面白い人ですわね」
　彼女が笑いながら、突然そんなことを言う。
「そうかな」
　面白いのは君のほうだと思うけど……。
　そう言いかけ、ふと、彼女の顔を見る。
　……何処かで見た事があるような気がする。
　次の瞬間、目の前の彼女の名前が浮かび上がる。
　彼女は将来を約束された選手だった。
　確か、【名優】メジロマックイーン……。
「面白いですわ。縁がある限りよろしくおねがいしますね。私はメジロマックイーンと申します」
　彼女がまっすぐ僕の目を見つめ名乗る。
「……メジロマックイーンさんって、あの？」
「ここでも……ですか。あまり特別視されたくはありませんわ」
　そう溜息をつくと、
「……えっと、今更ですけど、貴方のお名前は？」
「僕は比企彰。ここでお世話になっているんだ」

「ここでって……ひょっとして、下の温泉で、でしょうか？」
「ん……そうだよ」
　ここの温泉は難病を患った、或は、再起不能に近い傷を負った人々が最後の望みをかけて訪れる療養の為の温泉だ。決して観光地ではない。
　彼女もその事は知っているのだろう。表情が幾分暗くなる。
「……ごめんなさい。……それで踊れなかったのですね」
「え？」
「だって……。比企様、何処かお身体が悪いのでは？」
　すまなそうな口調。
　療養中と勘違いされたらしい。
「違う違う。……働いているんだよ、温泉で」
「療養とかではなくて？」
　意外だ。というような目で問い直す彼女。
「うん」
「え？　……では職員なのですか？　失礼ですけど全然それらしく見えませんわ」
「……うん、職員とはちょっと違うかな。研修医なんだ。……来年卒業なんだけど就職口がなくてね。トレーナー資格もあるけど、そっちも、ね。仕方ないから、こうやっ

て働いているんだ」
「治療はしないのですか？」
「まだ先輩医師の補助だよ」
「……雛なんですね」
　なかなかきつい事を言う。
「……まだまだ研修中だから」
「ここの出身ではないのですか？」
「うん。メジロマックイーンさんも……地元じゃないよね？」
　灯りに照らされた、紫がかった銀髪が紫水晶と銀が混ざり合った粉を撒くように煌く。
「さん。は不要ですわ。それとマックイーンでもマックちゃんでも好きに呼んでくださいな。ポッチャリーンちゃんとかパクパクちゃんなどと呼んだりしたら引っ叩きますけど」
　少女が悪戯気な瞳で見つめる。
「じゃあ、マックイーンさ……は、何しに此処に？」
「え？　えっと……少し」
　言いよどむメジロマックイーンさん。

「あ……聞いちゃいけない事だったかな？」
「まぁ、その……旅行に」
その言葉に驚いた。
「一人で？　ウマ娘って言っても若い女の子が？」
早速癇に障ってしまったらしく、メジロマックイーンさんが声を荒げる。
「そうですわ。何か問題がありまして？　……その目はなんですか？　何か文句でも？」
勝ち気に見えた通りだった。第一印象が当たる極めて珍しい例だったらしい。
さすが、一人旅するだけの事はある。見かけによらず激しい気性だ……。
「いやいや、文句なんてございません。一人旅、実に結構ですね」
冗談めかして続けた。
「でも……なら、やっぱり誘っていない？　旅の道連れか何かにさ」
一瞬メジロマックイーンさんが目を丸くした。
「……誘ってなんていませんわ。あなたにとっては残念ながら」
苦笑交じりにメジロマックイーンさんが応える。
……実に不思議な気分だった。
テレビで顔を見かけるだけなのに……。

知り合ってから幾らも経っていないのに長年過ごしてきた幼馴染の様に軽口を叩き合い、互いの反応を楽しんでいる。
「それはそれは。残念です」
メジロマックイーンさんが、その大仰な台詞に肩をすくめる。
「お生憎様ですわ」
そう言った彼女の仕草は、驚くほど優雅で、思わず目を奪われてしまった。
「……？　どうかされました？」
顔を覗き込むようにして彼女が話し掛けて来る。
「あ、いや、なんでもないよ」
「あら。隠し事ですか。まぁいいですけど。……でも、あなたこそ、若い男性が一人でこんな所に来るなんてナンパ目的だったのでは？」
「正直言うと、確かにね……。少しは、しようかなって思ったよ。なんとなく来て見たけど、知り合いもいないし、何だか心細くてね」
彼女が穏やかな笑みを浮かべて頷いた。
「心細いのは私も、ですわ……。皆楽しそうな分、余計自分が浮いている気がして」
「実際浮いていたしね……」
「お互いさまですわね」

華やかな舞踏会も最高潮らしい。
周囲の人たちも舞踏に加わり始めた。
「……楽しそうだね、みんな」
「ええ……楽しそうに踊っていますわ」
何気なく彼女に視線を向けると、その表情に最初に見たような微かな陰りが浮んでいた。
「……本当に……悩みなんて無いみたいに、とても楽しそうに……」
「えっ……？」
僕のその言葉に、彼女がハッとした表情になる。
「私たちも踊りましょう」
そう言う彼女の表情から、先程浮んでいた陰りは消えていた。
「え？　……でも、踊れないって……」
「あ、あれ？　嘘ですわ、嘘。……仮にもメジロ家の者が一人で壁の花でしたというのでは格好がつきませんでしょ？」
そう明るく笑うメジロマックイーンさん。
「それに、こういう機会でもないと、こんな所じゃ楽しめませんわよ？　せっかくの舞踏会、楽しみませんか？」

「……でも、踊り方知らないし」
「そんなことですか……それなら私が教えてさしあげますわ」
「え？　知っているの？　マックイーンさん」
　その問いかけに腕を組み睨みつけてくる彼女。
「マックイーン、ですわ。……さん付けは要らないと申し上げましたわ。心の中で『マックイーンさん』って呼んでいるからそう呼ぶのです。礼節は大切ですが、同じ立ち位置でもありませんし。あなたの方が年上ですわよね？　それならば『さん』付けは不要ですわ」
「ご、ごめん」
　慌てて謝る様子を見てマックイーン…が少し微笑む。
「会ったばかりなのに、無作法なことを申しました。……お気を悪くされました？」
　慌てて首を振る。
「ううん。特に気にしてないし……。ただ出来たらもう少し砕けた口調で話して欲しいな。いつもはもっと砕けてるよね。ほら、あの葦毛のお嬢さんを相手にしている時みたいに、さ」
「あ、あれは、その……それにゴールドシップさんは、その気の置けない大切なお友達ですし……」

いつぞや放送されたドッキリなバラエティ番組での言葉遣いの事を話題にすると顔を赤く染めるマックイーンさん。
「コホン、それでは。無作法をお許しいただきありがとうございます。あなた優しいですわね。どうして踊れるかという事でしたら……メジロの一員として舞踏会の踊りは一通り叩き込まれていますわ。卒業パーティーでも、授賞式でも、他の家に招かれた時などなど踊る機会はいくらでもありますし。とは言ってもまさか、こんな所で必要になるなんて思いませんでしたけど」
そう言うと自分の腕を僕の腕に絡ませてくる。
「で・す・か・ら。ほら!」
「わっ……」
「こっちですわ」
マックイーンに腕を取られ踊っている男女の中に入る。
「私の動きに合わせてくださいね。殿方を立てる事も淑女の嗜みですわ」
そう笑うとマックイーンが足を踏み出してくる。
「ほら。……そうそう、いい感じですわ。上手上手」
次第にマックイーンの動きに体が慣れてくると手の振り、足捌きが自然に出来るようになった。

結局、舞踏会が終わるまで踊りつづけた。最後は周囲の注目を一身に受けることになってしまったが。

その興奮が冷め遺らぬまま、連れ立って夜の並木道を歩く。

「楽しかったですわ～」

元気な彼女。

「……僕は疲れた」

立ち止まり、手を膝につき肩で息をしている僕を見て彼女が笑う。

「ペースを弁えずに続けるからですわ」

「……そんなの……考えられないよ。……あんなに興奮しているのに」

「それもそうですね」

笑う彼女を見ながら背筋を伸ばし大きく息を吐く。

こんなに運動したのは久しぶりだった。

「やれやれ……さてっと」

「あ……」

月も傾き、夜も更けていた。ウマ娘とはいえ、若い女性が出歩いていて良い時間でもない。

「そろそろ……」
そう切り出した僕の声を遮るような彼女の声。
「帰りましょう」
暫しの沈黙が辺りを包む。
「今日は楽しかったよ」
「私も……」
マックイーンに背を向け歩き出す。
「あっ。比企様」
振り返るとマックイーンが笑みを浮かべていた。
「私、もう暫らく此処にいるつもりですわ」
頷きを返す。
「また会えたら良いね」

熱い身体を冷ましつつ散策を終え、部屋に戻る。
だが先程までの舞踏会の熱気が未だ身体に残っている。
このほてりを冷まさないとすぐには眠れそうに無い。
寝台に横になり、先程まで一緒だった彼女の事を思い出す。

「マックイーン……か」
儚げな容姿とは裏腹に溌剌としていて全身から気が溢れ返っていた。……その気に飲まれ、つい我を忘れ、踊ってしまった。
「また何処かで会えると良いな……」
そう呟くと身体から力を抜く。
火照った身体に夏の風があたり、心地よい眠気が訪れる。
……今夜はなんとなく良い夢が見られそうな気がした。

第5話

舞踏会の翌日から暫く朝から治療補助に追われる日々が続いた。
ようやく業務がひと段落付き、変更された休暇が取れた。
久しぶりの休暇とはなったものの特に予定も無く、かといって温泉や病院内でうっかりあの二人に出くわそうものならからかわれるのが目に見えている。
という事で朝から近所をうろついていると気が付けば丘の上の庭園に通じる小道を歩いていた。
静寂に支配された小道に、石畳を歩く足音が響く。
舞踏会があったのは先日だったが、賑やかだった面影は跡形も無く、他に人影は見当たらなかった。
「そう言えば……」
この庭園で彼女に会ったんだ……。
先日の舞踏会で出会った彼女を思い出していた。
「……そう言えば暫らく居るって言ってたな」
庭園内を散策する。

「あれ？」
水飛沫をあげる噴水の前に人が立っている。
紫がかった銀色に輝く髪に光が映える。
彼女は何をするわけでもなく、ただぼんやりと噴水を見つめていた。
「……」
近付き、その姿に声をかける。
「……マックイーン？」
「え!?」
振り返ったマックイーンが目を丸くした。
「あ……！」
「えっと……久しぶり、でいいのかな？」
「……うそ。また会えましたわ」
小さく何かつぶやかれたその言葉は良く聞き取れなかった。
「え？」
「こんにちは。また逢いましたわね。えっと……比企様？」
そういって微笑む。
「ああ。彰（あきら）で構わないよ」

「え？」
　きょとんとした顔で見つめるマックイーン。
「だって、呼び捨てで良いって言ってたから。ならお互いにね。それと口調」
「……そう言えばそうでしたわね」
　そう苦笑を浮かべる彼女。
「では彰さ……コホン。どうしたの？　こんな所で」
「いや……なんとなくね」
　雰囲気がなんとなく硬かった。
　当然といえば当然だ。
　舞踏会の晩に一度会ったきり。
　楽しい時を一緒に過ごしても、舞踏会の雰囲気に酔っていただけかも知れない。
　そんな遠慮がお互いにあった。
『また会えたらいいね』
　そうは言ったものの、お互いにまた会えるとは思っていなかったし、マックイーンもそれは同じだったのだろう。
　休暇先での偶然の出会い……そんな風に考えていた。
　少しぎこちない感じで彼女が話し出す。

「ああ……温泉で働いているのでしたわね」
「うん。……そっちこそ、何しに？」
「暇つぶしですわ」
「なんだ。待っていたんじゃないんだ？」
　硬くなった雰囲気をほぐそうと冗談めかして言ってみる。
「誰を？」
　自分を指差す。
「僕を」
「まぁ」
　彼女は一瞬目を丸くすると
「そうですわね。すこしだけ待っていたかもしれませんわね」
　彼女が笑いを含んだ声で言葉を紡ぐ。
　二人の間に在った緊張感が解けたように感じた。
「……何だ、ちょっとだけか。残念」
　大仰に落胆してみせる。
「ん～。それでは、すっごく待っていましたわ」
「……」

「物凄く待っていましたわ、あなたを。ああ、私のロミオ様〜」
笑いを堪える声。
「あまり嬉しくないなぁ……」
その僕の言葉に堪えきれなくなったらしい彼女が笑い声をあげる。
それから暫らく、互いの事を話した。
彼女は夏季休暇を利用し、引退した元トレーナーのところに遊びにきているらしい。
「たまにはのんびり過ごそうって思ってきたのですけど結局暇を持て余して……。あなたは忙しいので……よね」
そう言いつつ悪戯そうな視線を投げかけてくる。
「あ、でも、こんな時間にふらふらしているのなら、結構暇なのかしら?」
「ひどいなぁ。こき使われてやっと貰った休みなんだよ」
「研修医だったかしら?」
「うん。研修医。まあ正確にはウマ娘競技指導教諭資格を有するウマ娘スポーツ医療専門医の研修医」
そう応える。
そう卑下したつもりはなかったのだが、彼女はそう受け取らなかったらしい。
「……もっとやる気出したら如何? それだけの資格をお持ちになっているのにもった

いない。折角の機会なのですから精一杯がんばろうっていう気になりませんか？」
　見かけ通りの威勢の良い彼女の声。
「でも……もともと顔つなぎのつもりで来ているから」
「どういうことでコホン？」
「来年には卒業だし、競技指導教諭資格もあるんだけどそっちでも就職決まらなかったし。卒業後の後の事も考えないと……まぁ、こういう風に顔を繋いでおけば後で役に立つから」
　その答えが彼女の癇に障ったらしい。彼女が幾分眉をひそめる。
「……失礼ですけどそれって私からすると真摯に向き合っていないように見えますわ……」
「そんなことはないさ……」
　煮え切らない言い草に彼女があからさまに嫌な顔をする。
「競技指導教諭《トレーナー》を目指すんですか？　スポーツ医療専門医を目指すんですか？　どっちなの!?　男ならはっきりなさい!!」
「……わからないよ」
「また、あっさりと……」
　呆れたような彼女。

「仕方ないだろう？　まだどちらにも未練があるし、どちらに向いているのか未だ解からないし」
　ずっと胸の内に秘めていた本音。ここで彼女に問いただされるまで……。
　しかめっ面をし、腕を組む彼女。
「良くありませんね、ええ、良くありませんわ！　そういうの。そのまま中途半端な態度だと結局どちらでも通用しなくなりますわよ？」
「断言してくれるなぁ……」
「本当の事ですわ？　何時までも中途半端なままだと、本当にやりたい事がどんどん遠ざかっていくのですわ」
　腰に手を当てる彼女の言葉が勇ましく聞こえる。
「……目指しているものにどんどん離されて、後から来た者に抜かされていくのです」
　わかっていますの？　と首を傾げる彼女。
「……まぁ、そうなんだろうけど……」
　ん？　ふと疑問を感じる。
「……自分はどうなの？」
「え？」
「マックイーンだってそうじゃないの？　休暇でのんびりなんて……」

「あ……」
　そう言えば、というような表情。
「……同類だね」
　微かな勝利感を味わう。
「……私は……」
　一瞬表情が曇る。
　言い過ぎたかな、と思ううちに顔を上げるメジロマックイーン。
「私はいいのです。天皇賞・春の連覇後の特別休暇です」
「……本当に？」
「良いんです！」
「……本当に？」
「良いのっ！　それより、他人の事より自分の事が大切ですわ。今しっかりやらないと後で大変になるのですから！」
　腰に手を当てたまま、
「そうですわ！　今度応援にいってさしあげます」
「応援？」
　言われた意味が判らず、その言葉を繰り返す。

「あなたが働いている温泉に！　ついでにあなたが怠けていないか見に行ってあげますわ」
「えっ!?」
「あそこなら結構近いですし。ええ、そうしましょう」
自分で言って勝手に頷く。
……僕の意見はどうなる？
「え……い、いいよ。遠慮する」
「嫌、なのですか？」
眉間に皺を寄せる彼女。
「嫌って事はないけど……」
「じゃあ決まりですわね」
彼女が満面の笑顔で断言する。
結局押し切られてしまった……。
「差し入れしますから」
食べられる物だよなぁ……。
漫画なんかだとこういう場合は食べられないって事が多いからな。と一末の不安を覚える。

「マックイーン。……大丈夫だよね？」
彼女のアメジスト色の眼に強い光が宿る。
「どういう意味かしら!?　私、こう見えて料理は得意ですわ！　挟むものだけですけど」
「ご、ごめん」
彼女の勢いに押し切られる形で、陣中見舞いの約束が決まった。
彼女ともう一度会える契機が出来たのは良かったと言えなくもないか……。
「いつ頃なら良いのでしょうか？」
空き時間を聞いてくる彼女。
「……昼くらいなら大丈夫かな？」
「温泉の何処ですか？」
「それは……わからない」
「研修医だから？」
笑いを堪える彼女の声。
「……そう」
憮然とした声で応じる。
最初に出会ったときと同じように、小道で別れる。
背中から彼女の声が聞こえる。

「楽しみにしてくださいね！」

そう言い残し彼女は尻尾を振りながら庭園を後にした。

本当に大丈夫なのかな？　さっきはよく聞き取れなかったけど何か言ってたし。

第６話

小鳥の囀りで目が覚めた。
昨日、マックイーンと約束をした後、森を散策するうちに変な所に迷い込み一日を潰してしまった。ちょっと開けた森の広場とか面白い場所や綺麗な泉なんかも見つけたから無駄に過ごしてはいないと思う、うん。
今日から再び忙しい日々が続くのだろう。
気合いを入れ直し温泉に行くと早速患者の整理作業が待っていた。
治療を行なう際の書類を確認しそれぞれの部屋に誘導する。
列が無くなる頃には既に日も中空で休憩時間になっていた。
病棟の隣にある庭園の木陰で一息ついていると見覚えのある髪が近付いてくるのが見えた。
マックイーンだ……。
「彰さん。来ましたわよ」
相変わらずその声は威勢が良い。

「……本当に来たんだ」
「もちろん。約束ですわよね？」
　眩しい笑顔。
「はい、これ。差し入れです」
　そう言うと持っていた水筒を手渡してくる。
「冷たいうちに飲んでくださいね」
　自分も持っている水筒を開ける。
「いただきますって……あれ？　料理は？」
　その言葉に、ばつが悪そうにマックイーンが頬を染め、耳がへにゃっとなってくる。
「起きたら、もう時間がありませんでしたわ。きっと時間泥棒に盗まれたのですわ」
　そういうマックイーンをじとーッと見つめていると
「寝坊しました。ごめんなさい」
　手を合わせ大げさな動作で謝るマックイーン。
「いいよ、別に。この暑さであまり食欲もないから飲み物の方が良かったよ。ありがとう」
「そう？　良かった。……冷たいうちに飲んでくださいね」
「うん……いただきます」

二人の声が唱和する。
「ぐぼぉ」
一口含んだら咽た。
「マ、マックイーン！　なにこれ!?　濃縮はちみつ??」
「あら？　テイオー、私の親友ですけど、彼女が大好きで時々作るハチミーですわ。とても美味しいのでレシピを教わってその通りに作りましたのよ？　こちらですわ。ほら【テイオー特製ハチミー：固め濃いめハチミツマシマシ】って書いてありますでしょ？」
「……差し入れして貰ってなんだけど、今度からお茶で良いから、ね」
「あら。それでは最高級の紅茶を準備しますわね」
軽口をたたき、水筒の中身を空けながら、メジロマックイーンが辺りを見回す。
「彰、ここで働いているんですね……」
「うん。いろいろやっているよ」
木陰に入り、水筒の中身を勢いよく飲み干すマックイーン。
あっという間に空になった水筒を逆さに振る様子を見ると、差し入れと言っておきながら自分も相当喉が渇いていたに違いない。それにしてもよくあんなのを飲める。さすが中央で活躍するウマ娘だと感心してしまった。
他愛もない会話で盛り上がっていた所に院長が近付いてきた。

「あっ」
声を上げたメジロマックイーンが持ってきた物を掴み、慌てて隣の木陰に隠れる。
「そこ！　休憩時間はもう終わりだぞ」
院長のその言葉で思ったより時間を過ごしていた事に気が付いた。
慌てて立ち上がり、ふと隣を振り返ると彼女の姿がなかった。
何時の間にか温泉近くに移動している。
「それでは私はこれで失礼しますわ。今日は料理持って来れなくてごめんなさい」
遠くから口元に手を添えて僕に声をかけつつ慌しく立ち去る彼女を見送る。
格好悪い所ばかりを見せてしまったような気がする。
今度会う時はもう少し良い所を見せようという気持ちが起こった。それが功を奏したのだろう。午後からの仕事では随分身が入っていたらしく、先輩からお褒めの言葉を貰う事が出来た。
一日の日課も終わり部屋に戻ってから、ふと考える。
メジロマックイーンと出会ってから、トレーナー受験の勉強にもスポーツ医療の仕事にも身が入るようになった。
そのせいか、あの『ヌシ』ともようやくまともな話が出来るようになって来た。
彼女の事を考えると自然と力が抜ける。

今宵も心地よい眠りに身を委ねられそうだった。

第7話

「よう！　こんな所で会うなんてな」
「うっ、清一さん……」
　先輩医師に買い物を頼まれた帰り道、近道を利用したところで清一さんに出くわした。今日はマルゼンスキーさんと一緒らしい。
「どうだい、調子は？　研修だけじゃなく、あっちの方もしっかりやってるか？」
「ええ。……まぁ……」
　取り敢えず『あっちの方～』のほうは無視することにする。この人を相手にすると疲れる……。
「清一さんは……元気そうですね。今日は病院には行かないんですか？」
「特に用事もないからなぁ……。院長たちは怖いしな」
「……いつも用事もないのに来ているのに」
　つい油断した。見る間に『温泉のヌシ』に邪悪な笑みが宿る。
「言うようになったなぁ、ん～？」
　言いながら僕の頭に腕を回し締め付けてくる。

と、すぐに力が緩められる。
「まあ、その調子であの子の面倒を見てやってくれ。ひよっこ君」
あの子？　……って誰だ？
「あの子、最近ようやく元気になってきたの。あなたのおかげね、ありがとう」
マルゼンスキーさんが頭を下げる。
「あの……マルゼンスキーさん？　あの子って誰の事なんですか？」
誰だか見当もつかないまま尋ねてみる。
「何言っているの。あの子って言ったらマックイーンちゃんに決まっているでしょ。家に遊びに来ているマックイーンちゃんよ」
正直驚いた。何故マルゼンスキーさんがマックイーンの事を知っているんだろう？
「知っているんですか？　マックイーンの事」
「モチのロン。あら？　ひょっとして知らなかったの？　私はあの子がいるチームで現役選手だったし、この人も元々はそのチームのチーフトレーナーやっていたのよ」
マックイーンが遊びに来ている引退したトレーナーって清一さん!?
「へぇ……。そうだったんですか」
「なに？　お前に言ってなかったのか？」
顔を見合わせる二人。

まぁ、不思議ではないか。
マックイーンも二人を僕が知っているとは思わなかったのだろう……。
しかし……。
マックイーンと、この二人が同じチームか……。
意外と言えば意外だったけど、確かに実力派トレーナーとメジロ家と同じ名門のノーザン一族のマルゼンスキーさんがいるチームなら、メジロ家の御令嬢が居てもおかしくはない。
名門が揃ったチームだったのだろう。
ただ、同じ名門でもずいぶん違うとこもあるようだ。特にどことは言わないが。
「あらら～。お・姉・さ・んのどこ見てるのかしら～？　そ・れ・と、何か言いたそうだけど」
胸を上げる様に腕組みをしたマルゼンスキーさんが笑いを含んだ視線で睨みつけている。
気の強さもマルゼンスキーさんの影響があるのかもしれないなぁ。
「い、いえ。ところでマックイーンは今どこにいるんですか？」
互いに顔を見合わせる二人。
「そうねぇ……」

「多分この時間なら森に居るんじゃないかな？」
「あぁ、森ね。……そうね、この時間ならあそこかしら」
「森……？」
「あの子のお気に入りの場所があるらしくてな。確か場所は……」
その森までの道を清一さんに教えてもらい、荷物を届けた後で早速行って見ることにした。
「あっ！　でも……」
何かマルゼンスキーさんが言いたそうだったが、急いで頼まれた荷物を届ける事にして御礼を言ってその場を後にする。
「マックイーンによろしくな」
清一さんの笑いを含めた声が背後から聞こえた。

夏の陽気を木々が遮り、時折僅かな隙間を貫く木漏れ日が大地を焼き、視界に強い色彩を生み出す。
交互にやってくる強い日差しと森の暗さに時に目を細め、或は凝らしながら早足で進む。
「お気に入りって……完全に森の中か……」

だが暫らくすると、風に揺れる木の葉の音に混じり、何か別の音が微かに聞こえる。
その音は森の奥に進むにつれ次第に大きくなっていく。
「……歌？」
透き通るような歌声が、はっきりと聞こえる。
視界を覆う緑の天井が突然途切れ、蒼穹の空が広がる森の広場。
その中心にマックイーンがいた。
「……」
こちらに気づいていないらしい。
歌い終わり、空を見上げると美しく腕を上げ、しなやかに身体を傾け、地面の上を滑るように進む。
軽やかに伸ばした片足を軸に回転すると、紫がかった銀髪が日差しを浴び輝く。
「……」
目を閉じたまま凛とした気配を身に纏い、一心不乱に、しかし空を舞う蝶のような軽やかな動き。
何度か見たことのあるウィニングライブの振り付けだった。
彼女の振り付けは今までに見たどの振り付けよりも軽やかで、それでいて凛とした侵しがたい雰囲気に満ちていた。

その額には汗が輝き、身体が舞うごとに雫となって飛び散る。
その姿に声をかけるのも忘れ、見入るうちに、奇妙な感情が湧いてきた。
「マックイーン……」
彼女と初めて会った時の事を思い出す。
「でも、こうやって、旅先で偶然知り合った男女って……」
「……恋に落ちたりしませんか？　それも運命的な恋に」
「……でも大抵、どちらかに恋人がいるんですけど……」
他者を圧倒するレースとウィニングライブが彼女の恋人に思えた……。
広場を蝶のように自由自在に舞う彼女は、心の底から楽しんでいるように見える。
「……何が暇だよ。全然、暇じゃないじゃないか」
自分が置き去りにされたような焦燥感を感じていた。
一通り練習を終えた彼女が背中を逸らし動きを止める。
今までの激しい動きが嘘のように、最初からそこにあった彫像のようにマックイーンは静止していた。
……綺麗だ。
素直にそう思った。
大きく息を吐き、彫像が動き出す。

彼女の瞳がゆっくりと開き……目が合った。
「え……？」
沈黙が辺りを覆う。
「彰？」
「やぁ」
静止した状態のまま慌てる声を上げるマックイーンに手を上げ挨拶する。
「こんにちは……」
「こ、こんにちは」
事情を把握していないらしいマックイーンが鸚鵡返しに挨拶を返す。
「ご、ごめん……声かけそびれて」
「いいですわ。ちょっと驚いただけですし」
苦笑するマックイーン。
「それにしても、どうやってここに？　散歩しながら来れる場所では無いはず」
「ああ……清一さんとマルゼンスキーさんに教わったんだ」
「え？　二人に？」
「うん……知らなかったよ、君が世話になっているところがあの二人の所だったなんて」
「そう言えばそうでしたわね。あの二人の事、あなたが知らない訳ありませんわね」

思わず苦笑いが出る。
「清一さんは常連だしね、あの温泉の。マルゼンスキーさんもよく温泉に来ているし」
「二人とも全くの健康体なのに。……あの二人でしたか、ここを教えたのは。折角の秘密の場所だったのですが」
「なるほど。確かに面白いね、ここ。僕が迷い込んだ広場によく似てるね」
深い森の中、ここだけが途切れ広場になっている。
少し奥の方には遠目にも冷たさが明らかと思えるほど澄んだ水を満々と湛える泉が輝く。
「ここの他にも同じ様な場所があったのですか。ここは前に来た時、この森を散策していて偶然見つけたのです。それ以来お気に入りの場所ですわ……。それからはお休みがまとまった時に良くここに来るんです」
辺りを見回す。
確かに静かな場所だった。
「道から相当離れているので誰も来ませんし。何か集中したい時はここに来ると集中できるので」
その後、他愛もない話をして別れる。
帰り際に、明日も此処にいますから。とマックイーンが声をかけてきた。

明日も時間があったら来てみようかな。と思った。

第８話

木々が鬱蒼と茂る森。
天使の梯子が架けられた、その下を奥へ進む。奥に進むに連れ光の密度が増す。
頭上を見上げると静寂の中に、森独特の光と影のコントラストが時折瞬いた。
その森の中にある広場。そこにマックイーンが練習している筈……。
「あれ？」
マックイーンの姿は其処になかった。
周囲を見回しても見当たらない。
……昨日より早い時間だから、まだ来ていないのかな？
視界の奥に、澄んだ水を満々と湛える泉が輝いていた。
その泉に視線を向ける。
揺らぐ水面。
波紋を辿って行くと、その中心に一人のウマ娘がいた。
泉の奥まった所に全裸となって、禊でもしているかのような姿が見える。
マックイーン……？

低い潅木が生い茂る方から泉の辺に近付いてみる。
陽の光を照り返す水面に雪のような白い肢体が天に捧げるかの様に独り水面に舞っていた。
マックイーン……。
人の目は周囲になく、彼女は伸び伸びと水を浴びていた。
人目がないからって……警戒心がないのもなぁ……。
見ているほうが恥ずかしさを覚え、立ち去ろうとした瞬間、足元の小枝を踏み抜いた。
乾いた音が森に木霊する。
「だ、誰?」
慌てて水面に沈むマックイーン。
此方を睨みつけつつ、着替えが置いてある反対側の岸に少しづつ動いている。
……これは、素直に出るしかないかな。
「やぁ……」
片手で胸元を隠し此方を睨むマックイーンに、手を上げ挨拶する。
「……」
呆けたように此方を見つめるマックイーン。
次の瞬間、悲鳴が辺りに響いた。

「……本当にごめん！」
平謝りに謝る僕をマックイーンが無言で睨みつける。
「覗くつもりはなかったんだ。ただ、つい見とれて……」
「……そのまま覗いていたわけね」
冷たい声。なまじ可愛いだけに、こうなると非常に怖い。
冷たい静寂が辺りを支配する。
「……二人に話そうかな。あなたに覗かれた事。後、おばあさまにも」
冷や汗が背中を伝わる。
あの二人に伝わったら最後、どんな噂をばら撒かれる事になるやら判らない。
おまけにそれだけでは済まない。メジロ家の御当主の耳に入ったら社会的にも抹殺される。……いや、社会的ならいいが絶対に物理的に抹殺される。考えただけで寒気がする。
「そ、それだけは……」
冷たい視線が僕を射る。
「嫌……？」
無言のまま激しく首を振る。

「命があるかわからないと……」
無言で肯定する。
「……考えないでもないわ。あなたが言う事を聞いてくれたら」
……恐ろしい想像が脳裏を横切る。
「……どんな事？」
唾を飲み込み、宣告を待つ。
「そうね……。あなたが私の特訓に付き合う事」
予想外のものだった。……正直言って気が抜けた。
「そんなことなら」
お安い御用。と言いかけた僕の耳にマックイーンの言葉が響く。
「毎日ね。当然、あなたの研修が終わってからよ？　これを理由にさぼらせないわ。それと、特訓はレースとライブの両方ね？　ライブの練習時はライブ用の衣装も着てもらうし後で確認するから映像も残すわね。レースはあなたトレーナー資格持っているからスタートダッシュに付き合ってもらうわ。サトノ家のダイヤちゃんにお願いしようかとも思ってたけどいい下僕が見つかってよかったわ」
……命がなくなるよりはマシか。
さっさと帰り支度を始めるマックイーン。

「明日から付き合ってもらうから覚悟してね」
凄絶な笑みを浮かべ立ち去る彼女。
研修に加えて、マックイーンの相手を毎日……。
自分の馬鹿さ加減に思いっきり後悔した。

仕事を終え、自分の部屋で寝台に横になっても昼間見た光景が鮮明に思い出される。
水を浴びて輝く雪のような白い肢体。天に捧げるかの様な動きで水面に舞うマックイーン。
……彼女の裸身が脳裏をちらつき、今宵は心地よい眠りに身を委ねられそうにはなかった。

第9話

研修の合間に出来た空き時間を利用し、重い身体を引き摺りつつ森の広場に着いた僕は、既に来ていたマックイーンにいきなり頭を下げられた。
「昨日は申し訳ありませんでした」
「え？　い、いや。悪いのは僕だったし……」
実際悪いのは覗いていた僕だろうし。
「酷い事言いすぎました。他に人が来る事考えていなかったので覗かれる事を考えていなかったのです。頭に血が上ってしまい冷静さを失っていましたわ……」
伏し目がちのマックイーン。
「い、いや……謝られる事じゃないって。こっちこそゴメン。泉に行く前に声かければ良かったんだよ」
「それにあなたに下僕だなんて酷い事を言ってしまって……。私はメジロの面汚しですわ……」
「いいって……悪かったのは僕のほうなんだから」
マックイーンの顔に明るさが戻る。

「許していただけるのですか？　ありがとうございます。やっぱり優しいですわね、彰様。……それで訓練の事ですけど」
「うん……」
　訓練は無しかな？　少し残念だけど。
「はじめは見ているだけで結構ですわ」
「え……？」
「ウィニングライブの振り付けをいきなりやれと言われても無理でしょうから、私の振り付けを一度見て、そのあと私が指導いたします。なれてきたら一緒に踊ってくださいまし」
　……踊るの？　誰が？　僕が？
　そう感じたが、それを口にする勇気はなかった。
「よろしくお願いします」
「お、お願いします……」
　気が溢れるような彼女の声と対照的にどうしても疲れを隠せなかった。
「それじゃ、まずは……足捌きから始めましょう」
　マックイーンの動きに合わせ、暫らく歩いた後で、彼女がそう言った。
　やっと訓練らしくなるのだろうか？

とは言っても、ダンスみたいなものは全く学んでいないんだけど……。
「それじゃ、今日は……」
「うん……」
「本格的な振り付けはやりません」
「え？」
「まずは私に合わせて感じを掴む、ここからですわ」
「う、うん……」
「最初から細かい動きはダンスの経験もない方には無理ですから」
「うん……」
「初めてなので簡単な動きからですわね。そうなると今日はプレイヤーは不要ですわ」
そう言うと持ってきていたバックに少し大きめのプレイヤーを仕舞い込むマックイーン。
「あら？　なかなか……入りませんわね」
詰め込んでいたらしく、いろいろな物が零れ落ちかけている。
……あれって下着かなぁ。
バックから落ちそうな、小さく丸まったストライプの布が視界に入り慌てて目を逸らす。

「ひょっとして……整理とかって苦手？」
「そんな訳ありませんわ!!　私も寮生活しているのです。整理整頓くらい！」
「でも、それ……」
「くっ！　この！　……何かおっしゃいまして？　覗き魔さん？」
「いえ、なにも」
まだ完全に許してはもらえないらしい。
マックイーンの悪戦苦闘の末、ようやくしまわれるプレイヤー。
「じゃあ始めましょう。さ……来てください」
彼女が右手を差し出してくる。
「う、うん……」
多分に遠慮しながら、僕はマックイーンに近付いた。
今更ながらマックイーンが可愛い女の子であることに気付く。
「もっと近く……」
「……」
彼女と向かい合う所まで近付く。
マックイーンが僕の右手を掴むと更に引き寄せる。
「え……？」

「もっと……そう、ここまで」
これ以上近づきようもない。
足は彼女の太ももに密着してしまっている。
「こ、こんなにくっつくの？」
「今日は感じを掴んでもらわないといけませんから」
彼女の息で胸元がこそばゆかった……。
「動きを良く覚えてくださいね」
マックイーンの左手が僕の右腕に添えられ、右手は僕の左手を頭の高さまで上げる。
「さ、始めますわよ……私に合わせてくださいね」
言うなり、マックイーンが左足を引く。
「右足を出してくださいっ」
マックイーンが左足を引くことで出来た空間に右足を差し入れる。
「次、左を！」
マックイーンが交互に足を引くのに合わせて、足を出す。
……歩いているだけとも言う。
でも……それが難しい。
「下を見ない！　そう、その調子……」

「くぅ……」
「背中伸ばす。まっすぐ前見て！」
「え？　うん……！」
歩くだけは出来るようになってくると、彼女の指示がだんだん厳しくなってくる。
「左手下げない！　ダメ！　下見ない！」
次第に汗が滲み出る。
「はい！　後ろ下がる！」
足が縺れ、後ろを振り向く。
「後ろ見ない！　視線はこっち！」
マックイーンの両手が伸びてきて僕の頬を掴んで強引に振り向かせる。
その反動で足がもたつく。
縺れた足にマックイーンの太ももが擦り寄る。
……かなり嬉しい感触だった。
余計な事を考えたせいか、更に足が縺れ、彼女の太ももをかなり意識する結果になる。
「もぞもぞしない！　身体が離れている。ちゃんとくっついて！　くっつかないと体が覚えませんわ!!」
そう言うと、マックイーンが自分の腰を僕の腰に近づける。

「次、前！」
動き難い……。
「しっかり歩いて、背中を伸ばす！　腰を離さない！　この振り付けは鏡合わせの動きが肝です！　私に合わせて！」

息が上がった……。
1時間にも満たない練習が終わると、その場にへたり込んでしまった。
全身から汗が吹き出し、地面に滴り落ちる。
上半身、特に上げたままだった左手は痺れて動かす事も出来ない。
「おつかれさまでした」
マックイーンが声をかけてくる。
「運動不足かな……」
正直、愕然としていた。
歩くだけでこんなに困憊するなんて。
「そんなことありませんわ。初めてならよく頑張った方ですわね」
見上げるマックイーンの顔は上気しているものの、練習前と殆ど変わりなかった。
「正直言って、もっと早く音を上げるって思っていましたわ」

「そうなの？」
「うん。結構頑張りましたわね。偉い偉い」
そう言いながら、頭を撫でてくるマックイーン。
ダイヤちゃんを撫でてるみたいな手つきだな。扱いが完全に弟だ。
「これでもあちこち走りまわされているのになぁ……。歩いているだけでこんなになるなんて。自信なくすなぁ」
不甲斐なさを隠したくて饒舌になっていた。
「……いつもあなたが使う筋肉と違いますから。背中痛いのでは？」
「……引きつってるよ」
「明日は覚悟してくださいね」
「……しっかりと揉んでおくよ。……よっこらせ」
その掛け声に、
「彰さん、お年寄り染みていますわよ」
マックイーンが笑う。
「……で、如何でしたか？　ウィニングライブ、初めてやってみて」
「まだ、やってないよ。これは動き方だけでしょ？」
「ええ。そうですわね」

屈託なく笑う彼女。
「でも参考になりそうだった。これでちゃんと覚えられたら就活にも有利かなって思った」
「ではもう少し続けてみますか？」
「よろしくお願いします、先生」
「いい返事ですわね、彰君」
青空の下、二人の笑い声が響きあった。

第１０話

午前の仕事を終えると、久々の半休だった。
何をしようかと考えたところで、そう言えば。と思い出した。
今日から、空き時間にマックイーンと一緒に練習をする約束だった。
時間にはまだ早かったが、一足先に森に行って彼女を出迎えるのも良いかもしれない。

「やあ！」
森の中を通って広場にきたマックイーンを出迎える。
「あら、お早いのですね」
「まぁね……」
少し照れ臭い気持ちになりながら答える。
実際、少しやる気になっているから。
「昨日は身体で振り付けの感覚を掴んでもらう程度でしたけど、今日からは本格的にしますわよ」

「うん……」
「うん、じゃない。返事は『はい』……でしょ？」
「はい」
「素直で宜しい」
　マックイーンの声に笑いが混じる。
「ま、習うより慣れろ、ですわね。これが終わったら、今日は少しだけ私の訓練にも付き合って下さいね」

「……こんな感じですけど覚えましたか？」
「うん、何とか……」
　マックイーンが見せてくれた動きは単純なもので、何度かやっているうちに流れを頭に入れることが出来た。
「じゃ、今度は見ていますから、一人でやってください」
　たどたどしいながらも、先程の動きをなぞる。

「そうですわ。最初は歩幅とかは気にしなくていいので。うん……いい感じですわね」
　暫らくやっているうちに形だけは真似することが出来た。

「さすがトレーナー資格をお持ちだけのことはありますわね、飲み込みが早いですわ」
動きを繰り返す僕に、マックイーンが近寄ってくる。
「今度は私も一緒にあわせますわ。相手がいても自分の動きを忘れないでくださいね」
マックイーンが僕に向き合う。
僕の動きに合わせて足を動かすマックイーン。
一人の時とあまり変わらない。
でも……。
「あっ……」
「大丈夫ですわ。慌てないでください……」
マックイーンはそう言ってくれるが、俄然難しく感じる。
「えっ……？　さっきは簡単だったのに……あれ？」
悪戦苦闘する僕に、辛抱強く付き合ってくれるマックイーン。
でも、焦れば焦るほど体が動かなくなる。
失敗が重なる……。
「下を見てはいけませんわ！」
躓く度に、頭が真っ白になって立て直せない。
「だめだ……」

自分からやめてしまった。
息が上がってこめかみを汗が滴る。
目眩もする。
マックイーンが声をかけてきた。
「頭で考えてはいけませんわ。彰さん」
「ハァ……」
大きく一度深呼吸をすると、僕はマックイーンの手を取った。
「もう一度……」
「ええ。良いですわよ。何度でも」

苦戦の末、何とかそれらしいものが出来てきた。
「そう、そんな感じですわ。本格的になると、今みたいに大きく回ったりしながら大人数で踊るのです」
練習が終わり一息ついているとマックイーンが覗き込んでくる。
「……え？　……ああ、そう言えば」
「え？　気づいてなかったのですか？　では今度は役割を反対にしてみましょうか？」
「え!?」

「さ、やりましょう！」
　引っ張られるように立ち上がり再開してみたものの、せっかく覚えた順番が頭の中で混じり合ってしまった。
「意外とついて来られてますわね」
「ちょっと待って……」
「頭で考えないでくださいね」
　少しは上達したと思えるものの、結局へとへとになって座り込む羽目になってしまった。
「……やっぱりだめだ……」
「そんなことありませんわよ」
　マックイーンが横に座る。
「まだ始めたばかりで、上出来ですわ」
　言いながら、マックイーンが両足のふくらはぎをしきりに揉んでいる。
「どうしたの？」
「久しぶりのウィニングライブの練習だったので……疲れましたわ」
「え？　自分で練習してたんじゃないの？」
「えっ……そうですわね」

一瞬ハッとしたようなマックイーンの表情。
「え？」
「あ……その……ウィニングライブの基礎の基礎をやるが久しぶりだったので」
「……？」
「……あなたが下手だから気を使ってるのですわ！」
急に怒り出すマックイーン。
……何か悪い事言ったかな？
「な、何？　そんなに怒らなくても……」
「ごめんなさいっ！　……痛っ」
怒りながら謝るマックイーン。
……まだ足を押さえて痛がっている？
「そんなに痛いの？」
「ええ……なんでしょう？」
「どれ……？」
立ち上がり、マックイーンの前に座りなおす。
「え？　何ですの？」
きょとんとする彼女。

「揉んであげるよ」
「い、いいですわ。自分でできます……」
　顔を赤らめる彼女。
「こう見えてもスポーツ診療医の卵なんだから。無料奉仕させていただきます」
　その言い方に、マックイーンが笑い声をあげる。
「それではお願いしますね」
　右足に手を伸ばし、揉み解す。
「痛っ……」
「疲れが溜まっているのかな？　……ここ痛くない？」
「あっ……そこですわ。ええ……湿布を貼っても、なかなか取れなくて。これくらいでお医者様に罹る訳にもいきませんから」
「そりゃそうだね……っと」
「あ、……そこ、です、わ」
「ここね……」
「……あの。……病院の方はどうなんですの？」
　脈絡も無く話題が振られた。
「え？　何が？」

「……どうですか？　頑張っていますか？」
「まぁ、頑張ってはいるけど……急に何で？」
「どちらの道に進むのかなって……」
　そう言えば、どっちにするのかはっきりしなさいって、マックイーンに言われたっけ……。
「よっと……。まぁ、まだ考え中かな」
「もう。しっかり……しっかりしてくださいまし」
「うん、わかった」
　要望通り力を少し強める。
「痛いっ！　ちょっと！　い、痛いですわ！」
　もがくマックイーン。
「え？　だって……しっかりって」
「ち、違いますわ！　あなたの将来の事です」
「え？　……うん、そうだね。でも、今はこっちの方に力が入ってるかな？」
「？」
「うん。マックイーンの練習相手」
「それはうれしいですけど、あなた、本来は研修医なんですから。本来のお仕事の方も

しっかりしないと」
「うん。……マックイーンも頑張ってね」
「え？」
「レースに向けた練習」
「あ……え、ええ……」
「何か手伝える事あったらいって欲しいな」
「え、良いですわ。別に……って、痛っ！　痛いですわ！」
「え？　そんなに力入れてないよ？」
　顔を顰めて足を庇っている。
「そこ、きっと、痛い秘孔ですわ」
「マックイーン、漫画見すぎ。秘孔なんて無いよ。経穴でしょ？」
　押さえたのは右膝より上の大腿部外側。風市・中瀆・足陽関からも外れていそうな何もない場所だった。もちろん秘孔なんてある訳ない。
「とにかく、やめてくださいまし……」
「そういう痛いところに限って、しつこく押したくなるんだよなぁ……」
　もう一度緩めに押してみる。
「痛っ！　……それは医師としての診断なのでしょうか？」

「……」
　無言で首を振る。
「止せば良いのに、固まりかけたかさぶたを剥したくなる、生物としての自然な欲求」
　指を動かしながらゆっくり近づく僕に、マックイーンが顔を引きつらせ後ずさりしていく。
「じょ、冗談ですわよね!?　……や、やめてぇっ！」
　暴れるマックイーンを笑いながら宥め、他の場所を揉み解す。
「ふう……楽になりましたわ。ありがとうございました」
　暫らくしてマックイーンが立ち上がる。
「ま……これくらいはね。いろいろ教えてもらってるお礼って事で」
「私が勝手にやっていることですから。彰さん、物覚えが早いので私も張り合いありますわ」
「そう?」
　お世辞でもそういわれると嬉しくなる。
「スペシャルウィークさんが始めた時より上達早いと思いますわよ?　彼女、最初は棒立ちでしたからね。尤も私たちのチームは……」
　苦笑するマックイーン。

「う～ん。想像つかないなぁ。スペシャルウィークさんなんて『日本の総大将』なんて呼ばれて何度もウィニングライブでセンターを務めているのに」
「皆さん努力しましたもの。テイオーが大変でしたわね、あの当時は……あっ、今の話はご内密に、ね」
「言う相手もいないよ……」
「それもそうですわね……」
　そう言えば。といった顔で見つめるマックイーン。
「とにかく、私は努力することの大切さを、かけがえのない仲間達から教わりましたわ。その私が教えるのですから、覚悟を決めてくださいね」

第11話

あれから数日が過ぎた。
マックイーンとウィニングライブの動きを練習しているうちに動き方の基本がわかってきたような気がする。
「……あっ！」
「きゃぁ」
まあ、時々もつれ倒れたりと失敗もするが。
「そろそろ終わりにしましょう」
マックイーンのその言葉に広場の端へよろめきながら歩き、日陰に腰をおろす。
「おつかれさまですわ！」
涼しい顔のマックイーンが、ねぎらいの言葉をかけてきた。
それに引き換え、相変わらず汗だくの体たらく……マックイーンと比べるのが間違いなのかもしれないけど。
「……喉渇いたぁ！」
無意味に大声を出し、暑さと滴る汗の不快感を紛らわそうとする。

「あ！　そうですわ。少しお待ちください」
　と言うとマックイーンは、持ってきていた背嚢に駆け寄り、何かを探っている。
「飲み物ならここに。……多分温くなっていると思いますけど」
「飲めれば何でもいい……」
　マックイーンが二つの水筒を示し
『特製はちみつレモン』と『アールグレイ』がありますけど、どちらがお好みですか？」
『特製はちみつレモン』って？」
「えっと」
　何やらメモ書きを片手に読み上げるマックイーン
『テイオー様監修。秘伝の至高にして究極の濃厚特製ーー』」
「あ、それならアールグレイおねがい」
「もう。最後まで言わせてくださいまし。まあ、いいですけど。はい、こちらが天皇賞三連覇・ターフの名優メジロマックイーン特別選定茶葉お手製合組アールグレイですわ」
「……長いよ。普通にアールグレイでいいじゃん」
「うるさいですわ！」
　綺麗な弧を描いて水筒が飛んでくる。
「おっと。それでは頂きます」

「はい。召し上がれ」
殆ど同時にふたが開けられる。
「……やっぱり温いですわ。泉の湧水口に置いた方が冷えましたわね」
顔を顰めるマックイーン。
それでも充分美味しかった。
喉を鳴らし、温い飲み物を二人で飲む。
「くわぁ～チョベリグですわ。暑い時はこれに限りますわ～」
マックイーンに似合わない豪快な飲みっぷりとセリフ。
否、これはむしろ、年寄り臭いというのだろうか？　似合わない死語と言いマルゼンスキーさん達の影響だな。
それにしても、と思う。
マックイーンって、一緒にいても気兼ねなくっていいな……。
「どうかしましたか？」
「何か、マックイーンって気兼ねがなくて良いなって」
思った事をそのまま口に出してみる。
「？　どういうことでしょうか？」
「メジロ家って名の知れた名門のお嬢様。それも嫡流に近い血筋なのに、さ。へんに偉

ぶらないし」

「当然のことではありませんか？　確かにメジロ家は名門といえるかもしれませんが、その地位は先祖がたゆまぬ努力を行い、その得てきた富を社会に還元して育て上げてきたものですわ。天皇賞を三代に亘り制覇したとはいえそれはメジロ家に対するもの。国家、社会に何ら貢献をなしえていない一学生の私が偉ぶれる道理がありましょうか？　であれば志は気高くあれども、驕り高ぶる、ましてや他者を見下すなどということはあってはならない事ですわ」

「……実るほど頭を垂れる稲穂かな、か」

その考えに脱帽すると同時にふと頭に浮かんだ疑問。

「何でまだレースに出るの、マックイーンは？　メジロ家悲願の天皇賞三代制覇とマックイーンの天皇賞春の三連覇は達成できたじゃないか。メジロルイスさんみたいにレースとは無縁の人生を送る人もいるでしょ？　マックイーンなら、そんな生き方もできるんじゃないかなって？」

失礼な言い方かもしれない。

ただ、そこまで考えているマックイーンが何でまだ走ることを選ぶのか疑問を感じた。

「少し昔話をしますわね」

少し恥ずかしいですが。そう前置きしてマックイーンが話し始めた。
「清一さんが引退したときのことです。未だデビュー前で、選抜レースすら走ったことのない練習生だった私を引き取った方が私のチームの先代チーフトレーナーでした。そのトレーナーもオグリキャップさんが引退するときにチームを当時サブトレーナーだった今のトレーナーさんに引き継がれてオグリキャップさんと共に引退されました。その時に実績のないトレーナーが率いるチームは大規模に縮小され、残されたチームメイトも私以外は皆移籍や転校でいなくなってしまいました」
どこか懐かし気なまなざしを浮かべるマックイーン。
「そんな時に今のトレーナーさんと、チームをまた大きくしていくと三つ目標を立て、その実現を誓ったのです」
マックイーンが僕を振り返り指を三本立てた。僕はその白魚のような指から視線を外せなかった。
「ただ私には三つの目標と同じくらい大切な、メジロの名を持つウマ娘として果たさなければならない高い目標がありました。それがメジロ家悲願の天皇賞三代制覇です」
指を一本折るマックイーン。
「三つの目標の一つでもあった、この悲願は成し遂げました」
再び指を折る。

「そして天皇賞春の三連覇。これもトレーナーとたてた三つの目標の一つでしたが、これも辛うじてですが成し遂げました」
　天皇賞春のライスシャワーとマックイーンの死闘は前年に繰り広げられたトウカイテイオーとの「世紀の対決」と並び称される位すさまじいものだった。最後はもつれるようにゴール板を踏み、３０分以上にわたる写真判定の末、前代未聞の同着となったことでマックイーンが史上初の天皇賞春三連覇を成し遂げたのだ。
「最後に残った目標は天皇賞春秋三連覇です」
　立てていた指を全て折ったマックイーン。
　でもそれは……。
「簡単でないのは判っています。でも絶対に獲ってみせます」
　そう言い切るマックイーンの横顔は決然としていて、清々しかった。
「すごいな、マックイーンは」
「え？」
「何だか、すごいなって。そう思った」
「夢と言ってしまえば夢ですけど、春は三連覇がかないましたから、残りは秋だけです。秋も連覇しておりますから、あきらめずに進めばきっとかないますわ」
　マックイーンが微笑んだ。

そこには何の気負いもなかった。
マックイーンは手にした水筒を呷って、残りの中身を飲み干す。
「あまりこの目標のことは言わないのですが。……他の人には内緒にしてくださいね？
ダイヤちゃんにもですわよ？」
思わず苦笑する。
「守秘義務の大切さは知っているよ。それにばらす相手なんていないよ、ここには」
「あ、それもそうですわね。ここには私達だけですし。東京に戻ったら……ってやっぱりいますわ、ばらす人」
「あ、そう言えば……」
「東京に戻って会う機会が無くなったからって、ＳＮＳに上げたり記者の方にばらしたりしないでくださいね？」
マックイーンの言葉で、僕は自分達がついこの間親しくなったばかりの他人で、休暇が終われば別れる間柄でしかない事に改めて気がついた。
「……そうか」
何だか寂しくなってしまった。
マックイーンはどう思っているんだろう？
「……」

彼女を見つめる。
「？　……どうかしましたか？」
きょとんとした彼女の表情を見ている限り、あまり意識していそうにはなかった。
「なんでしょう？」
「……何でもない」
マックイーンが眉を顰める。
「？　変な彰さん」

第１２話

マックイーンの目標を聞いてから数日経った。

今日は非番にもかからわず朝から急な呼び出しがあった。

どうも郷の祭で食中毒が発生したらしい。てんてこまいであったがようやく患者対応も一区切りついたので、もともと非番だった僕はそのままお役御免となってしまった。

「半休もらってもなぁ……今更行くところもないし。どうしようかなぁ」

この温泉郷に来るには１日２～３本通る電車と１日１～２本来る貨物列車以外は、崖や切通しでＳＵＶ同士でも１０数ミリ単位でのすれ違いがやっとという幅の峠の一本道（これでも国道だ）を九十九折で延々３キロに渡って越えなければならない。郷に入れば幅４～６ｍの道路が拡がっているのだが。

そんな峠道は大型トラック等からも敬遠され最低限の配送しか行われない。その結果、郷では個人商店や小規模スーパーはあるがコンビニなど都市伝説まがい。カラオケなどの娯楽もないので、娯楽と言えば夕方から開くバーに繰り出すか、温泉に浸かるか、川で泳ぐか森林を散歩するか林道を駆けるかといった自然相手の物となる。

暇をつぶそうとあてもなく散歩していると、
「……今日もお元気そうですね、マルゼンスキーさん」
マルゼンスキーさんに出くわした。
……周囲を見回しても、清一さんが珍しく近くにいなかった。
「あら、彰君。ええ、今日もチョベリグよ。清一さんはチョベリバだけど。今日はここで診て貰っているわ」
「え？　清一さん、どうかされたんですか？」
「ええ。……食中毒、よ」
「食中毒!?」
「……祭で知り合った女の子に茸貰って食べたらしいのよ。まったく……可愛い子に貰ったからって無警戒に茸食べるなんてね……我が夫ながら情けないわ」
溜息をつくマルゼンスキーさん。
大変そうだな……と、同情しているとマルゼンスキーさんの目が変わった。
……しまった。この顔は……。
「いつもマックイーンちゃんがお世話になっているみたいね」
「こちらこそ……」
「で、どうなの？」

挨拶もそこそこに身を乗り出してくるマルゼンスキーさん。
やはり……。
「どうなのって……何です？」
「マックイーンちゃんとの仲よ。最近ずっと一緒よね？　隠しても無駄よ、二人で森で会っているんでしょ？」
「え……ま、まぁ」
……この人は、かつてのチームメイトにも容赦ないのか……？
「ま、私も犬に咬まれるのは嫌だから、若い人同士の事に口出しはしないけど……。もういい仲なの？　……でも、避妊はしっかりしてね」
「な、何ですか、その避妊って！　だいたい現役生とのそう言う行為はダメでしょう！」
「冗談よ。彰君のそういった所、信用しているわね」
まったく……。
確かに僕とマックイーンは『いい仲』かもしれない。
気の合う仲間として、『指導者と教え子』として。
そして……。
そう思ったところでマックイーンの言葉を思い出す。
『東京に戻ったら会う機会がないから』

「マックイーンとはそういう仲じゃないですよ」
「あら、そうなの？」
「はい」
　至極残念そうなマルゼンスキーさん。
「ええ。……それで、今日はマックイーンどうしています？」
「マックイーンちゃん？　ここに来てないかしら？」
「え？」
「確か今朝、そんな事言ってたわよ。……寝ていたからよく覚えていないけど」
　何しに来ているんだろう？　マックイーン。
「そうですか……少し探してみます」
「あら？　甲斐甲斐しいわね。……本当はあの娘と……」
「はい、出来ています」
「やっぱり！　早く知らせないといけないわね」
　今にも駆け出しそうなマルゼンスキーさんに一言。
「嘘です」
　途端に残念そうな表情を見せるマルゼンスキーさん。
「嘘なの？　残念ね……」

「それじゃ。彼女、探してきます」
「あの娘に会ったら言っておくわね。彰君が探していたって」
「お願いします」
……どこにいるんだろう、マックイーン。
病院の待合室や食堂、温泉、敷地内の庭園を周って見たが、その姿はなかった。
「本当にここにいるのかな？　マルゼンスキーさん、寝ていたからよく覚えてないって言っていたしな」
院内の廊下を歩いていると、
「……はい」
聞き覚えのある声がした。
「……どうもお世話になりました……」
マックイーンの声だ。
診療室の扉の向こうから聞こえてくる。
診療室から出てきたばかりのマックイーンに声をかける。
「マックイーン！」
「あら、彰さん。こんにちは」
「マルゼンスキーさんから此処にいるって言われて探したよ。……どうしたの？」

「どうしたのって……少し診てもらっていただけですわ」
「どこか具合でも悪いの？」
「ええ……。少し左足の調子を診てもらっていましたの。もうなんともないそうですわ」
「もう……って、怪我してたの？」
マックイーンの左足を見る。
特に治療した痕跡も見当たらない。
「いつ？」
マックイーンは、僕の視線を遮るように手を振っていた。
「え……。えっと……そうじゃありませんの」
「そうじゃないって？」
「えっと……あの……さっきライブの振り付けしてたら足捻っちゃって」
慌てたような声をあげるマックイーン。
「……」
「此処で診てもらっていましたの」
「大丈夫なの？」
「うん。大丈夫ですわ」

「……本当に？」
「今診てもらっていましたのよ？　大した事ありませんでしたわ」
そそくさと立ち去ろうとするマックイーン。
「あれ？　もう帰るの？」
「……ん～。そうですね。折角だから外来用の温泉に入って帰りましょうか。……あなたも一緒に入りますか？」
「え、えぇ!?」
「嘘嘘。冗談ですわ、それでは」
笑いながら立ち去るマックイーンを見送る。
何だか様子がおかしかった……。
「怪我……してたのかな？」
「していたよ」
「うぉわぁ！」
何時の間にか院長と……清一さんが立っていた。
「お、驚かさないで下さい」
「病院に責任者がいるのが驚かれる事かね？」
「そ、それはそうですけど……何か御用でしょうか」

「用って……普通、医者が病院にいれば仕事だと思うが？」
「はぁ」
「彼女とは知り合いだったのか？」
　院長がマックイーンの立ち去った先を目で指し示す。
「ええ、まぁ……」
「彼女の足の事は知らなかったのか？」
　清一さんが聞いてきた。
　そうだった。そのことを聞かなくては。
「足。マックイーンの足って大丈夫なんですか？　彼女、怪我していたんですか？　治っているって、いつ怪我したんですか？　そもそもどんな怪我だったんです？」
「まあ、待て待て待て。一度に言われても答えられん」
　苦笑する院長。
「まず、彼女の足だが、左足は完全に治っている。それは安心していい」
　安堵の溜息が漏れる。
「彼女がここに来たのは６月中旬だ。その時には左膝の怪我は治りかかっていた」
「左膝……!?」
「知っているんだろう？　天皇賞の結果を」

清一さんが聞いてくる。

「はい」

あのレースは凄まじかった。あの後天皇賞に参加した選手の大半が足に不調を訴え、一時期は選手生命の危険すらあった選手もいたらしい。

「ここには、足が思うように動かない。走れないといってきたのだが……その時はすでに大した怪我でもなかったし、温泉療養の効果もあって今日の所見では完治していた」

思うように足が動かない……？

初耳だった。

僕は何も知らなかった。

清一さんが続けた。

「……偶に院長とも話しているんだ。今あの子が走れないと感じているのは、あの子自身の心によるものじゃないかってな」

「心？」

「まぁな……久しぶりに姿見せた時は声を掛けられなかったな、沈みまくっていてな」

「沈んでいたんですか……？　マックイーンが？」

院長がその頃の様子を話してくれた。

「ああ。診療の際も、最初の頃は目つきは恐いし親の敵みたいに睨みつけてくる。随分

と手を焼かされたよ。名家のウマ娘っていうのはこんな感じなのかと思っていたんだが……。必要最低限の会話が出来るようになってきたのはここ数週間だな」

「……」

「実際、さっき話しているのを見るまで、あんなに喋る子だったとは知らなかったぞ」

そう言って苦笑する院長を見やり、清一さんが笑いながら後を引き取る。

「随分仲良くしている様だな、おい」

頭に手を回し、締め付けてくる。

「えっ……って何言っているんですか、僕は彼女とは別に……」

「ほぉお？　なら森で何しているんだ？」

その様子を見ながら院長が苦笑している。

「なるほどな。……仕事の方もその調子で頼むぞ？　んん？」

誤解されている様だ……。

「もう一点。彼女は左足を庇うあまり、右足に負担がかかっている様だ」

「負担が……？」

「今のところは問題はない。ただ、彼女には注意するように言っておいてくれ」

「はい。……でも大丈夫なんでしょうか、マックイーン」

「私の診察に不満な所でもあったかい？」

院長の片眉が上がる。
「いえ。そういう意味ではなくて……」
慌てて取り繕う。
「そんなに心配なら自分で確かめればいいだろう？　触診なり何なりしてな」
清一さんが笑う。
「清一さん！」
「おっと、失敬。もうとっくにしているか」
清一さんが高笑いする。院長まで……。
院長、僕は貴方の甥なんですが。もう少し甥を信用して貰っても良いんじゃないかと……。
「清一さん、その辺にしておきましょう。あなたも今は病人なんですからね。入院手続きに行ってください」
なおも笑いながらそういう院長の言葉に、清一さんはばつが悪そうに、受付の方へ立ち去った。
まったくあの人は……。
「マックイーンが、足を怪我していた……」
一言も聞いていなかった、そんな事は。

「何故、足を捻ったなんて嘘を……。治っているなら問題ないけど……」
何となく釈然としない気持ちは残ったままだった。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
翌日、マックイーンの動きはいつもと比べると精彩を欠いていた。
それとなく聞いた所、清一さんの入院が原因らしい。
そう言えば、マルゼンスキーさんも何処となく元気がないし……。
そう考えると、いつものように森で。とは行かず、清一さんの退院までは僕も本業に専念する事にした。
「清一さん！　そっちは女性用の浴場です！　入らないで下さい！」
先が思いやられるが……。

第13話

「彰さん、随分逞しくなりましたわね。自分でも判るのではありませんか？」
そう言われたのは清一さんも無事退院して、久しぶりにマックイーンに森で再会した日だった。
「そ、そんなこともないと思うけど」
謙遜して見せたが、実際自分でもかなり体力はついてきているように思える。
「ウィニングライブの振り付けへの理解度もだいぶ成長して来ていると思いますわよ？」
「そ、そうかな……」
「まぁ、新人トレーナーよりはまし。という程度ですけど。でもこの何日か、凄い集中力でしたわ」
「指導者の腕が良いからね」
お世辞でもなんでもなくそう言うと、マックイーンは爽やかな笑顔を見せた。
「私、他人に教えるのは初めてでしたから本当は少し不安でしたわ……」
「へぇ……初めてには見えなかったよ」

「チームでは自分の事で必死でしたから、テイオーの様に他人に教えられるところまでは……」
「そうなんだ……」
「でも、いいですわね。こうしてレースの勝敗に関係なくのんびり他人を教えるというのも」
「僕は全然のんびり出来なかったよ……」
「そうですわね……」
　マックイーンが、笑いながら頬の汗を拭う。
「おかげさまで、久しぶりに思い出せましたわ。初めて先輩方のウィニングライブのステージを見た時の気持ちを。今みたいに勝敗に追われていなかった頃の気持ちも……」
「……」
「彰さんのおかげさまですわ。……ここに来て良かった」
　その彼女の言葉に僅かに寂しさを感じるのは何故だろう……。
「少し帰りたくなくなってしまいましたわ」
　僕はレース場以外での彼女を知らない。まして、学園でどんな風にマックイーンが頑張っているかなんて全く解からない。
　だけど……。

「足……」
「え？」
「足は、大丈夫なの？」
　マックイーンは春の天皇賞で怪我を負っていた。その事はレースを見た僕も知っている。とっくの昔に治っているものだと思っていた。まさか最近まで治っていなかったとは。
　けど、その怪我の事をマックイーンは僕に話そうとはしていなかった。
「足？　え、ええ……大丈夫ですわよ？　言ったと思いましたけど……ただ捻っただけだと」
「……でも、その怪我、本当はここでしたんじゃないだろ？」
　微かにマックイーンの顔が曇る。
「え……」
「春の天皇賞で……」
「何で……。なぜ彰様が御存じなのでしょうか？」
　マックイーンの態度がよそよそしくなる。
「何でって、僕だってレースは見たし、これでもここで働いている研修医の端くれだからね。それに院長達に聞いたんだよ。左足はもう完治しているって事も」

「……」
「初耳だったよ。それに……」
　これ以上話すのは怖い。でも……。
「走れないって、思うように足が動かせないってどういうことなんだよ？」
「……！」
　マックイーンが身を竦めるのがわかった。
「怪我は治っているのに、走れないって……」
「そんなこと、彰様が気にかける事でもないですわ。……なんでもありませんから」
　俯くマックイーンに、僕は言葉を続けた。
「ねぇ……マックイーン。僕にできる事が有ったら言ってよ」
　俯く彼女。
「マックイーン。何があって、ここに来たのかは……」
　言いかける僕をマックイーンの言葉が遮る。
「そんなの、あなたに関係ない事ですわ！」
「え……？」
「……必要なかったから言わなかっただけです！」
　拳を握り締め、マックイーンが激昂する。

その豹変ぶりに戸惑うしかなかった。
「関係ないって……マックイーン……」
「実際、関係ないですわよね!? 余計な詮索はしないでくださいまし!」
呆然とする僕にマックイーンがハッとした表情で顔を上げた。
「……ゴメン」
後悔の色を見せ、俯く彼女。
「……マックイーン、関係ないなんて言うなよ。せっかく仲良くなれたんだから……僕にできることだったら何でも……」
何も言わないマックイーン。
「だから……マックイーン」
「……ないですわ」
絞り出すようなマックイーンの声だった。
「え?」
「出来る事なんてないですわ。わからない……あなたには私の事なんてわからない……」
「マックイーン……」
「私の事、何も知らないくせに……!」

「ああ！　知らないさ！　わかる訳ないだろ！　そっちが隠してたんだからな！」
僕も思わず声を荒げてしまう。
「そんな風に言われたら僕にできることなんてないよ！　したくったってね！」
だめだ……熱くなると歯止めがきかなくなる……。
「して欲しい事なんてありませんわ！　放っといて！」
マックイーンの声は震え、目に微かに滲むものが見えた…気がした。
「私はっ！　誰にも、何にも欲しいなんて思っていない！　お節介は迷惑なだけ！」
「マックイーン……」
「……お帰り下さい」
「え？」
「帰ってください。……かえってください。……帰って。……帰ってよ！」
マックイーンが両手で僕の胸を突く。
「……マッ」
「帰れぇぇッ……!!」
何度も小突かれ、追い立てられるようにその場を後にした。

……どうしてなんだよ、何故なんだよ、マックイーン。マックイーン!!　マッックイーーン!!!!

第１４話

昨日の事が気になりつつ、いつもの森へ足を運んだ。
何やってるんだろうな……。マックイーンがいるとは思えないし、いても何て言ったら良いのかわからない。
森が途切れ、広場が見え始めた。
そこに、ウマ娘の影がいつもと同じようにあった。
……いや、よく見ると影は二つだった。ウマ娘の他に……。
「清一さんとマルゼンスキーさん……」
マックイーンの姿は見えない。
……やっぱり、来てないのか。
二人が僕を見つけたらしく、一歩、また一歩。と歩を進めてきた。
「こんな所で待ち合わせか？」
「え？　……いえ、散歩がてらに……」
「来るような場所じゃないと思うけど？　マックイーンちゃんと待ち合わせかな？」
そう言って僕の言葉を引き取るマルゼンスキーさん。でもその表情が何時もより暗

い。

「時間、空いてるかい？」

清一さんの声。

「はい……」

いつもと若干違う雰囲気の清一さんの声に、違和感を持ちながら答える。

「そうか……。なら、少し話を聞いてもらおうかな、彰君」

清一さんが真剣な表情を見せていた。

「……昨日、あの子が帰ってきてな」

いつになく真剣な眼差しだった。

「食事も摂らずにそのまま部屋に閉じこもっちまったんだ。どうしたのかと思っていたんだが、暫らくするとな、そこから押し殺した泣き声が聞こえるんだよ。……俺達も驚いてな、扉を開けさせようとしたんだが、俺とマルが幾ら言っても開けようとしない。……あの子は昔から気が強くてな。どんな事があっても人前で泣いたことがないんだ。少なくとも俺とマルは見たことがない。私は名門メジロ家の者です。名門の者は無闇に他人に涙を見せてはならないのです。そう言ってな。あの娘は、無理して何でも背負い込んで自分を鎧って……。それが声を押し殺して泣いているんだよ……。落ち込んだ表情を見せても、泣く事はなかったあの子がな……」

マックイーンが……。

「何があったかは聞かない。無理に聞くことでもないだろうからな」

清一さんはそこまで言うと溜息を一つ吐き、これまでにない真剣な表情を僕に向けてきた。

恐い……。

その貌から、その眼差しから、普段感じた事のない、押し潰されそうな威圧感を覚える。

この人が、常勝不敗のチームを育て上げ一流トレーナーと言われたこの人が、真剣になった時の本当の恐さの、その一端を見たような気がした。

「だがな、あの子は俺にとっても娘のようなもんだ。……もし、あの子を悲しませるような事があったら、俺はそいつを許さない」

清一さんの初めて見る表情は正に『父親』の顔だった。

「……彰君。マックイーンちゃんをどう思っているの？」

マルゼンスキーさんの真剣な眼差しが僕を射ぬく。

「正直分かりません」

「そう……。でも、これだけは覚えておいて。いつか、あなたも決断を迫られる時が来るわ。……その時、どんな答えを出すにしても、あの子を不幸にすることだけはしないで」

少し間があってからマルゼンスキーさんがそう言った。
「行きなさい。あなたなら解かるでしょう、あの娘が何処にいるのか」
二人の想いが……。
「……彰君、私達の『娘』をお願いね」
「はい」

＊　＊　＊　＊　＊

マックイーン……。
心当たりの場所に向かう前に一応探したが、森の中の何処にもマックイーンの姿はなかった。
やはり森にはいない……。
「……マックイーン。……やっぱり君はあそこにいるのか？」
マックイーン、君をこのままにしておくわけにはいかない。
あの場所にきっと……マックイーンはいる。

第１５話

夕暮れの噴水。
そこに彼女は佇んでいた。
しなやかそうな手足を伸ばし、いかにも勝気そうな彼女。
けれど……その横顔には寂しげな表情が揺れて……。
「……マックイーン」
こちらを向く彼女。だが、その顔からその表情は消えていない……。
「……あっ……」
「……ひょっとして」
何も言わずただ此方を見つめる彼女。
「……待っていた？」
「……ええ」
噴水を見下ろすベンチに腰を下ろす。
ゆっくりと流れる時間。
「……謝ろうと」

彼女がポツリと話す。
「……」
「この前の事」
マックイーンは、ベンチに座ったままじっと下を向いて話していた……。
「うん……」
「でも……行けませんでしたわ。あなたの所」
「うん……」
「だから……ずっとお待ちしていました。……きっと来てくださるような気がしていましたから」
「そうか……」
二人は此処で出会った。
マルゼンスキーさんに言われ、真っ先に考えた場所がここだった。
だから……。
……そんなことは言う必要がない、言わないでもわかる筈だから……黙って彼女の隣に腰を下ろした。
「……マックイーン」
彼女は膝を抱え、背中を丸めている。

夕日に照らされたその姿はいつもより一回りも二回りも小さく見えた。
「……怪我していたこと……黙っていてごめんなさい」
「いいよ。もう、気にしてないから」
「でも、ごめんなさい。言わないと気が済みませんから」
微かに震える声。
「ごめんなさい……彰さん」
重ねられる謝罪の言葉。
しかし、マックイーンの目は伏せられたままで、此方を見ようとはしなかった。
「……マックイーン」
そのまま暫らく時が流れた。

「……逃げてきたんです」
唐突にマックイーンが話し始めた。
「……いつかお話ししましたわよね、目標の話」
「うん……」
「……次の天皇賞」
「うん」

「次の天皇賞で勝てればトレーナーと約束した三つの目標をすべて果たすことができたのです。……でも私は春の天皇賞で大きな怪我をしてしまいましたわ」
目を閉じるマックイーン。
その時の光景を思い出しているのだろうか。
「天皇賞で一着は取れました。……でもその時には私の足はもう……」
「……」
「怪我が治っても、足が思うように動きませんでした。……悔しかった、ここまで来てって」
俯くマックイーン。
「何度も何度も自分の足を叩きましたわ。動いて、動いて……ここまで来たのにって」
膝を抱え込む腕が震える。
「ここには逃げて来たのですわ。……あそこには居られませんでした。皆が気を遣って腫れ物を扱うみたいに心配してくださいました。……それが私には辛かったのです。走れない私には、何もありませんでしたから」
「……マックイーン」
マックイーンがゆっくりと首を振り、僕を見た。
「でも、今はもう、平気ですわ……。思い出しましたから、最初の気持ち」

「最初の気持ち……」
「ええ。一番最初の……気持ち」
　そういって僕を見つめるマックイーン。
「メジロの皆で屋敷のターフを走り回って。それだけで楽しかったあの頃の気持ち。……彰さん、あなたのおかげですわ」
「僕の……？」
「ええ。……本当に楽しかった。最後は喧嘩になってしまいましたけど、……でもおかげで決心がつきましたわ」
「決心……？」
「ええ。やっぱり逃げてても駄目ですわ。言いましたわね、私。誰にも何もして欲しくないって。……その通りでしたわ。そうでなければいけませんわ」
　自分に言い聞かせるように、マックイーンは自らの決心を話しつづける。
「私が立てた目標ですもの。誰かを頼りにしていては駄目ですわよね、甘えていては……ひとりで頑張らなくては」
　決意を固めるように一言、一言、ゆっくりと……。
「彰さん。私、東京に帰りますわ。勝利を義務付けられたメジロのウマ娘として責任を果たしたいのです」

「マックイーン……」
「……」
小さく頷くマックイーン。
その口元には決意がある。
「ここに来て良かったです。あなたに会えてよかった……。いい休暇でしたわ……」
「……」
「ありがとうございます、彰さん」
微かな笑みを彼女は浮かべた。
「……マックイーン」
「もう行かなくては」
夕陽の色に染まるマックイーンの横顔。
そこには決意があった。
しかし、そこにはそれと同じくらい、彼女の決意と同じくらいの……。
「待てよ。マックイーン」
決意と同じだけの寂しさが溢れていた。
「え？」
その言葉に、マックイーンが振り向く。

「待てよ」
その言葉を繰り返した。
思わず口をついて出た言葉だった。普段なら言わない言葉だった。
何故そんなことを言ったのか、自分でもわからない。
「本当にいいのか？」
「……何がですか？」
マックイーンが僕を見つめる。
何を言いたいのかわからない。といった様子だった。
自分自身、何を言おうとしているのか、解らないまま話し続ける。
「それで、構わないのか？」
今もマックイーンの横顔に湛えられ、彼女が決意を語った時ですら消える事のなかった寂しさが、何かを訴えかけているような気がした。
――マックイーンをこのまま行かせてはならない。
そんな言葉が脳裏にうかぶ。
「何で……。何故そのようなことをおっしゃるのでしょうか？」
マックイーンはその『何か』を飲み込もうとしている。
その『何か』を押し殺したまま行こうとしている。

『……ひとりで頑張らなくては』

マックイーンはそう言った。

今、このまま行かせたら、マックイーンは、彼女は本当に『独り』になってしまう。学園に帰って、トレーナーと一緒に、好敵手たちと一緒に、仲間達と、メジロ家の皆と一緒にいても、彼女は『独り』になってしまう……。

「マックイーン……」

「……」

「行くなよ、マックイーン」

「えっ……」

「行っちゃ駄目だ」

「どうして……？」

マックイーンが訝しげに見据える。

「何をおっしゃってるの？　彰さん……」

「なぁ……。ここに逃げてきたって言ってたよな……」

「ええ……」

彼女は言っていた。

ここには逃げてきたと。

そして逃げては駄目だと気付いたと。
しかし……。
「僕には……マックイーンが、今ここから逃げ出しているように見える……」
「……っ！」
目を見開いて言葉を失うマックイーンに、続けた。
「ここから、じゃないかもしれない。……もしかしたら、君は、君は自分自身から逃げ出そうとしているんじゃないか？」
「……っ！」
こちらを睨む様に彼女が振り向いてくる。
「そんな気がするんだ……」
マックイーンの眼に力が篭る。
でも僕には……幼子が道に迷って泣いていて、でも無理をして強がっている。そんな眼にしか見えなかった。
「なにを……」
「マックイーン……」
「何を勝手に……解ったような事を……私は、走らねばならないのです……こんな所で時間を無駄になんか出来ませんわ」

搾り出すように呟くマックイーンの声が、少しづつ大きなものになっていく。
「こんな所で暇を持て余しているあなたと……あなたと遊んでいる時間など無いのです！」
「……やっぱり、君は……」
そうやって、一人で抱え込んで、自分を鎧って、今まで生きて来たのか……？
弦を張りっぱなしの楽器はいつか壊れる。
……マックイーン、無理しすぎだよ。
「何がやっぱり、ですか！　もうたくさん！　関係ないでしょ、あなたなんかに！」
マックイーンは怒りに任せ、この前と同じように尖った言葉をぶつけて来る。
……不思議なほど冷静だった。冷静に、今の自分が彼女に出来る事を探していた。
今、僕にできること……。
「放っといてください、邪魔しないで！　私は走らなければいけないのです。走って、天皇賞で勝利して……。それ以外は不要です！　そのために私は走ってきたのです。
……これからだって！」
「……だったら……」
「……何よ？」
「だったら走ってみろよ、マックイーン。ここで走ってみろよ」

「え……？」
「賭けているんだろ？　次の天皇賞に。……走ってみろよ、俺と。見せてくれよ、君の走りを。……俺と走って勝てたら、俺はここから消える。……さぁ、走ってみろよ」
「……」
マックイーンは頭を巡らし、足元の石畳を見やった。
「……走れるんだろ？　立って、俺と走れよ」
その言葉に押されるように、マックイーンが身を乗り出す。
身体を起こし、ゆっくりと立ち上がろうとする。
「……あ……ぁ……」
マックイーンの肩が小さく震えだした。
目を閉じ、何度も首を振る。
「早く走れよ、でなきゃ君はずっとこのままだ。……走って勝ちたいんだろ？　高がヒトの俺に勝てないようじゃどんなレースでも勝てない。……だから、走って見せろよ、俺と！　マックイーン！」
「あ……あぁ……あ……」
中腰になったままの姿勢で、マックイーンは凍りついたように動かない。
「マックイーンっ!!」

「いっ……いやぁぁっ！」
悲鳴をあげ、その場に蹲る。
「ああ……ああ……あああっ……！」
そして、彼女は子供のように泣き出した。
「……走れない……走れないのよぉ……。私、走れない。走れなくなっちゃった……」
嗚咽混じりのマックイーンの声。
「……自分しか頼れないのに、頼っちゃいけないのに……わからないよ。……私、どうすればいいの？　わからない、わからないよぉ……！」
「……マックイーン……」
「わからない……よ……」
僕は泣き崩れるマックイーンの肩に手を置いた。
「助けて。彰……アキラ……あきらぁぁぁ……助けてよぉぉぉ」
泣きじゃくりながら、マックイーンが僕の名を呼び続け、助けを求めていた……。
＊　＊　＊　＊　＊
「人前で涙見せて泣いたの、久しぶりですわ……」
ひとしきり泣き腫らした後、マックイーンはポツリポツリと話し始めた。
「……この間喧嘩した時もすこし涙出ましたけど……」

「うん。見えてたよ」
「うそですわよね？」
「さて、どうでしょう」
「久しぶりの涙、２回ともあなたに見られたのですわね」
　マックイーンが振り向く。
「そうなるのかな」
「……私、よく考えたら、どっちもあなたに泣かされたのですね。恥ずかしいですわ」
　そう言うマックイーンの頬には笑みがあった。
「……泣いたカラスがもう笑ってるよ……」
　そう言うとマックイーンの頬に朱が差す。
「……さっきはごめん……」
「私こそ、ごめんなさい。酷い事、言ってしまって……ごめんなさい、彰」
「……泣いたら、しおらしくなっちゃってるよ……」
　苦笑する僕を、マックイーンが上目遣いに睨みつける。
　しかしそれは一瞬だけで、またもとの笑顔に戻っていた。
「怖かったです。走れないのもそうですが、それより」
「それより？」

「何とかしないといけないのに、どうしたら良いか解らなくて……でも誰にも言えなくて……」
「一人で抱えすぎなんだよ……マックイーン」
「はい……」
　頷くマックイーン。
「あなたに関係ないと、放っといてっと言ってしまった時、ああ、これで本当に独りになったしまったと思いました。……そうしたらそれが恐くなってしまって……走れなくなる事より、そのことが恐かった。もう誰も私を助けてくれる人はいなくなってしまった、と。ここにも居られないって……でも、彰、あなたは……」
「……」
「あなたは……それでも……」
　マックイーンの瞳から幾筋も涙が流れる。
「……泣くなよ……」
「ん……それでもあなたは私の側にいてくれて……ありがとう、見捨てないでくれて……。ありがとう、側にいてくれて……」
「側に、か……」
「うん……」

「安心するのは早いと思うけどね。一番の問題が全く手付かずで残っているんだから」
「……そうね」
「……大変だよ、これから……」
「でも……」
　マックイーンが柔らかな笑みを浮かべる。
「落ち込んでなんかいられませんわ。私は最強であり続けなければならないのですから」
　微笑むマックイーン。
「それに、何か考えていますわよね？」
「え？」
「あれだけ芝居がかった事して……私を泣かせた責任、とって頂けますわよね？」
「え……。そ、そんな。考えなんて……。それに、ぼ、僕が責任？　……と、取り敢えず、頑張ろう、二人で。……これじゃダメ？」
　マックイーンの思いがけない言葉に、しどろもどろになってしまった。
　……突然そんな事言われても、いい考えなんて浮かばないし……。
　それを見て、マックイーンが目を細めて笑う。
「ひどいですわ。名家の令嬢を泣かせて責任も取らないなんて。……でも、まぁ……何

とかなるでしょう」
微笑むマックイーン。
「……だいぶ、吹っ切れたみたいだね」
「おかげ様で。……取り敢えず、頑張ろう、二人で。ですか」
頬に手を当て何やら考え込むマックイーン。
「ええ、それで良いですわ。気に入りましたわ」
力強く頷くマックイーンに、頷きを返す。
夕陽のせいか、泣き腫らしたせいか、彼女の頬に薄らと朱が差していた。
「……気に入りましたわ。……特に、二人で、という言葉が、ね」

第１６話

いつもの森……。
目の前にいるいつもの彼女……。
ずっと彼女に付き合って……。
僕はどう思っているんだろう。彼女の事を……。
そして、彼女は……。
わからない……。
いつか、マルゼンスキーさんにも同じ事を訊かれた……。
まだ答えは見つからない……。
今は……。
※　※　※　※　※
マックイーンに、二人で一緒に頑張ろう。と言った手前、マックイーンが再び走れるように練習を一緒に行うことにした。
ダメもとで院長に直談判をしたが、報告を怠らない事と詳細なレポートを提出することを条件に患者へのリハビリ実習という名目でお許しを貰えた。

周りの先輩医師達も事情を話すと、ニヤニヤしていたりサムズアップをしていたりしながらではあったが、笑顔で送り出してくれた。

「今の走りは良かったと思うけど、どう思う、ダイヤちゃん？」

僕達は訓練を再開したが１０月末に開催される天皇賞まではもう残り２ヶ月を切っている。

にもかかわらず、彼女は調子を取り戻していない。

限られた時間の中で自分達にできる最良の方法、それがダイヤちゃんも巻き込んだ練習だった。

しばらく前からダイヤちゃんとの交流時間がほとんど無くなり、すっかりお冠だった彼女が森に入る僕の後をこっそり尾行してきて、広場でマックイーンと出会った事が切欠だった。

「それにしてもダイヤちゃんとマックイーンが知り合いだったなんてね」

「私も、まさかダイヤさんが彰と知り合いだったなんて思いもしませんでしたわ」

「あ～！　マックイーンさん、いつの間にお兄ちゃんの事呼び捨てにしてる」

ずる～い。と可愛らしくぷくーっと膨らんだダイヤちゃんの頬を二人で突きプシューとさせる。もう。と笑顔でダイヤちゃんがまたも頬を膨らませ、二人で突きプ

シューとさせる。
そんなことを何度か繰り返しているうちに二人の息が整い終わる。
「んじゃ、２回目行くよ～！　ダイヤちゃんも全力で逃げ切ってね～。用意！　はじめっ!!」
ダイヤちゃんとの追いかけっこを通じてマックイーンは勘を取り戻す。
ダイヤちゃんも追いかけっこを通じ能力の向上を目指し、二人の走りを見て学ぶことで僕もマックイーンの勘を取り戻す手伝いをする。
それが皆で決めた方法だった。

「それでは、私はこれで帰りますね。お兄ちゃん、マックイーンさんをよろしくお願いします」
森の入口まで三人で帰り、別方向に帰るダイヤちゃんを見送る。
姿が見なくなるまで手を振るダイヤちゃんを手を振って見送るマックイーンと僕。
ダイヤちゃんの姿が見えなくなったら、また森の広場でスタートダッシュを行う。というのがいつものパターンだったのだが、今日は……。
「あ、マックイーンさん。清一おじさんからの伝言です。遅くなると狼が心配だから早く帰ってこいよ。だそうです。何で絶滅した狼の事を心配するのか良く判りませんが、

食べられちゃうと大変ですから狼さんには気を付けてくださいね～」
笑顔で立ち去るダイヤちゃん。
ダイヤちゃんになんてこと教えてるんだ、あの人は！
「あ、彰。……その」
顔を赤らめるマックイーン
「帰ろっか……」
「ええ……」
気まずい沈黙の中で大人しく帰る事にした。
※　※　※　※　※
「今日から暫くダイヤちゃん、お休みか」
「そうですわね」
ダイヤちゃんがスクーリングの為1週間ほど練習に来れなくなったと連絡があった。
とは言ってもダイヤちゃんが休みでもやることはあまり変わらない。
マックイーンと一緒にジョギングをし、スタートダッシュを何本か行う。日が昇ったところで一緒に泉で泳ぎ、泉から上がった後は森を散策してダイヤちゃんお勧めの丘の頂上まで登る。森の広場に戻ってまたジョギングをする。
……泳ぐのはそろそろ水が冷たくなってきたからやめようと思った。

ウィニングライブの練習とも違うふたりだけの練習。
二人の間に友情以上の強い連帯感が生まれてくるのを、お互いに感じていたようだ。
「……彰？」
ひょっとしたら……良き訓練相手としてだけでなく……。
……もしかしたら、それ以外の日常生活でも良き相棒かもしれない。
「どうしたの？　彰」
学園を卒業すれば……。
お互いに支えあえれば……。
「彰！」
何か聞こえた気がする。
「何ぼんやりしているの？　……何か変な事考えていたら承知しないわよ！」
……気のせいか。炎天下の屋外で訓練に励んでいた為に見た幻覚だったらしい。
……そうだよなぁ。家格が全く釣り合い取れていないし。
「ごめん……」
「返事は、はい。でしょ？」
「はい……って、ん？」
「なに？」

「変な事……？　変な事って何？」
「え？」
「いや、だから……変な事って何かなって」
「え？　……その……」
マックイーンの顔に一気に血が昇る。
……照れている？
「な……なんでも……」
「幻覚、じゃないみたいだ……」
「もう！」
頬を染め、俯くマックイーン。
「……彰。……練習中……よ」
語尾が途切れ途切れ。
マックイーンが恥らう仕草を……。
目を疑った。
「ご、ごめん……でも……」
後が続かない。……気まずい沈黙が……。
マックイーンが顔を起こし、食って掛かってくる。

「もう！　この……！　もう……まじめに、やってください」
……あまり迫力もない。
照れているマックイーンって可愛い……。
「……雨降って地固まる、だったかな……」
「え？」
「い、いや、なんでもないって」
「……変な彰」
「……よし、もう少しやろう。時間もあまりないし」
「ええ。……それでは、もう２ｋｍジョギングしてその後スタートダッシュを１０本。その後ウィニングライブの練習で身体をほぐして午前中は終わりにしましょう」
……ウィニングライブの練習で身体をほぐすって……どんな体力なんだろう？
僕は身体をほぐすのは別枠でやっておこう。
※　※　※　※　※
「茹だる……」
さすがに炎天下で、実戦さながらの訓練は辛い。
休み無しの連続で練習を行なえる限界は１時間そこそこって言われているが……納得。

流れる汗を拭う。
……拭いている側から汗が噴出する。
……脱水症状に気をつけないと。
「彰、何か飲みますか？」
「あ、ありがとう……動けないから投げて」
「このぉ……怠け者っ」
そんな笑い声と共に水筒が一直線に飛んできた。
「もっと軽く投げてよ！」
「投げましたわよ」
これで、軽くか……。
「お、冷たい……！」
「泉の湧水口に置いていましたから」
「冷たくて気持ちいい！」
「良かったですわ。冷たさが足りないようでしたら泉に落として差しあげます」
「それは勘弁して」
笑いながらマックイーンが隣に腰を下ろす。
「今日はさすがに疲れたかな」

マックイーンも額の汗を拭っている。
「マックイーンも前は汗なんてかいていなかったのにね」
「ヒト相手でしたし、多少は手を抜いても大丈夫でしたから」
「……」
「あ、傷つきました？　でも本当の事ですわよ。でも、もうそんな余裕ありませんわね」
「うん。そうだね」
「それにダイヤちゃんもそうですけど、彰も思った以上に成長して。うかうかしてられませんわ」
「え？」
顔がにやついているのがわかる。
「そ、そうなんだ……」
「ええ。だから……、訓練中にあんな事言わないでください」
そう言うとマックイーンは俯いてしまった。
「マックイーン？」
「苦手なのです、そういうのは……。私、あまりそういうのは好きではないのです……」
「……マックイーン」
「ごめんなさい」

「……そういうのって何？」
「え……？」
「そういうのって何？」
「そ、そういうのって……」
　絶句するマックイーン。
　……少しからかってみよう。
「ね、そういうのって何なの？　マックイーン？」
「そ、そういうのって……」
「ね……マックイーン？　何なの？」
「……ですから、そういうことを言わないでって言ってるのです！」
　勢いよく突き出される両腕。
「わっ……っとっとっと」
　危なかった、もう少しで泉に落ちる所だった。
「危ないじゃないか。落ちたらどうするんだよ」
「え？　落として欲しい。ですか？」
「ごめん……もう言いません」
「まったく……余計な所で疲れましたわ……」

言いながら両足のふくらはぎを揉むマックイーン。
「……揉んであげようか？」
「遠慮します。自分でやりますから」
不機嫌そうな声。
「……痛いの？　そこ」
膨れっ面のマックイーンが念入りに揉んでいるのは、この間も痛がっていた右足。
「ええ。少しだけ」
「例の、痛い秘孔？」
「ええ……力を入れると痛むのですわ。痺れるような感じで……。でも普段は何ともありませんから……」
「怪我したのって左足だったよね」
「ええ。ずっと左を庇っていたからかしら？」
そう言えば、院長がそんな事言っていた気がする……。
「やっぱり揉んであげるよ」
「そう……ですわね。折角専門家がいらっしゃるのですから。それではお願いしますわ」
「しっかり丁寧に揉むよ」

ん？　少しだけ、ほんの少しだけ硬いような？
右大腿部にある経絡の風市を押した時にそんな違和感を受けた。
しばらく気をつけて揉んだけどはっきりとはわからない。
気のせいかな？
「姿勢も変になるしね。怪我を庇っていると」
「詳しいわね。さすが、スポーツ診療医」
……笑っている。からかうつもりかな？
「かっこいいですわね、彰」
「そうだろ」
わざとらしく胸を張る。
「……後は、ヒトに付き合ってるからでしょうか？　ゆっくり走らないといけないので、気を遣って疲労が溜まっているのかも知れませんわ」
「……さっきは成長したって」
「あら？　そんな事言ったかしら？」
すました表情で、そう言うマックイーンが僕に視線を向け、吹き出す。
「……嘘嘘。成長していますわ。それとも……才能でしょうか？　この頃急にアドバイスが的確になってきましたわ。……だから、ね。そんな拗ねた顔しないの」

「そ、そうかな？」
「ま、先生も良いからだと思いますわ」
　そう言って、エヘンと胸を張るマックイーン。
「……って、僕が成長しても仕方ないんだけど」
「え？」
「マックイーンのほうはどうなの？　自分の思い描くレース運び、出来るようになった？」
「う～ん。完全とはいきませんわ。でも……今、こうしている事が楽しいのです。ですからきっと思い出せます。あなたが驚くような勝ち方で優勝して見せますわ」
「頼もしいな……楽しみにしているよ」
「ええ。期待していてくださいね。……それでは、続きをやりましょう」
　と言って立ち上がる。
「もういいの？　もう少し休んだ方が……」
「大丈夫ですわ。身体を動かしていた方がいいのです」
「そう……？」
　彼女の後を追って立ち上がりながらも、胸中の微かな不安を取り払う事が出来なかった。

揉んだ時、他の所と比べて右足の風市が僅かに硬かったような気がする……。

……後で院長に相談してみよう。

「でも……。辛いと思ったら言ってよ。マックイーンは何でも抱え込むんだから。そのために僕がいるんだし……」

「……彰、説教臭いですわ」

第１７話

「大げさだと思うけど……彰」
「うん。……でも、『念には念を』って言うから」
「それで彰が納得するなら、いいけど……」
渋るマックイーンを説得して、僕は彼女を病院に連れて来た。
彼女の脚を詳細にＣＴで走査（スキャニング）してみようと思ったのだ。
昨日、彼女の右足を揉みほぐした時に感じた僅かな風市の硬さ。それが妙に気になっていた。
怪我した左足を庇った疲労が溜まっているのではないか。というのが院長達とマックイーンの意見だった。
僕もその意見に異存はない。
ただ、痛みはさほどでもないのに実際はひびが入っていた。ということは良くある事だし、詳しくＣＴで走査（スキャニング）すれば対策も考えやすいと思ったのだ。
ただ、問題が脚だけでなかったら……。
「彰君、準備が整ったわ。マックイーンさんは着替えるから、こっちに来て」

別室の扉の向こうから、デイジーギャルさんの声が聞こえる。
「え？　着替えるの？」
驚くマックイーン。
そうだよな……初めて走査（スキャニング）される人は、大抵驚くんだよな……。
それに追い討ちをかけるように、
「ええ。……早く来て」
冷たい口調のデイジーギャルさんの声。
デイジーギャルさん、仕事中は大人相手には意図的に会話に感情を込めないからなぁ。
「彰……」
頼りなげな目で僕を見つめるマックイーン。
「行ってらっしゃい。待っているから」
「……うん」
「さ、こっちよ」
頼りなげな動きでマックイーンが別室に消える。
「全身の走査（スキャニング）とは念入りだな……」
背中から声が掛かる。

「院長……。いえ、どうも不安があるもので。特に右足の風市が硬かったような気がするのが」
「……君が感じたというやつか。……屈腱炎か繋靭帯炎を疑っているのかね」
「脊椎の疾患も考えられなくはないですが、それよりはむしろその２点の方が……まさかとは思うんですけど」
「まぁ、いいだろう。骨折などがあれば、それも見つけられるしな」
「お願いします」
「院長」
　扉の向こうから、デイジーギャルさんの声がする。
　どうやらマックイーンが着替え終わったらしい。
「わかった」
　彼女に呼ばれ、院長がマックイーンのところへ向かった。
「……」
　マックイーンが息を呑む気配が伝わってくる。
「やぁ、こんにちは。卵でも医者を恋人に持つと大変だろう？」
「な、何言ってるんですか、院長」
　扉の向こうの院長に声をかける。

「あ、……はい」
院長の言葉に素で返すマックイーン。
「マックイーン……？」
扉の向こうのマックイーンに声をかける。
緊張して余裕がないらしい。
意外だ……。
「おやおや。……まあ寛いでくれたまえ」
院長が準備の為診療室を出ていき、その後にマックイーンが呆けたように此方に歩いてきた。
衝立の向こうの椅子にマックイーンが座ったのを見計らって、覗いてみる。
「きゃっ！　な、なんの真似ですか!!」
薄手の診療服を抱くようなマックイーン。
「……見えませんでした」
「な、何を考えてるのですか！」
「……緊張してたみたいだったから、気分をほぐそうかと」
「ほぐれるわけありませんわ!!」
「そうなの？　……無駄な事したな、見られなかったし」

「な、何が無駄な事ですか！　……全部脱がされているんですから、見られたら大変ですわ」
「……惜しかった」
「後で覚えてらっしゃい……。でも、何で何もつけてはいけないの？」
「ああ、それね。邪魔になるんだ、ワイヤーとかプリントしているものとか。変わったものだと金糸や銀糸で装飾したのもあるらしいし」
「装飾した肌着なんて身に付けませんのに。でもワイヤーが入っているものもダメなのですね」
　溜息を吐くマックイーン。
「……ところで、結構小さいんだね、マックイーン」
「いい加減になさらないと引っぱたきますわよ!!」
　意図的に言ってみたけど、引っかかってくれたようだ。
「え？　意外とマックイーンって気が小さいんだねって……何と勘違いしたの？」
　マックイーンが頬を染めて小突いてきた。
　しかし、良かったと思う間もなく、すぐに、しんみりとなる。
「……こういうところって嫌いなの。学園の健康診断だって嫌なのに」
「この匂い、結構好きなんだけどな」

「ホントに？」
「うん。こういう匂いって好きだよ。『この匂いを嗅いでいたい、だから医者を目指している』って言ったら言い過ぎだけどね」
「それ、変ですわよ、絶対。私は……この雰囲気が好きになれませんわ」
　そんな言い合いをしているうちに院長の声が聞こえた。
「……なんか、ホントに緊張してきましたわ……」
「横になっているうちに走査（スキャニング）するだけなんだからさ。……少し、いや、結構カンカンとうるさいけど」
「それを聞いたら一層早く帰りたいと思いましたわ」
「すぐ済むよ」
「……お手洗いに」
「ついさっき行ったばかりだよね？　我慢して」
「……お水を」
「終わったら食堂で好きなもの飲ませてあげるから」
「彰ぁ……」
　マックイーンが頼りなげな声をあげる。
「……胸、透けてるよ？」

「え!?　嘘!?」
　慌てて前を隠すマックイーン。
「うっそ～。さて、緊張も解けたようだし、行こうか」
「解けてませんわよ！」

　ＣＴでの走査（スキャニング）とその他の検査も終わり、結果がいつ出るかを院長に聞いて診療室を出る。
　マックイーンが待合場所で待っていた。
「マックイーン」
　声をかけるなり、マックイーンが不満げな声をあげる。
「まったく！　失礼ですわ、あの看護師。終わったら何て言ったと思います？」
　なんとなく想像は出来る……。
「はい、良く我慢したわね。とか言うのよ？」
「デイジーギャルさん、子供には優しいからなぁ……」
　笑いを必死にかみ殺しながらそう言うと、
「……子供？　冗談じゃありませんわ、何処が子供ですか」
　胸を張り、初めて会った時よりは成長したと自称しているふくらみを強調するマック

イーン。

……小さいって言った事を気にしているのかな？　実際の話、同世代にしては小ぶりだとは思うけど、気にしてるのか？　って訊いたら殺されるだろうな。

「検査ぐらいでビクビクしているから……」

「あ。そう言えば、検査が終わったら、好きなものなんでも奢って頂けるって……？」

「飲み物だけだよ」

「ケチ……」

「検査が終わった途端、元気になってるよ……。親猫が迎えに来た迷子の仔猫そっくり」

「にゃ～ん」

猫の鳴きまねをし、腕を引っ張るマックイーン。だが……。

「……私、大丈夫でしょうか？」

急に俯き、不安げな声を上げるマックイーン。

「……マックイーン」

彼女の顔を見ていると、今まで押さえてきた物が溢れそうになる……。

『そんな不安な表情をしないで……。本当は、僕だって恐いんだ……』

そう言ってしまいそうになる。

『本当は、僕だって不安なんだ。今だって軽口叩いて気を紛らわそうとしているんだ』

そう言ってしまいそうに……。
そんな重い雰囲気を打ち破るような声が聞こえる。
「あら？　マックイーンちゃんに、彰君？」
マルゼンスキーさんだ……。
となると、近くに……。
「清一さん、今日はいないわよ」
考えを読んだかのようなマルゼンスキーさんの声。
「あ、マルゼンスキーさん」
マックイーンがハッとしたような声をあげる。
「何？　二人お揃い？　あ、ひょっとして……」
詰め寄るマルゼンスキーさん。
「え？　あ、そんなんじゃ……」
マックイーンが焦った声をあげる。
……マルゼンスキーさん、自分で嗾けておいて楽しんでるよな、これは。
「……ま、ご想像通りです」
「ちょ、ちょっと、彰!?」
「まぁ……！」

「ちょっと、彰。あ、あの、違うんです、マルゼンスキーさん」
「……良かったわね、マックイーンちゃん」
「え？」
「良かったじゃない。いい人よ、彰君は。今はこうだけど、この病院の理事長職、継げるのは院長以外は彰君だけだものね。将来性は保証するわ。腕もそこそこありそうだし、ね」
「……マルゼンスキーさん」
　顔を赤らめるマックイーン。
「そ、そうですか？　……そう言われると照れますね。じゃ、行こう、マックイーン」
「な！　ちょっと、待って！」
　無理やりマックイーンを連れて建物を後にする。

「まったく……何て事言うのよ」
「うん。咄嗟に出たんだけど……大成功だったかな」
「成功？　あれが成功？　それに、咄嗟にって、本当に何を考えているの？　マルゼンスキーさん、真に受けていましたわ。……帰ったら何て言えばいいのよ」
「……否定したって信じてくれないって」

「もう……」
「おかげで、あの人から逃げられたじゃない」
「……どうなっても知りませんわよ。マルゼンスキーさん、卒業したテンポイント先輩や財務省主計局にいるトウショウボーイさん、政界入りしているタケシバオー先輩といった方々と連絡とっているのですから」
溜息を吐くマックイーン。
「まぁ……とりあえず、今日はありがとうございました」
「お疲れ様でした。余計な時間、使わせたかな」
「いいえ。構わないですわ」
「……明日からまた訓練再開だね」
「ええ。時間もありませんし頑張りましょう！」

※　※　※　※　※

昨日の予定だった休暇が今日に繰り越された事を、病院に行って知らされた。
「え？　休暇ですか？」
「ああ。昨日の分の休暇だ」
偶々そこにいた院長の言葉。

「でも、昨日は結局……」
「患者を連れて来ていたな。その患者の不安を取るという医療行為もしていた……休んでいたわけじゃない。従って、昨日の予定だった休暇が今日に繰り越されたわけだ」
「え？　ですが……」
「……それに、まだ結果が出たわけじゃない。彼女の側にいて、何か変わった所がないか見ていなさい」
結局、マックイーンといつも通りに過ごす事にした。

練習が一段落し、二人で休憩がてら、だらだらと他愛も無いことを喋り続ける。
「……で、推理ものを二人で読んでいると言われるんです。やっぱりね。って。私は最初からそうじゃないかって言ってたでしょ。って」
「そういうの得意そうだもんな、マルゼンスキーさん。じゃあ清一さんは？」
「清一さんは、男と女の話ですね。私は苦手ですが。こういう話。でも面白い話もありますから。それに、よく当たるのですわ、予想が。不倫、二股、離婚、純愛何でもございれ。という感じですね」
「……わかるような気がする」
何となく光景が目に浮かぶ……。

「……でも、妙齢の女性が不倫だの離婚だのって言う話をしているのもなぁ……。推理ものならともかく……」
「だって、他にやることありませんでしたから。来たばかりの頃は何も無くて暇でしたわ……。スイーツもありませんでしたし」
　ここに来たばかり……か。
　マックイーンが天皇賞での怪我から立ち直れずに、逃げるように学園を出てきた頃の事だ。
　話し相手もいない、一日中読書をする毎日。
「……そりゃ、あの二人も心配するわけか」
「え？　二人が？」
「……何度も、マックイーンを宜しくってみたいな事を言われていたから」
「そう、でしたか……。迷惑かけていたのですね……」
「それほどの事でもないんじゃない？」
「でも、勝手に転がり込んできましたし、申し訳なく思っていますわ。でも、二人とも嫌な顔一つしないで……」
　顔を歪め、鼻をすするマックイーン。
「マックイーンって、結構よく泣くよね」

「泣いてなんかいませんわ!!　これは人の情けが目に染みたからですわ」
汗が目に染みた。だろうに……。
ただ、その言葉は、何となくマックイーンに合っているような気もした。
「清一さんもマルゼンスキーさんも……」
「ええ。気風が良いのですわ、二人とも」
マックイーンの両親は二人とも、マックイーンが生まれてからすぐに海外拠点を飛び回る生活をしている。
その為マックイーンは両親の下ではなく、乳母や専門の保育士がいるメジロ家の育児施設で育てられ、5歳の時には全寮制だった日本トレーニングセンター学園幼年部に自ら入学していたとか。
その時に何かと面倒を見ていたのが清一さんのチームメンバーだったらしい。
「随分あの二人にはお世話になりました。子供の頃は寂しくて夜泣いていたり、骨膜炎などでなかなか練習もできなかったこともあったり、他のウマ娘より手が掛かったはずですから」
メジロ家悲願の天皇賞春の三代制覇を目指していましたけど、初等部の頃は難しいと思っていました。とマックイーンが明るい声をあげる。
「でも、無理ではありませんでした。それからは、努力すれば何とかなるって思うように

なりましたわ」
　努力家にもなりますわよね。と屈託無く笑うマックイーン。
「あ、内緒ですわよ。この話も……」
「ばらす相手がいないけどね。……でも、ばらしてもいいと思うよ、そういう話」
「え？」
　訝しげな顔をするマックイーン。
　彼女は意外と頑固だから、慎重に言葉を選ぶ。
「前にも言ったよね、一人で抱え込むなって。少しぐらい弱音吐いてもいいと思うよ」
「弱音……。でも、気持ちで負けたらそこで終わりですし、負けるの嫌いですから。私」
「何から何まで勝負でも無いんだから。どうでもいい所は手を抜かないと。弦楽器だって弦を張りっぱなしじゃ上手く鳴らないだろう？　……マックイーンはマックイーンが大切にしている舞台でだけ勝てばいいと思うな」
「そうでしょうか……？」
　真剣に考え込むマックイーン。
「うん……でもいいですわ」
「え？」
「だって、私……彰に弱音吐いていますから」

「そうは言っても……」
「いいのです、最初はそれくらいで……。負けず嫌いは親譲りらしいのでそう簡単には直せないと思いますわ」
「親譲り？」
「ええ。両親を知っている親族からよく言われます。負けず嫌いは親譲りだ、血は争えないな。と」
　親譲りの性格と、あの二人の影響が合わさると、こういう風になるのか……。
「……小さい頃から皆で一緒になってワイワイやって……。私は……二人に鍛えてもらってからでしょうか」
　そう言うとマックイーンは、幼い頃からの武勇伝を語り始めた。
「そう言えば、僕も……」

　結局、その日は二人の腕白ぶりを開陳しあって日が暮れてしまった。
「な、何をしているのでしょうか、私達」
　笑いころげたままのマックイーン。
「まったく。とり憑かれたように、こんなに暮れるまで」
「それにしても……」

マックイーンが笑いながら続ける。
「……彰、皆にニガヨモギ飲ませるなんて悪戯しすぎですわ」
「それで薬草の正しい使い方を学んだから。それよりマックイーンも、年上の子泣かすなんて腕白過ぎ」
「おかげで弱い人を放っておけない、面倒見のよさが身についたのですわ」
すまして言うマックイーン。
「……」
「……」
顔を見合わせ、同時に笑いあった。
「初めてですわ。小さい頃の事、こんなに誰かに話したの」
「意外と覚えているもんだね、昔の事なのに」
「私、忘れたままの方が良かったですわ」
互いに笑いあう。
「まったく。よく罰があたらないもんだね」
「……罰、ですか……」
罰――その言葉に口をつぐみ、俯くマックイーン。
「私は……今、あたっているのかも知れませんね」

今日一日忘れかけていた……否、思い出さないようにしていたその内容。
二人の周りを冷たい風が吹き抜けたような気がした。
「マックイーン……」
「……結果が気になって練習にもあまり身が入らないのです。……天皇賞は待ってくれないのに」
明日には検査の結果が出る。
「そんなに心配しなくても。何でもなければそれでいいし、何かあっても、そんなのすぐに治せばいいんだから」
「ええ……」
「今までのレースでは大きな怪我なんかしてこなかったんだし足の痛みくらい何ともないって」
「それもそうですわね。……そうですわ、なんとかすればいいのですわ。何があっても……何があっても、絶対に秋の天皇賞に出る」
「何もないほうが良いに越したことはないけどね」
「もちろんですわ」
笑みを浮かべるマックイーンを見ながら、真剣に願った。
この不安が杞憂に終わるようにと。

第１８話

今日はマックイーンの診断結果が判る日だ。
朝から湧き上がる不安な気持ちを抱えて午前の研修を終えた。

昼の休憩の後。
……僕は病院の一室で立ち尽くしていた。
「……」
院長が何か言っている。
よく聞き取れない。
「……きら君」
映し出された、その映像の一角に当てた指を何度も動かした。
「……彰君」
幾ら擦っても、それは消えない。
「おい……彰君！」
どうやってもそれが消えない。

どんなに力を入れて何度も擦った。
それでも、それは消えなかった。
「比企彰!!」
「……え、あ」
「しっかりせんか、馬鹿者！　こんな時に君がうろたえてどうする！」
「……はい……」
院長が僕の肩を掴んで揺さぶる。
「君は並みの男よりも、彼女にしてやれることが多い筈だ。そのことを幸運に思え！」
「はい……」
「そして彼女の為に、やれるだけの事をするんだ！　……いいな！」
窓から差し込む光が反射して、天井に光を投げ掛けている。
「……」
視界の端で、光が揺れている。
「……今日はもう帰っていい。よく考えて、結論を出しなさい」
「……はい」
居合わせた先輩医師達が沈痛な面持ちで視線を投げかけてきた。
……やめてくれ、そんな表情を見せないでくれ……。

一礼して足早に部屋を出る。
「あら、彰君。こんにちは」
……マルゼンスキーさんか。
「ちょ、ちょっと？　どうしたの」
……背中から声が聞こえる。

気がついた時には既に自分の部屋に戻っていた。
ベットに横になり、天井を見上げる。
「……」
仰向けのまま目を閉じ、またすぐに開ける。
何度も同じ事を繰り返した。
「……暑い、な……」
先程の事を振り返る。

※　※　※　※　※

「ここだ、第五腰椎。ここに発見された」

ＣＴで走査されたマックイーンの映像。
その背骨の部分を辿り、院長が指で指し示す。
そこに、マックイーンの背骨に影が映っていた。
「……腫瘍ですか……」
うわ言のように呟いた僕の言葉に、院長達が頷いた。
マックイーンの背骨の下方、腰の辺りにそれがあった。
「まさか、君の予感が当たるとはな……」
背骨には中枢神経の一部である脊髄や多くの重要な神経が通っている。
背骨に発生した腫瘍は、神経組織に近ければそれを圧迫する事で、痛みや痺れといった症状を引き起こす。
右足の痛みはこれが原因だった。
「畜生！」
腫瘍は良性のものと悪性のものがある。
背骨の悪性腫瘍は良性のものより頻度が高く、その殆どが他の場所で出来た悪性腫瘍の分裂したものだ。
背骨に発生した悪性腫瘍は患者が末期に至った事を意味する。
「元の発生個所は……」

院長がゆっくりと首を振る。
「探さなくてもいい。彼女の腫瘍は良性のものだ。まだ生命の危険はない」
安堵のため息が漏れた。
良性であれば、若干痛みやしびれがあっても直ちに人体や健康に直接的な影響を及ぼすことはない。
無理に取り出さなくていい場合もある。
「まだ安心するな。確かに良性腫瘍の成長速度はきわめて遅い。生涯放置できる場合もある。……だが、彼女の腫瘍は良性とはいえ、大きさもかなりのものだ。そして既に神経を圧迫している。……意味は解るな？」
「……まさか」
院長からの否定の言葉を期待する。しかし……。
「そうだ。このままいけば彼女は遠からぬ将来……走る事はおろか、歩行することもできなくなる」

※　※　※　※　※

「……走る事も、歩くことも出来なくなる……」

マックイーンが歩けなくなる。考えたくもなかった。
「……マックイーン、走れなくなるってさ……歩けなくなるってさ……」
目を閉じる。
それを避ける方法はあった。
一つだけ……。
けれど……それは……。

※　※　※　※　※

「摘出手術？」
「うむ。今の段階で腫瘍を摘出すれば、症状は完治する筈だ。将来に渡っての心配も当面はなくなる」
画像を見つめる院長に代わって先輩医師の一人が説明してくれた。
「……ですが」
「うむ」
僕の言いたい事を察したのだろう……。
先輩医師の一人が深く頷く。

「……彼女は天皇賞に出場するそうだな。もし手術となれば、出場は諦めてもらうほかない」

「……」

画像を見ていた院長が僕の方に向き直った。

「摘出手術を勧める。私が言えるのはここまでだ。後は……」

院長が僕の目を覗き込む。

「……わかるな」

手術に臨めば、彼女はレースを諦めなければならない。

あれほど、目標にしていた天皇賞を……。

「院長、何とかならないんですか！　あなたなら何とかできるんじゃ！　帝都大学医学部で首席を取ってあのヴァルハラでも1、2を争った腕を持つあなたと、あらゆる難病を根治させる奇跡の温泉と言われるこの温泉で療養すれば！」

次の瞬間、僕の口から言葉が迸っていた。

「無理を言うんじゃない。医療も万能ではないのだ。あらゆる難病を根治させる奇跡の温泉と謳われるこの温泉も本当に奇蹟を起こせるわけではない。考えても見たまえ、それだけの奇蹟を起こせるならこの地で天寿を全うできない者はいなくなる筈ではないか。現実はどうかね？　本来、医師の治療というのは患者自身が持つ治癒力を短期間に

最大限、引き出させる行為なのだよ」

先輩医師の一人が宥めるように僕に向かった。

「この温泉が奇跡の温泉と言われる理由は、３つの異なった泉質が数多くの症状に適応する事にある。ここの泉質は特に効能が強く症状の改善の速さが有名だが、結局、最後に頼れるのは患者の体力しかないんだ。わかったかい？」

「……」

そんな……。

「トレセン学園とメジロ家には此方から知らせる。彼女には、君が話しなさい」

院長の言葉が室内に木霊した。

※　※　※　※　※

考えるまでもない。

マックイーンの身体の事を考えれば、摘出をすべきだし、チームのトレーナーやメジロ家の当主、学園の理事長もそれはわかるはずだ。

だが……引き換えに彼女は失いかねない。

失いかけ、ようやく取り戻した、夢への架け橋を。

「……どう話せば良いんだ……」

結果を聞いたマックイーンは、何を考えるだろう。

その時、僕は何を彼女にできるのか。

夜になって、闇が深まっても僕は寝返りを打つばかりで、眠気は一向にやって来なかった。

第19話

「そう、でしたか……」
翌日、僕はマックイーンに全てを話した。
痛みの原因が脊椎に発生した腫瘍であること。
その腫瘍を取り除かない限り、足の痛みは悪化する一方で、近い将来、歩けなくなること。
そして……摘出手術をすれば、天皇賞には出られなくなること。
マックイーンは最後まで取り乱すことなく、僕の話を聞き終えた。
「私の背中に……そんなものが出来ていたのですね……」
手を伸ばし、自分の背中をさするマックイーン。
その指先は小さく震えていた。
「……できる事なら代わりたいと思う」
「そんな決まり文句なんて聞きたくないですわって……前の私なら言っていたところですけど」
マックイーンが僕の顔を指差す。

「彰、いつだって私の事本当に心配してくれているのですね……」
「マックイーン……」
「ほら、目の下……隈ができていますわよ」
　気丈に振舞うマックイーンの微笑が痛々しかった。
「それで……？」
「うん……」
「それで……彰はどう思いますか？　どうしたらいいでしょうか……？」
「それは、僕じゃ決められない。……もう直ぐマックイーンのトレーナーやメジロ家のご当主が来られると思うから、その方の判断に任せるしかない」
　そう言うと、マックイーンは少し悲しそうな顔をした。
「あなたはどう思うのですか？　お婆様の意見に従うとか建前はもう沢山ですわ。そうではなくて私は、あなたの考えを知りたいのです」
　僕は、彼女に対して言うべき事を言った。
「摘出、すべきだ」
「あっ」
　その表情が曇る。
「そうですか……」

小さな溜息が、森を渡る風の音にかき消される。
「そう、です、ね。……彰がそう言うなら、その方がいいのですよね……」
「マックイーン……」
「その方が……良いのですよね……」
目が悲しみを湛える。
「そうです、か……天皇賞、出られないのですね……」
もう一度、か細い溜息を吐く。
「ふ～ぅ……何だか力が抜けてしまいましたわ。目標が無くなって張合いが無くなってしまいました」
「なくなった、なんて言うなよ。治ったらまた出ればいい。……いや、治して絶対に出るんだ」
「ええ……。そう、ですわね……摘出手術ですか。……恐いですわ。……私、検査も苦手なのに我慢できるでしょうか」
「大丈夫。できるよ……」
「入院なんて初めてですわ……。あそこで寝るの不安です……」
「毎日お見舞いに行くよ」
「お医者様は苦手ですわ……」

「皆優しい人たちだよ」
「……彰、さん」
　マックイーンが縋るような眼差しを投げかけてきた。
「何？」
「嘘。じゃ、ないのですか？」
「……」
「本当は、貴方が、『嘘でした～』って言えば、嘘になるのではありませんか？」
　僕は首を横に振った。
　だが、マックイーンはそれが見えないかのように言葉を続ける。
「彰……嘘って言ってください。お願い……嘘だよ、って言って」
「マックイーン……」
　マックイーンに歩み寄る。
「言って……」
　触れ合うくらい、近くへ。
「彰、言っ――」
「嘘じゃない。……嘘じゃないよ、マックイーン」
　マックイーンの瞳が大きく見開かれる。

「あ……あ……い、や……嫌……嫌よ……嫌あっ！」
「マックイーン……！」
「嫌っ！　嫌……いや、……いやぁっ！」
「マックイーン！」
「嫌……いや……よ、絶対に嫌ぁぁっ！」
「また走れるよ、絶対に走れるようになる……！」
「何で……何で今になって、どうしてっ！　もう一度やり直そうって、頑張ろうって、あなたのおかげで思えたのにっ……！　彰、お願い……助けて、何とかして！　私、私……走りたい、もう一度走りたいの！」
　感情を爆発させ、泣き崩れるマックイーンを懸命に受け止め、言葉を掛け続ける。
「大丈夫だ、マックイーン。今がだめでも、まだ、これから幾らでも機会はあるじゃないか」
「そんなの……！　これが最後の機会なの。天皇賞は来年もあるかもしれない。でも、三連覇ができるのは今年だけなの！　私には今しかないのよ！　……やっと……やっと……。後少しだったのに……」
　見開かれた瞳から涙が幾筋も溢れ出る。
　マックイーンの悔しさ、無念さに胸が苦しくなる。

「こんな……こんな風に終わりだなんて……！　嫌、そんなの嫌、何とかしてください、彰！」
「マックイーン……」
「私……天皇賞に出たい。そのまま引退になっても構わない。たとえ……たとえ将来歩けなくなっても構わない……！」
「なっ！」
「構わないから……！」
　マックイーンの肩を掴んで力を込めた。
「あっ！」
　息を呑むマックイーン。
「馬鹿な事を……馬鹿な事を言うな!!」
「彰？」
「歩けなくなってもいい？　ふざけるなっ！　今までやって来た事、自分の努力を投げ出すような事、言うな！」
「……ぁ」
「マックイーン……。君の悔しさ、わかるよ……。君が感じている、その何分の一か知らないけど、それだけでも僕もこんなに悔しい」

「彰……」
「でも……そんな自分を捨てた気持ちで走ってどうなる？　そんな気持ちで走って本当に満足か？」
「えっ……」
「マックイーン。メジロの家訓の事は僕だって少しは知っている。僅かでも可能性があれば最後まで諦めない事、それがメジロの家訓の一つじゃないのか!?」
「あ……」
　いつしか僕の目からも涙が零れていた……。
「それが、良いか悪いかは知らない。でも、それをメジロの一族である君が否定するのか!?　メジロ家の皆はその家訓に従って生きてきたんだろ？　君がその生き方を否定するのか!?」
「……」
「……マックイーン、一緒にやろう。医師としてもトレーナーとしても未熟だけど……僕は君の傍にいたい。傍で君の力になりたい。君がもう一度走れるようになるまで……」
「彰……彰……」
　マックイーンの瞳から、新たな涙が溢れる。

「嫌……嫌よ……彰」
マックイーンは何度も首を振る。
「治るまでなんて、嫌。……走れるまでなんて嫌よ……。私もずっと、あなたといたい……。彰……約束して。……ずっと傍にいて……」
それは……自分の意志ではどうにもならない事。でも……。
「わかっている……ずっと一緒だ」
「彰……」
「マックイーン……」
差し出されたマックイーンの唇に、口づけた。
「……」
接吻を終えても、焼けるような余韻が唇に残った。

第２０話

マックイーンは僕が病状を伝えた翌日から病院に入院し、彼女と仕事中に会う機会も今までより多くなってきた。

病院での研修は、院長達の計らいでマックイーンの付き添いがメインになるはずだったが、当のマックイーンの要望で、いつも通りのシフトになっている。その合間を縫って、マックイーンの部屋を訪れるのが僕の息抜きになっていた。

今日も見舞いを兼ねてマックイーンの部屋を訪れた。

「や、来たよ」

「……遅いですわ」

待ちくたびれたという口調のマックイーン。その周りに、白いメッシュを一房垂らしたどちらかというと美人というよりイケメンな印象を受けるウマ娘、ひときわ目を引く切り揃えられた長い銀髪のウマ娘がいた。

「ごめん。来る前にメジロ家のご当主に会っていたから」

先程の光景が脳裏を過ぎった。

＊　＊　＊　＊　＊

昼の休憩が終わった直後、院長に呼ばれ応接室へ向かった。
応接室の前に見慣れた人影が二つあった。
「あれ？　清一さんにマルゼンスキーさん？　何しているんですか？　此処で」
「おっ！　来たな。……マックイーンのチームメイトとメジロ家御一行様が中でお待ちかねだ」
あっさりとした口調で扉を背中越しに指差す清一さん。
「えっ！」
思わず声をあげた僕に、マルゼンスキーさんが追い討ちを掛けてきた。
「マックイーンちゃんとの一件もしっかりと話しておいたから」
冷や汗が背筋を伝わった。
「……彰君、覚悟を決めておいたほうがいいわね」
……マルゼンスキーさんは沈痛な面持ちをしているけど、これは絶対に面白がっている。目が笑っているよ。

恐る恐る扉を叩くと、中から院長の入室を促す声が聞こえた。
二人と共に、部屋に入る。
そこに、院長と共に、院長と同じような気配を纏った壮年の男性、前に白いメッシュ

を一房垂らし、鹿毛のロングヘアーをピンクのリボンでポニーテールにまとめた小柄なウマ娘と、癖毛を後ろで一つ結びに束ね、左側頭部を刈り上げた特徴的な髪型をしている身長約１８０ｃｍほどの男性、そしてマックイーンが年を経たらこうなるんだろうなと思わせる銀髪の老婦人がいた。

この老婦人がメジロ家のご当主だろう。となれば小柄なウマ娘がマックイーンのチームメイトか。でも、どこかで見た事があるような……。

そのウマ娘に対して清一さんが気軽に声を掛ける。

「よっ！　久しぶりだな、テイオー」

親しげな清一さんの声に記憶が呼び起こされる。

テイオーって、あの二冠バのトウカイテイオー!?

昨年の天皇賞ではマックイーンと死闘を繰り広げた、マックイーンの好敵手。その後脚を痛めて今は復帰を目指してリハビリ中だったはず。この娘がマックイーンのチームメイトだったのか。

「あ、本郷元トレーナー、マルゼンスキー先輩。久しぶり～。あ、そう言えば食中毒――」

本郷？　誰？

「本郷……？」

「マックイーンの元トレーナーだよ。本郷清一。ひょっとしてフルネーム知らなかった

の？　って、き…貴方が比企彰さん？」
心音が一拍子跳んだように思えた。
間抜けな声を発した僕にトウカイテイオーさんが気付き、突然声を掛けてきた。
青い瞳が僕を見つめる。
声も出ずに無言で首を振る。
「あれ？　貴方は喋れないのかな？」
片眉をあげるトウカイテイオーさん。
「失礼しました。ぼ、私が比企彰です」
「そうなんだ。そんなに緊張しないでよ。いつも通りで良いからさ。って言っても僕の方が年下だから友達のようじゃダメだ……ですよね」
「いえ、マックイーンも同世代のように接してますから。同世代と同じで結構ですよ」
「やった！　話せるぅ～」
「こら、テイオー。相手は年上だぞ」
左側頭部を刈り上げた男性がトウカイテイオーさんを窘める。
「いいじゃん。トレーナーのケチ」
ぷくーっと頬を膨らませる仕草に、ダイヤちゃんを思い出して笑みを浮かべてしまった。

「あ、君の事、彰君って呼んでも良い？　僕の事はテイオーでいいから。マックイーンにもそう呼ばれてるし」
「はいテイオーさん」
　トウカイテイオーさんがマックイーンが口にする『テイオー』だったのか。
「え～。さんは要らないよ～。ま、いいか。君が噂の彰君なんだ。……失礼なこと言うけど、とてもマックイーンの心を溶かしたようには見えないなぁ」
　沈黙が周囲を支配する。
　と、その沈黙を打ち破るかのように、ころころと笑い声をあげるテイオー。
「嘘嘘。そうだね……きみならできるかもね。纏っている気配というか雰囲気がとても良いからね。ね。トレーナーもそう思うでしょ？」
　そう言い傍らの男性―トレーナー？　―を振り返るテイオーさんの頭に拳骨が落とされた。
「こら！　失礼なことを言うな」
「あ、痛っ！　ひどいな～何も拳骨落とさなくても良いじゃんか」
「お前が失礼過ぎること言うからだ」
　そんなやり取りを見つめていると、壮年の男性が老婦人に向き合う。
「当主。彼が噂の比企君だそうです。……煮るなり焼くなりご随意に」

笑いを含んだその言葉に、傍らの老婦人がはその相貌に苦笑を貼り付け、
「貴方が噂の、ですか。私がメジロ家当主のメジロアサマです。私にも過度の敬語は不要です。気楽に話してください」
そう名乗ると、値踏みをするように此方を見つめてくる。
「本郷夫妻から話は聞いています。貴方とマックイーンが恋仲のつき合いをしていると。それは事実ですか？　……ああ、別にとって食べようなどとは思っていませんので緊張なさらないでくださいね」
「はい。マックイーンとは生涯傍にいることを約束した仲です」
「なるほど……少し聞いておきたい事があります。宜しいですか？」
「はい」
「不躾ですが……あなたは本気でマックイーンと付き合っていく覚悟がありますか？」
「覚悟……？　覚悟とはどういう……？」
「どういう意味でも構いませんが。そうですね……例えば、ですが。万が一摘出手術に失敗した場合、マックイーンは選手生命を失うでしょう。そうなれば引退させざるを得ません。目標を失ったあの子がどういう状態に陥るかは貴方にも解かるでしょう。……そういう状態のあの子を支えられる覚悟があるのか貴方の口から聞いておきたいのです」

「覚悟……」
　もちろん、ある。
　僕はマックイーンの事を強く想っている。
「どうですか？　貴方はあの子の事をどう想っているのですか？」
「……僕、いえ私のマックイーンに対する想いは……」
「どうなのです？」
「マックイーンは今後も大きな壁にぶつかるでしょう。様々な挫折を経験するかもしれない……」
　メジロの御当主は黙って耳を傾けている。
「だから、傍に居てあげたいのです。仲間として、そして……それ以外の時でも……彼女を守りたい。自分を鎧う事のないように……ずっと……」
　メジロの御当主が、ゆっくりと頷いた。
「どのように支えるつもりですか？　生活の事はどうするつもりですか？　まさかと思いますがあの子に頼りきり等という破廉恥な真似はしないでしょうね」
「失礼ながら見くびらないでいただきたい。マックイーンのヒモになるつもりはありません。進む道は見えています」
　メジロ家当主に対しての言葉ではないと思う。でも、進む道と覚悟は決めている。

マックイーンに頼るつもりもない。そのことだけは伝えておきたかった。
　御当主から視線を外さず見つめ合う。それほど長くはなかったと思う。御当主の視線がふっと和らぎ
「……そうですか。まだまだ若人特有の青臭さが抜けきれていないところも見受けられますが貴方の覚悟は聞かせてもらいました。その覚悟であれば……手術するか否か、比企彰さん、貴方に決めて頂きます」
「え？　そ、それは……」
「先ほどマックイーンの顔を一目見てわかりました。当主たる私がこのような事を言うのも情けない話ですが……。あの子が悩んでいる事を知りながら、みすみす手を拱いていました。今更ノコノコと、当主面しても仕方ありません」
「……いえ、そのような事はないと……」
　僕が口篭もっていると、
「みすみす手を拱いていた、ですか？　学園と交渉して長期の休養期間を作ったり、引退した本郷夫妻と連絡を取ってみたり……。マックイーン様が一番気分転換を図れるこの地を訪れやすいような環境を作り出したのはアサマ様、メジロ家当主の貴女様でしょう」
　壮年の男性が言った。

「メジロ家主治医の貴方にそう言われることはありがたく思います。ですがそれだけの事です。あの子の凍てついた心は溶かせませんでした。溶かしたのは私ではありません。彼です」

そう言うと溜息を吐く御当主。僕に目を向けたまま、

「比企さん、貴方には本当に感謝しています」

「え？」

「あの娘は変わりました……無理して自分を鎧っていたところが無くなっています。……いつの間にか、人を頼り、己の本心を明かせる人を得ることができるようになっていたのですね。まだまだだと思っていましたが……。ありがとう、比企さん」

「あ……い、いえ、僕…私は……」

メジロ家当主が頭を下げるなんて……。

どうしたらいいのか、頭の中が真っ白になった。

「メジロ家当主としてお願いします。……あの娘が一番大切に想っている貴方が決断してください。……貴方なら、あの子を、メジロマックイーンをそこまで想っている貴方なら、最善の方法を選択してくれると信じています。ですから、宜しくお願い致します」

そう言って、メジロ家御当主は僕の瞳を見つめた。

僅かに躊躇した後、僕ははっきりと答えた。

「はい……承知しました」

＊　＊　＊　＊　＊

ふと我に返ると、マックイーンが僕の顔を見つめていた。

思考の底に沈んでしまっていたらしい。

「何、何か考え事？」

「……少しね」

「そう……」

少しの間、僕の顔を見つめていたマックイーンが、身体の前で両手を伸ばしながら言った。

「……おばあ様がいらしてたわね」

「うん」

「……それで」

何か言いかけたマックイーンを遮るように、

「治療の件、話し合ってきた」

ハッとしたように顔を上げるマックイーン。

「それで……」

「僕が決定を委ねられた。マックイーンの事をあそこまで愛してくれている君なら、最

善の方法を選択してくれると信じるって……」
「そう。それで、彰はどう思うの？」
「前に話した通り、摘出手術を受けるべきだと思う」
心を決めて答える。
その言葉を聞き、マックイーンは少しの間、俯いていた。
次に顔を上げ僕を見つめたその瞳には、これまでにないほど強い光が宿っていた。
「ありがとう……。あの時の言葉、信じて良いのよね。　私と……その、一心同体のような関係になる覚悟」
「当然だよ……ずっと一緒に居たいから」
自分の覚悟は既に伝えた。僕はマックイーンを支える力になる。
マックイーンの身体を抱きしめ、僕はそう心に誓っていた。

＊　＊　＊　＊　＊

「なあ、パーマーさんや。私らお邪魔虫かのう」
「そうじゃのう。席をはずしたほうがよさそうじゃ。行こうかの、ゴールドシップさんや。マックイーンってば二人の世界に入り込んで彼の事紹介してくれないもんね」
聞こえよがしに呟かれた声に慌てて抱きしめていた身体を剥がす。

「それでマックイーン？　紹介して貰えるのかな？」
　その声に葦毛が赤兎になったマックイーンが軽く咳ばらいをし
「彰、こちらの長い銀髪のウマ娘がゴールドシップさん。見ての通り抜群のプロポーションと神々しいまでの美貌を持つスーパーウマ娘ですわ」
「いや～そこまで言われちゃうと、ゴルシちゃん、照れちまうなぁ。あ、私の事は、ゴルシちゃんでもゴルシ様でも好きに呼べば良いからな」
「お分かりかと思いますが見ての通り調子に乗りやすくかなり残念なガッカリ系ですわ」
「……マックちゃん、自分で言い出したくせに結構毒舌じゃん」
「白いメッシュを一房垂らした茶髪のウマ娘がメジロパーマー。私と同じくメジロ家のウマ娘ですわ」
「メジロパーマーだよ！　堅苦しい挨拶は嫌いなんだ。気軽に話しちゃってよ♪　パーマーと呼んでね」
　そう言ってウィンクをして、右手を差し出すパーマーさん。
「お判りでしょうが、見た目も性格もイケメンで美人というよりかっこいいお兄様っぽさが人気の後輩からも憧れの視線を浴びているヅカ系ですわ」
「あれ？　マックイーンってば、ご機嫌斜めだね。やっぱ私達お邪魔虫だったか～」

確かに、いつもと違って毒舌がきついような気がする。
「僕は比企彰。ウマ娘競技指導教諭資格を持っているウマ娘スポーツ医療専門医の研修医だ。二人ともよろしく」
「まだまだ成長途中の卵ですわね」
う～む。これは……。
「マックイーン。二人の前で抱き合った事照れてる？」
「て！　照れてなどいませんわ！　彰、余計な事を言ってないで早く先輩のお医者様の所に研修に行ったらどうですか!?」
顔を真っ赤にして照れていないと言われてもなぁ。ゴールドシップさんもメジロパーマーさんも口元がにやけてるし。
「ーーーーー!!」

＊　＊　＊　＊　＊

「やっほ～。マックイーン、お見舞いに来たよ～。って何さ、この状況」
僕が止める間もなくマックイーン達の間で互いをからかい、そこから秘密を暴露し合う暴露合戦が勃発し、テイオーさんが部屋に来た時にみたのは互いに顔を真っ赤にしてへたり込む三人のウマ娘と耳をヘッドフォンで塞いでのんびり紅茶を飲んでいた僕の

姿だった。

当然事情を聴かれたけど、守秘義務という事で逃げ切らせてもらった……。

正直、今までで一番疲れた一日だった……。

第２１話

メジロ家の主治医を交えてマックイーンの手術についてカンファレンスが始まった。冒頭、メジロ家の主治医から自己紹介があったが、なぜかマックイーン達が驚いていた。この方、武田さんと仰り、院長とは同窓だったらしい。

あのカンファレンスでとんでもないことが判明したが……。

＊　＊　＊　＊　＊

「マックイーンお嬢様の手術についてですが」

「なにか？」

「こちらの病院で行う事については何も反対致しません。正直なところ、この規模の病院にしては不釣り合いなほど最新設備がそろっています。まさか手術支援ロボットを備えたハイブリッド手術室まであるとは予想しておりませんでした。確認したいことは、手術中の出血への対処です」

「と仰いますと」

「マックイーンお嬢様はＡＢＯ式ではＡ型です」

いささか気の抜けた安堵感がその場に広がったが、次の瞬間、場が凍り付いた。

「そしてＲｈ式ではｎｕｌｌです」
　Ｒｈ　ｎｕｌｌ―アールエイチナル―……？　嘘だろ？　こんなところまで……。
「馬鹿な……。!!　それでは!!」
　先輩医師の発言に
「ええ。輸血は極めて困難になるかと」
　主治医の武田氏が沈痛そうな表情で頷いた。
　だがふと疑問に思ったことがあった。
「それならマックイーンはなぜ危険なレースを続けられていたのでしょうか？」
　マックイーンは幼いときからトレセン学園に入りレースに向けた練習を行ってきていたはずだ。当然ケガなどもあっただろう。大けがなどがあったら大変なことになる。場合によっては生命の危険もあったはずだ。メジロ家がそれを許すはずがない。
　そんな僕の疑問に返ってきた答えが
「お嬢様はこの地に来るまでは毎週１回定期的に採血されておりました。その血液の一部は英国のＩＢＧＲＬに回っていますが大部分はメジロ家の医療施設で赤血球と血漿に分離した後それぞれを冷凍保存し、厳重に保管されています」
　というものだった。特殊な設備が必要となるはずだがメジロ家にはその設備がある施設があるようだ。

僕もそのうちお世話になるかもな。
「だが、今後のことも考えるとそれだけに頼るわけにも……」
「自己輸血も行うしかないでしょうな」
「ですが、出血回収法での自己輸血は万が一腫瘍が悪性だった場合の危険性を考えると行えませんよ」
「貯血式自己血輸血でいくしかない」
「マックイーンさんの病状の進行と貯血のどちらが早いか勝負だな。赤十字を通してＩＢＧＲＬにも依頼する必要もあるな」
「後は――」
「いや、それは――」
「――」
「――」
会議がしばらく続き、やがて。
「何はともあれ、採血前の心身の安定は必須になるな」
「それは間違いない。常時傍にいる事ができる人物の支えが必要だ」
カンファレンス参加者の発言がひと段落ついた。
院長とメジロ家主治医の武田さんが僕を見つめる。

「比企彰研修医。君にメジロマックイーン嬢の完治までの間、彼女の専属担当を命じる」

＊　＊　＊　＊　＊

それから1週間に1回の採血が始まった。

初回は良かったのだが、2回目以降はマックイーンの機嫌は急降下し続けた。

休みの度にパーマーさん達メジロ家のウマ娘やチームメイトが見舞いに来たが見舞客が帰るとたちまち不機嫌になり、僕に一緒に寝ろだの、全身を拭けだの無理難題を言ってきた。

できるわけないだろう！　……やりたいけどさ。

そして最後の採血の日が近づくにつれマックイーンの顔が引きつり始める。

「この採血というものはどうしても好きになれませんわ。それにこの鉄剤も」

「まぁまぁ。必要なことだから」

「嫌なものは嫌なのです。彰、なんとかなさい」

プクゥと頬を膨らませるマックイーンを宥めすかしているうちに、いつのまにか採血の後に二人で山を散歩する事になっていた。

念のためカンファレンスで患者からの要望として伝えたが、転倒などで大怪我をされるのは怖いが、それでマックイーンの機嫌が治るならまぁ良いだろう。との有難いお言葉により、ＧＰＳ付きだが、二人だけのハイキングが決定された。

登山靴やら３５Ｌリュックサックやら準備しなくちゃなぁ。あと行動食にナッツやチョコレートに一応ようかんも用意しておくか。

……準備が大変だよ。

第２２話

ピクニック当日。
なんだか今日はマックイーンはご機嫌だ。鼻歌交じりに足取りも弾んでいる。
そんなマックイーンを見ていると僕も釣られていつの間にか歌っていた。
「空は晴れるよ。お日様ニコニ～コ♪　掛け声合わせりゃ、心は弾む。よ♪」
確か幼稚園の頃の歌だったと思う。
「おおきく手を振り1、2、3。足並み揃えて1、2、3。今日は楽しい遠足だけど―さ。みんな仲良く、元気よく。明日への道を歩きだす♪」
気がついたらマックイーンが僕をじっと見つめていた。
「楽しそうですわね、彰」
「そういうマックイーンこそ。尻尾も随分と動いているし楽しみにしてたのが良くわか……わかったわかったってば」
顔が真っ赤になったマックイーンがポカポカと叩いてきた。本気ではない事は全然痛みを感じない事からもわかるが……指摘はしないでおこう。
いつもの森を越えて普段は来ることのない峠まで足を延ばす。

「良い眺めですわね。あ、道が下の方にくねくねと通っていますわ。あ、あんなところに大型トラックが。珍しいですわね」
「あ、ホントだ。中型は時々見るけど、あんな大型トラックはここら辺では見ないなぁ」
「もう少し先に行きましょう」
　尾根沿いに進むと、林道の路肩が少し崩れているところに出くわした。
「あら、ここは」
「う～ん、前の雨で地盤が悪くなってるみたいだね。少し崩れているみたいだ」
「此処の下って国道でしたわよね？」
「そうだね。ずっと下だから石とか落ちてはいないと思うけどね。トラック通っていたし」

　森を抜け温泉郷を囲むように聳える山の一つの頂上に登る。
　郷を一望する草原で昼食を摂る。
「どうぞ。召し上がれ。彰がリクエストしたひじきバーグのれんこんはさみ揚げもありますわよ」
　ポケットサンド、フルーツサンド、クロックムッシュ、新蓮根のはさみ揚げ、さばサンド、ホットカレーサンドと挟むものが多かったが、僕がリクエストしたひじきバーグ

のれんこんはさみ揚げやレバーのアヒージョ、卵焼きボール、小松菜のおひたし、チキンウインナー、手羽中唐揚げ、ちくわの穴にきゅうりをさしこんだちくきゅうといったおかずも増えマックイーンの料理の腕も着実に上がっているようだ。

「飲み物は……これぇ!?」

マックイーンが持ってきた飲み物は、【テイオー様監修.秘伝の至高にして究極の濃厚特製ハチミー：固め濃いめハチミツマシマシ】と書かれたラベルが貼ってあったものだった。

あれを飲むのか……。

「他に何かない?」

「ごめんなさい。これしか持ってきていませんわ」

その言葉に覚悟を決めて一口飲んだが……。

あの時はくどく粘りつくような甘さを感じたハチミーが、今は随分と美味しく感じられる。

「あれ?　意外にいける……?」

そんな僕のつぶやきに、我が意を得たりとばかりにマックイーンが

「そうですわよね。この甘味が疲れた身体には甘露ですわよね」

手を打ち顔中に笑みを張り付けた。

「ふぅ～。食べた食べた」
「お粗末さまでした」
昼食を食べ終え後片付けしてから、草原にのんびり寝転がってマックイーンと色々な話をした。
前にもいろいろと話をしたけど、今日は学園での生活がメインだった。授業の事、寮で何の前触れもなく崩壊する壁、爆発する化学準備室、学生食堂を巡る攻防、パーマーさんが転科を考えていたのを翻意させたこと、理事長秘書と生徒会役員とトレーナーの複雑な恋愛話、他校との交流戦、１２ｈａに及ぶ広大な畑。
「マックイーン？」
色々と話しているうちに、マックイーンはいつの間にか眠ってしまったらしい。
体を起こして、マックイーンを覗いてみる。
閉じられた瞼。長い睫毛に美しい影を作りながら安らかに眠っているその姿。
「マックイーン。僕は君に話しておかなくちゃいけないことがあるんだ」
マックイーンはピクリとも動かない。
「マックイーン。僕の――」

＊　＊　＊　＊　＊

「ふぁ～。あら。いつのまにか寝てしまっていたのですね。彰、お早うございます」
猫のように身体を伸ばして、手の甲で目をこすり、ブルブルッと顔を横に振るマックイーン。
「お早う……いや、もうそろそろ下りないと真っ暗の中森をさまようことになっちゃうよ？」
「あら？　もうそんな時間……？　あ、彰。私が寝ている間に不埒なことをしませんでしたわよね？」
「するわけないだろ？　そういう行為はお互い意識がはっきりしている時にするもんだよ」
そんな与太話をしながら急いで二人で下山準備をする。
帰りはかなり慌ただしかったが夕陽を背に受けて森を抜けると何とか暗くなる前に病院に戻れた。
……高原で僕が話したことに、あの時寝ていたマックイーンが気がついた様子はなかった。

第２３話

昨日は晴れていた天気も、今日は打って変わって雨だった。
流石のマックイーンも大人しく病室で過ごして……いなかった。
今日はテイオーさん、パーマーさん、ゴルシさんがマックイーンの見舞いに来ていた。
そして清一さんとマルゼンスキーさんの姿も。
？　？　？　？　？
「それにしてもあの時はビックリしたねー。あの主治医さん、苗字あったんだね。てっきり主治医が名前かと思ってたよ」
「そんなわけありませんわ、とは言えませんわね。私もそんな風に思っておりましたから」
「あ、マックイーンも？　おばあさまは知って……いたよね」
？　？　？　？　？
「そんでよ～。マックちゃんが言うわけだ。甘い物のカロリーは真ん中に集まる性質がありますがドーナツは中央部分がくり抜かれているためカロリーがないのですわ。栄養士さんが提唱した新しい理論だそうですわってな」

「そうですわ！　伊達家の子孫の方がテレビで申しておりましたわ」
「マックイーン、それってあの人たちのお笑いの定番じゃん」
「違いますわ。最新科学ですわ。彰。スポーツ診療医としてこのわからずやさん達にガツンと言ってやってくださいませ」
「嘘言っちゃダメだよ？　苦労するのはマックイーンなんだから」
　美少女たちからじっと見られるのも悪くないけど、ここはしっかりと言ってあげないといけないよね。
「マックイーン、残念な真実を伝えてあげよう。そもそもカロリーは真ん中に集まるなんて性質は全くないから。そもそもカロリーは物質じゃないし」
「う……嘘」
「因みにドーナッツのカロリーはここに厚生労働省の資料があるし」
「では、カロリーは潰すと空気中にふわっと飛んでいく性質があるからカステラをぎゅっと潰して食べるとカロリーは無くなってしまうというのは……？」
「つぶしただけでカロリーが空気に飛散したらいいねぇ。太り過ぎなんてものが無くなるし。トレーナーも大助かりだね」
「で、では、カロリーは凍ってしまう性質があるため、アイスのような冷たい食品の場合にはカロリーがなくなってしまうというのも……？」

「カロリーが凍るなんてことはないけど、アイスが溶けてなくなったらカロリーも無くなるよね」
ガーンという擬音が似合いそうな表情のマックイーン。
「う、そ。ですわ……彰は嘘を言ってるんですわ」
信じないぞ。という表情のマックイーンに向かって、
「悲しいなぁ。マックイーンは僕を信頼してないんだ」
よよよ。と泣き崩れる真似をする。
ただ周りからは、５０点。だの、甘いぜ、まけて３０点くらいだな。だの、ダメだな。俺ならもっとうまくやれる、０点。だのと中々手厳しい声が聞こえてくる。
「彰、目を覚ましてくださいまし。彰は騙されているのですわ。ほら最新栄養学の結果が、このサイトに」
また始まったよ。という声が聞こえたが、何のサイトか興味があったからマックイーンの示した画面を見てみる。
あ、マックイーンからいい香りがする……。
「ああ、これか。いや、確かに良くできているけどさ、ここって有名なジョークサイトじゃん。ほら、よく見て、ここにビタミンＴについて載ってるよ。ビタミンＴってメキシコの伝統料理だよね。マックイーンが教えてくれたじゃん」

「そう言えば……そうですわね。……では、ワタクシは」
　マックイーンの肩にポンと手を置く。
「箱入りお嬢様。もう少し世間というものを知りましょうか」
　マックイーンが俯き何やらぶつぶつと呟いている。ブライトさんがどうとかファインモーションさんがどうとか聞こえているけど、何の事だろう？
　取り敢えず、話題を転換してもらうように周りをみる。
　僕と目が合ったパーマーさんが頷き……。
「マックイーン。昨日は彰さんとデートしたんだって？」
　とんでもない爆弾を放り込んでくれた。マルゼンスキーさんがその話題に食いつかない筈もなく。
「あらあら～。二人でデートぉ？　お姉さん、ぶっとび～」
　一気に正気に戻るマックイーン。
「ふぇ!?　コホン。き、昨日のことですわね。ええ。楽しかったですわ。郷を見下ろす草原で彰と二人で昼食を摂って将来計画を語り合って一緒に抱き合って眠りましたわ帰りは手をつないで夕焼けの中を二人で帰りました夕陽が私達を祝福してくれているようでしたわ」
　……いや、まだ正気には戻っていないらしい。やってないことがかなり混じってる。

「あらあら。将来計画ね～」
マルゼンスキーさんのニヤニヤが止まらない。
ここは反撃しなくては。
「年長者として何かアドバイスいただけませんか。年の功という奴で。……ね、お義母さん」
いつか、マックイーンの事を私達の娘と言っていたことを思い出し、お義母さんと付け足してみる。
ニヤリと笑みを浮かべる僕に
「年の功って程老けてませ～ん。それにクリークちゃんじゃあるまいしママって呼ばないでくださ～い。それに、まだまだお義母さんって年齢ではありませ～ん。まだまだ華の２０代で～す」
３０代前半にしては可愛らしく頬を膨らませるマルゼンスキーさん。
って何か衝撃的な言葉が聞こえたような気がする。
２０代とか……。
２０代!?
その言葉に思わず口走ってしまった。
「え？　マルゼンスキーさんって３０代前半じゃ……？」

「ひどいわ！　私はまだ花の２０代よ！　ピッチピッチのギャルよ。卒業してそんなに経ってないわ。ぅわ～ん」

免許証を見せながら、ワッと顔を覆ってあからさまなウソ泣きをするマルゼンスキーさん。

「おめぇ～。いくらなんでも……」

ゴールドシップさんが呆れた声を出す。

「ひどいよーじょせいのとしをまちがえるなんてさ」

テイオーさんもワザとらしくもあきれたような声をあげる。

「私もそれは無いと思うな―」

とパーマーさん。

「……」

マックイーンの氷の視線が……。

「え？　だって清一さん、そう言っていましたよね？」

初めて出会った冬に清一さんは確かにそう言っていたはずだ。

「おいおい、俺はそんなこと一言も言ってないぜ。使ってる言葉で想像できるだろって言っただけだ」

「……」

や、やられた……。

思い起こせば確かにあの時清一さんはマルゼンスキーさんが何歳とは明言していなかった。

やれやれ。と清一さんが肩をすくめた。

「マルの本当の年齢はにじゅグオォ」

顔を覆っていたはずのマルゼンスキーさんがノーモーションで花瓶を清一さんに投げつけ命中させた。

「……いきてるか～？　……ん、生きてるな。……トレっとっと。元トレピッピや？女性の年齢を勝手にばらすのは良くないとゴルシちゃんは思うんだが。そこんとこ、どーよ？」

花瓶の直撃を受け沈黙した清一さんをしゃがんだゴルシさんが突いている。

そんな二人を振り向くことなく

「きちんと言わなかったのが悪かったのよね。でもまさかそんなにおばさんにおもわれてたなんてショックだわ～気分はサゲサゲよ～。私は未だ２７よ」

ぷくぅッと剥れ顔のマルゼンスキーさん。

２７歳。道理で３０代前半にしては若く見えたわけだ……。２０代半ばに見えたのも納得だった。

「というとマックイーンと歳の差は一回り位ですか……」

あれ？　という事は……僕とほぼ同い年!?

……これ以上墓穴を掘るのは止めよう。

第２４話

マックイーンの手術当日。

流石に今日は昨日まで不在だったメジロ家ご当主やマックイーンのチームトレーナーさんも駆けつけていた。

マックイーンのご両親も帰国する予定だったが、他人に任せられないかなり大規模かつ重要な仕事があったらしく、その関係で帰国が間に合わなかったようだ。昨晩リモートでマックイーンと会話している最中にマックイーンから紹介されたが、何て答えたかよく覚えていない。確かマックイーンを宜しく頼む。みたいなことを言われ、任せて下さい的なことを言ったような気がする。

マックイーンのチームからはテイオーさんとゴルシさんが昨日から郷に宿を取って残っている。ただメジロライアンさんやメジロドーベルさん、メジロアルダンさん、メジロブライトさんといったマックイーンと同世代のメジロの人達はパーマーさん以外はレースが今日や明日に迫っているという事で来られないようだった。

今日も朝から励ましのメッセージが届いていたらしい。

手術の事を知った時から彼女たちとマックイーンが毎日会話していることを知って

いる僕としては、彼女たちも不安で仕方ないのだろうなと察せられた。
そんな気分を現すかのようなあいにくの空模様なうえ、朝になって急に爆弾低気圧が発生しドクターヘリが飛べなくなってしまった。
万が一のことを考え手術の延期も考えられたが、血液の使用期限の問題からこれ以上の延期は行えなかった。

病院では院長を始めとした此処の先輩医師達と補助医として加わっている主治医の武田さんが手術の準備に追われていた。
冷凍保存されていたマックイーンの血液は解凍され、その第一便は既に病院に運び込まれている。第二便も英国から届いた輸血用血液製剤とともに届けられる予定だったが、天候が荒れてドクターヘリが飛べなくなったため、山道で時間はかかるが血液運搬車による輸送を行う事で対応することになった。
手術室の入り口でいろいろな確認をしつつ僕はマックイーンの手を握っていた。
胃の中に食べ物や飲み物が残っていると麻酔中に吐いてしまい、それが気管に入ると肺炎になり危険なため、マックイーンは絶食している。水も二時間前から飲めていない。
その所為で、すでに耳もへにゃっとなっている。

「……いよいよ、ね」
僕に向けられたマックイーンの顔も心なしか蒼ざめている。
しかし、彼女は笑みを浮かべ……。むしろ僕を励まそうとしているように見えた。
「うん、いよいよだね、マックイーン」
「しっかり見て勉強してくださいね。せっかくこれだけの医師がおられるのですから」
「解っているよ」
「……血とか見て気絶なんてしないでくださいね」
「マックイーンこそ手術中に夢見て泣き出さないようにね」
「さぁ……わかりませんわよ?」
「ま、その時は耳元であやしてあげるから」
「あぁ、酷い！　子ども扱いしてぇ。……でもそれくらいしか仕事ありませんわね、彰には」
「……言ってくれるなぁ」
「お互い様ですわ」
二人で顔を見合わせ笑う。
準備が整い、手術の時間が近付いてきた。
先輩医師の一人が点滴のカテーテルを挿入する。

酸素マスクを宛がわれたマックイーンが何度か深呼吸をし、ゆっくりと瞬きをした。
「そろそろだよ……」
「彰……」
マックイーンの手に力が入る。
その手をしっかりと握りなおした。
穏やかに笑うマックイーンに言葉を続ける。
「麻酔が効いたら後は寝ているだけだから……。目が覚めたら手術は終わっているよ」
「うん。……夢か……。どんな夢、見よう……か……しら……」
眠りに落ちるマックイーン。
？　？　？　？　？
「始めよう」
マックイーンの呼吸や脈拍、血圧などが正常値であることを確認し、院長が宣告する。
皆が頷くのを確認し、超音波メスを院長が操る。
画像を見ながら腫瘍の位置を確認し、メスを突き立てる院長。
院長のメスが正確にそれを探り当てたのだろう、動きがより慎重になった。
このまますぐにでも終わる。
そう予感させる程、院長の腕は鮮やかだった。

しかし、突如、マックイーンの血圧が乱れはじめた。
「マックイーン!?」
意識のないまま、苦しそうに喘ぐマックイーン。
「院長!　患者の血圧低下!!」
その言葉に院長を振り返ると、院長の顔面が蒼白になっている。
「くっ!　どこだ。どこから出血している……?」
「院長!　出血量が増えつつあります!　依然血圧低下中!」
焦りの声があがる。
「なんだと!」
周囲が喧騒に包まれた。
「輸血流量を増やせ!」
「出血場所の特定急げ!!」
「昇圧剤投与!」
「フィブリノゲン濃縮製剤を投与!」
怒号と焦りの声がその場を支配する。
何があったんだ……?
「彰!　なにぼんやりしてるの!　何もできないなら彼女の手を握ってなさい!」

怒号に混じって、血走った目をしていたデイジーギャルさんの声が聞こえる。
それと同時に彼女に手を強く掴まれ、マックイーンの脇に引き寄せられる。
「彼女に声を掛け続けなさい！　その手を握って離さないで！　良いわね!?」
先輩医師が慌しく動いている中で、僕は、ただ言われた通りに、マックイーンの手を握り声を掛け続ける事しか出来なかった。
「マックイーン、マックイーン、しっかりしろ！」
しかし彼女に僕の声は届いていない。
マックイーンの傍で、蒼白になっている院長に彼女の具合を聞いてみるが、しかし院長ですらはっきりした事は断言できないでいる。
主治医の武田さんも断言は出来ないらしかった。
ただ、急な出血の心当たりはあると……。
遺伝性出血性末梢血管拡張症。
どこかで聞いた事のある様なないような、そんな病名だった。
院長が彼に食って掛かっているが、よく聞き取れなかった。
ただ、マックイーンの母親も未発症ながら同じ病名だったらしい。
「院長！　マックイーンを……彼女を何とかしてください！」
蒼白になりながらも治療に当たる院長に嘆願する。

「……黙ってろ！」
先輩医師の一人が声を荒げる。
「このままじゃ、マックイーンが、マックイーンが……」
「喧しい！　我々だって全力なんだ。恋人の前だろ、お前がこんな時にうろたえるんじゃない！」
「でも、でもマックイーンがこんなに苦しそうに……このままじゃマックイーンが、マックイーンが……」
僕の言っている事は無茶苦茶な事だとはわかっていた……。
でもこのままじゃ、マックイーンが、マックイーンが……。
「くそ！　あと一人……あと一人医師がいれば……畜生！」
先輩医師の一人が、やり切れなさを声に出した。
あと一人……。
僕が……僕がもう少し……。
僕が一人前の医師だったら、すぐにでもマックイーンを……。
何故、もっと真剣に学んでこなかった。もう少し真面目に取り組んでいれば、或はマックイーンの治療の一助を担えたかもしれないのに！
そんな時、さらに追い打ちをかける事態が発生していた。

「院長!!　峠でがけ崩れが発生したそうです!!　血液運搬車が立ち往生しています!!
このままでは血液が届きません!!」
うそだろ!?
マックイーン……。

第２５話

マックイーン……。

あの場にいられなくなって、手術室から出てきてしまった。

……否、わかっている。

……自分の無力さに耐え切れなくて、だから無意識の内に逃げたんだ。

俯く僕の足元に人影が見えた。

顔を上げると、そこにメジロ家の御当主、アサマ様の姿があった。

「何故こんな所にいるのです。マックイーンを守ってくれるのではありませんでしたか？」

「……駄目なんですよ、僕は。マックイーンに偉そうな事、散々言いました……。彼女は逃げなかった……。目標に向かって一歩一歩踏み出していった。でも僕は……彼女が苦しんでいるのに、踏み出せないでいる」

「……同情はしませんよ。自己陶酔している愚か者に同情する気はまったくありません。……不服ですか？」

厳しい目つきで僕を睨むアサマ様。

「マックイーンが何故前に進めたのか考えた事がありますか？　貴方がいたからです。貴方にはそれだけの力がある、彼女の心を溶かすだけの力が」

それが何だと言うのだろう……。

「少し昔話をしてみましょう」

そう言って御当主様が一人ごちる様に言葉を紡ぎだした。

「マックイーンは、本当はあんなに強気ではありません……。本当のあの娘は泣き虫で……甘えん坊で……。あの娘が心を鎧ってしまったのは私の所為です……」

ポツリポツリと淡々とした口調。

「昔は、あの子も泣き虫で……寂しがり屋で、甘えん坊で……当時は私も当主の座を受け継いだばかり。まだまだその地位に振り回されっぱなしで……」

「そんな私を支えようとあの子の両親は早くから海外を飛び回っていました。あの子は寂しかったのでしょう。両親が仕事に出かけるたびに大泣きをして、よく二人を困らせていました」

「あの子が四歳ごろのことでした。ティターン達が連れ立って半年以上海外に行かなければならないことがありました。あの子も一緒に行けたら良かったのですが、あいにくかの地は治安が日本国内とは比べ物にならず、幼いあの子を連れて行くのは危険極まりなかったのです。あの子を国内に残すのは仕方がないことだと思ってはいましたが、一

番の問題は当のマックイーンでした。寂しがり屋でよく泣いていたあの娘にどう話すか、随分と話し合ったものです。結局あの子に話したのは二人が出発する一週間前だったとおもいます。話した直後は随分と泣かれましたね。おまけに変なところで意地っ張りだったあの子は2，3日の間は、こう、目に涙を溜めながら廊下の曲がり角で待ち伏せして私を蹴飛ばしてきたり……。落ち着いたのは別れる前日でした」

？　？　？　？　？

「……マックイーン？」

部屋を訪ねると、早速枕や本などが投げつけられてきました。

「おばあさまなんて大っ嫌い！」

泣きながら手当たり次第に物を投げつけてくるマックイーンの声。

……手がつけられませんね、落ち着かせない事には話もできません。

投げ付けられる物を払いながら幼いマックイーンのもとに近づき、泣き喚くマックイーンの目の前で両手を打ち合わせる。

目の前で起こった甲高い音に一瞬その動きが止まるマックイーンに。

「マックイーン！」

すかさず気を乗せ、強い口調の声を放つ。
その口調に、びくっと身体を震わせ……それでも目に涙を湛えて私をマックイーンは睨みつけてきました。
「……嫌いですか、お婆ちゃんの事」
マックイーンの頭に手を載せる。
「……嫌い、です。……私を独りにしちゃうおばあ様なんて大っ嫌い」
顔を俯かせるマックイーン。その頭をかい抱き、
「独りになんかさせませんよ、マックイーン。ラモーヌ小母様やチエイサー小母様、リベーラお姉さんだっているのですから。それに……いい子にしていれば、お父様やお母さま達にはいつでも会えますよ」
「え……ほんと？」
「おばあちゃんがマックイーンに嘘ついたことありましたか？」
「……なかった」
まだ、しゃくりあげてはいるものの次第に落ち着いてくるマックイーン。
「そんな風にいつまでも泣いていると、お父様達に嫌われちゃいますよ。貴方のお父様達だっていつも言ってるでしょう？　泣き虫は嫌いって」
私がそう言うと、マックイーンは頭を腕から抜き両目を擦りました。

「うん。もう泣かない。私、泣かないよ」
泣き腫らした目で私を見上げ、にっこりと微笑むマックイーン。
「そうですか……いい子ですね、マックイーンは。それでは良いものを飲ませてあげましょう」
「……飲み物？」
内ポケットに忍ばせているものを見せると、マックイーンが目を輝かせました。
「あ、これ……」
「わかりましたか？　お父様達が飲んでいる大人の飲み物ですよ」
「飲んでも……いいの？」
「……マックイーンは大人になるのは嫌ですか？」
少し考え込むマックイーン。
「……嫌じゃないよ」
「じゃあ一口だけ飲ませてあげましょう」
「……でもお父様たちに怒られちゃうから」
「……あらあら。これ飲まないと二人みたいな大人になれませんよ」
悩むマックイーン。
「……私、私も大人になりたい」

「それではどうぞ」
　ラム酒とシナモンを加え、少しだけマックイーンが嫌っている造血剤を混ぜたエッグノッグを一口だけマックイーンに飲ませます。
「熱いし……変な味だよ」
　流石に造血剤の味には気がつきまし……いえ、これはラム酒を変な味と捉えているようです。
「大人の味ですよ」
　瓶を内ポケットに戻すと、マックイーンに。
「マックイーン……マックイーンは大人の飲み物を飲んで、もう大人になりました」
「はい」
「ですからマックイーン、あなたはどんなに辛い事があっても頑張らないといけませんよ」
「はい。大人だから頑張るですね、お父様みたいに」
　そして、私はそうですと頷きました。
「それから何があっても泣いちゃダメですよ?」
「え……泣いちゃダメ、なの?」
「そうです。メジロの大人になったマックイーンは、何があっても泣いちゃダメですよ。

それがメジロ家の大人なんです」
「う、うん……私、泣かないよ」
そうやって二人で大人になった約束をしました。……してしまったのです。

その翌日二人は旅立ちました。
別れの朝、マックイーンは一人俯いて涙を必死に堪えていました。
【大人の約束】を私としていましたから……。
それでもマックイーンの瞳からは我慢しているのに涙が零れ落ちて……。
それでもマックイーンは必死で堪えて……。
哀しそうで……。
それでも涙を堪える、それがとても辛そうで……。
マックイーンは、我慢に我慢を重ねていました……。
私はその場では何もしてあげられませんでした。メジロ家当主として、一人だけをひいきするわけにはいきませんでした。
二人が去った後、誰もいない裏庭にマックイーンを連れ出しました。
「マックイーン、よく頑張りましたね」
「はい、私、頑張りました……」

「辛かったでしょう、マックイーン……」
「うん……」
　約束を守って、涙を必死で堪えるマックイーン。
　見ているほうも辛くて……。
「今日だけは泣いて良いですよ」
「え……。でも……」
「今日だけは思いっきり泣いて良いですよ。でも明日からは人前で泣いてはいけません」
　そう言うと、マックイーンは、
「うん……」
　そうして溜めていた涙を零し始めました。
「マックイーン……」
「……おばあ様……」
　そう言ってマックイーンが抱きついてきました……。
「おばあ様……おばあ様……おばあ様ぁ!!　お母様もお父様も……いなくなっちゃったよぉ……」
　涙混じりの嗚咽が耳を打った。

「二人とも、笑っていたよ……。でも、私、悲しくて……我慢したのに、涙が零れて……一生懸命我慢したのに……でも涙が落ちて……」

マックイーンの声が……。

「でも、笑ってたんだよ、二人とも……変だよ……私は…私はこんなに哀しくて……こんなに泣いているのに……でも、笑ってるんだよ」

そこまで言うと、マックイーンは一層声を詰まらせ泣き続けました。

「……なんで笑ってるの？　もうお別れなのに……何で…何で笑ってるの……」

泣き濡れた瞳が私を見つめてきました。

「私…私……笑って見送れなかったよぉ……だって、涙が出ちゃうんだよ……我慢したのに、出ちゃうんだよぉ……わたし、わらって…みおくれなかったよぉ……」

そこまで言うと、マックイーンはただ泣くだけでした……。

マックイーンの哀しみは止まることなく、涙は次から流れてきて、そして流れ続けました……。

……マックイーンの悲しみが伝わって……そして、二人で泣いていました……。

？　？　？　？　？

「――マックイーンの心を凍らせたのは私との約束です。あの日以来、マックイーンは人前で涙を見せることなく、明るく元気に振舞っていました。ですがそれは本当のマックイーンではありません……。あのこはもっと泣き虫でした」

俯くアサマ様。

「……私がマックイーンを、あの子を変えてしまったのです。大人は泣かない、と、辛くても頑張るんだ、と教えた私が……。それをあの子はずっと守って……」

そう言うと、アサマ様は顔を俯けたまま肩を震わせていた。

「その凍てついたマックイーンの心を溶かしてくれたのが、彰さん、貴方でした」

遠くを見つめるその眼差し。何か言いかけたアサマ様の声を遮るように……。

「おばあさま!!　がけ崩れが!!　峠でがけ崩れが起きて、マックイーンの輸血用の血液が届かないって!!　一緒に乗ってた人達が歩いてこっちに向かってるらしいけど、このままじゃ間に合わない!!」

パーマーさん達が廊下に駆け込んできた。

がけ崩れの事を知ったらしい。

顔を蒼白にし、力なく崩れ落ちるアサマ様を支えソファーに横たえる。

「マックイーン……あの子が……そんな……」

力のこもらないアサマ様の声。

其処に力強い――決意のこもった声が響いた。
「ボクが取りに行く！」
一緒に駆け込んできたテイオーさんの真剣みを帯びた風貌と声だった。
「マックイーンは、僕の大切な存在なんだ!!　こんなところで、こんなところで失わせたりしない!!　彰、地図頂戴！」
「ダメだ!!」
そんなテイオーさんにトレーナーさんからの制止がかかる。
道をふさぐトレーナーさん。
「トレーナー!!　行かせてよ!!」
「テイオー、気持ちはわかるがお前の足は未だ完治したわけじゃない。ここで無理をすればお前も歩けなくなる可能性だってあるんだ。マックイーンがそれを望むと思うか!?」
「でも……でもっ!!」
悔しそうに俯くテイオーさん。
「……1時間」
僕が出したその言葉に皆が振り返る。
「1時間の間、僕がマックイーンを支えます。1時間以内に血液製剤を持って戻ってき

てください。そうすればマックイーンは助かります」
　僕のその言葉にソファーに横たわっていたアサマ様が何かを言いかけ口を噤んだ。
「本当に1時間あればマックイーンは助かるんだね？」
　パーマーさんから鋭い声と視線が僕に投げられる。
「絶対に助けます！」
「……いい目だね。信じても良いかな、その目なら」
　ふっと視線を和らげるパーマーさん。
「私が行くよ」
　あっさりとしたパーマーさんの声。
「森を抜けて峠を通って崖崩れの現場に向かう。途中でこっちに向かっている人たちから血液製剤を受け取って全力で戻ってくる。足場の悪い山道を全力で駆けられるのはこの面子じゃ、野良レースで鳴らした私ぐらいっしょ」
　ニカッと笑みを浮かべるパーマーさんに。
「私も行くぜ。一人で行くより二人で行った方が良いだろうさ」
「ゴールドシップ……」
　ゴールドシップさんの声がかぶさる。
「私だってマックちゃんは大切な存在なんだ。それに、このゴルシ様の足をなめても

らっちゃ困るってもんよ」
　パーマーさんの肩を叩くゴールドシップさん。
「そうだね、一緒に行こっか。途中でどっちかがこけても残った方が1時間以内に戻ってくればこの勝負、私達の勝ちだしさ」
「そう言うこった」
　入口を見つめ踵を返す二人。
「パーマーさんにお任せ!!　ってね」
「このゴルシ様にお任せ!!　ってな」
　入口に向かって駆け出しかけた二人に
「これが地図です！」
　この場にそぐわない幼い声が聞こえる。
「ダイヤちゃん!?」
「ま、間に合いました。……マックイーンさんの手術があるって聞いたから成功しますようにってお祈りして来たんです。そしたらここに来る途中で崖崩れで道が埋まったって聞いて……。何かの役に立つかもって地図持ってきました。近道とか目印とか描いています。持って行ってください！」
「あんがとよっ」

地図を受け取り駆けだす二人。
「さて、僕も準備しないとな……」
手術室に向かう僕に背中から声がかかる。
「ねっ。１時間の間マックイーンを支えるって、どうするのさ」
その声に振り返らず手を振って努めて明るく声をだす。

「僕の血液型は、Ｒｈ　ｎｕｌｌのＯ型なんだ」

第２６話

手術室前室に叔父である院長とマックイーン達メジロ家の主治医である武田さんを呼び出し、３人だけで話をした。

「そうか……良いんだな？　お前の血の秘密を明かしても」

「はい」

院長と視線と言葉を交わす。

「その、秘密というのは私が聞いても良いのですか？」

不審げな武田さん。

「かまいません。マックイーンにも関わる事ですから」

「それは？」

「僕の血液型についてです」

自分が被る不利益とマックイーンと歩めなくなる未来。天秤にかけるまでもない。

もっと早く踏み出せていれば。なんて後悔はしたくない。

ひと息吐いて、一気に話す。

「僕の血液型はＲｈ　ｎｕｌｌのＯ型です」

武田さんが一瞬、なんの事だ？　という表情を見せ、次の瞬間目を見開き驚愕の表情を見せた。
「そ……それは、事実ですか？」
武田さんは、かすれた声で院長に向かい確認を取る。
「ええ。ＩＢＧＲＬに身元非公開の日本人が登録されているはずです」
「ええ。それは知っています。メジロ家でもこの方にコンタクトを取るべくＩＢＧＲＬに登録されたことが判明してからあらゆる手段で調査していましたから」
「でも見つからなかった？」
「ええ。まさか……彼が。……なぜ今まで内密に？」
「その問いに答える前に、メジロ家では彰にコンタクトが取れたらどうされるおつもりでしたか」
「それはもちろん……。!!　……そう言う事ですか」
「ええ。そう言う事です。この子の両親も事故死していますから。……本当に事故だったか怪しいもんだ」
「……この事を知っているのは？」
「この病院では父の理事長と私、妹の事務長だけですね。とは言っても皆には今回でバレるでしょうが。父も調べた結果Ｒｈ　ｎｕｌｌでした。年齢的に献血の対象外でし

たが。ああ、私と妹はＲｈ陽性です」
「後この事を知っているのは廊下にいる皆も、ですね」
「……武田さん、皆への説明をお願いしてもよろしいですか。私はマックイーン嬢への止血の続きと彰への採血の準備を指示しますので」
そう言うと控室に手術着を着替える為に向かう院長。その背に
「貴方方に迷惑のかからないように説明します」
武田さんの声がかかった。

？　？　？　？　？

武田さんからの説明も終わり、皆が三々五々部屋に散っている。
「ボクの足が治っていたら……肝心な時に役に立たない脚なんて」
何とはなしにテイオーさんと話をしたが、傍らでアサマ様と話しつつ此方を窺っているトレーナーさんの表情から察するにパーマーさん達が出発してからテイオーさんはずっとこんな感じらしい。
「君は良いね、人の役に立てて」
テイオーさんが僕に何処か昏い眼差しを投げてくる。

「黄金の血なんて言われても良いもんじゃないよ。あらゆる血液型に輸血できるなんて下手すりゃ生きた血液パック扱いだ。自分は誰からも貰えないのにな」
　少し皮肉気に答えてしまった。
「ゴメン。自分でも何だか持て余してるんだ、この感情」
「テイオーさん……」
「テイオーでいいよ。と言うかそう呼んで」
　何かできることはないか？　そんな思いがテイオーさ、テイオーを焦らせているのかもしれない。
「テイオー。貴女には出来ればマックイーンの傍についていてほしい」
「僕がついていたって何の役にも立たないじゃん」
　一度だけ僕を見ると視線を外し俯くテイオーの姿。
「そんなことは無い。ねぇ、テイオー。手当って聞いた事ある？」
「手当……？」
「うん。手当」
　不思議そうなテイオーに
「少し昔話をするよ。母がいつだったか、僕の手を抱きながら話してくれた事があったんだ」

確か、転んでひざを擦りむいたときのことだったと思う。
だいぶ声も薄れてきたけど、あの日の事だけはよく覚えていた。あの時の言葉が僕が医者を目指したきっかけの一つだったと思う。
だからテイオーにも母から聞いた話を伝えたかった。
「手と手を触れ合わせると安心するでしょう？　大切な相手を想ってあげられれば相手の気持ちが伝わってくるの。だから自分の想いもきっと伝わるのよ。それが気持ちなの。相手を想ったり、自分を想ったり、周りを想ったり、見えないものを想ったり……。昔はお医者様が治療する事を『手当て』って言ったのよ？　相手を想い身体を触れ合わせることで自分の気持ちを伝えると、それが強い治癒の力に変わるの。それが『手当て』なのよ。本当は誰でも持っている力なんだけどね。……そう言っていたよ。実際、患者は医師が手を触れ大丈夫と声をかけるだけで緊張が低下して安心するからね、一概に迷信とは言えないかなって」
「手当……」
両手を見つめるテイオー。
「ボクにもできるのかな？　医師でも無いボクに」
「マックイーンの事、大切なんだよね？　この手当てに一番大事なのは誰かを想う気持ち、それだけさ。手術に立ち会うのは難しくても声をかけるだけでも違うから、考えて

おいて欲しい」
「彰、君はどうするの？」
「僕もやれることをやるだけさ」
そうテイオーに言葉を残して手術室に入った。

？　？　？　？　？

採血の準備は整っていた。
「４００ｍｌ採血を行う」
僕の希望でマックイーンのすぐ隣で採血を行うことになった。
手を伸ばせばマックイーンの手を握りしめられた。
手術が終わったらまた目を開いてくれるよね？　マックイーン。もう一度君の笑顔が見たいよ……。
自分の想いの全てを力に変えてマックイーンに注ぎ込むように彼女の手を握りしめる。
「よし、此処までだ」
採血を終え、少し休みをもらいパイプ椅子に腰かけた。

院長がモニターを見つつ鉗子を操っている。
「見つけた！　ここもか」
出血箇所がまた一つ見つかったらしい。院長と先輩医師が慎重に止血作業をしている。
院長達から声がかかった。
「彰。外の待合でなら休んでていいぞ」
「何かあったらすぐ呼ぶからそんな顔するな。俺たちも交互に休憩を取る。それと外の皆も心配しているだろうから説明しておいてくれ。今のところ何も心配ないってな」
「ついでに外の状況も時々そのピンマイクで知らせてくれるとありがたい」

？　？　？　？　？

まだ血液製剤が届かない。
……そろそろ1時間になる。僕が提供した血液も残りが心もとなくなっているはずだ。
「血液は届いたか？」
先輩医師が手術室から休憩に出てきて尋ねてきた。

入れ替わりに休憩していた先輩医師が手術室に入る。
「まだです」
「まずいな……。未だ完全に止血出来たわけじゃないんだ」
それはかなりまずい気がする。
そんなことを考えた途端、付けていたイヤホンに連絡が入った。
最悪に近い知らせだった。
「彰、直ぐに中に入れ!!」
先輩の緊迫した声に近くにいたテイオーが反応した。
「ボクも中に入れてください！」
その言葉に怪訝な顔を磨る先輩。
「ダメだ」
「マックイーンに何かあったんでしょ!?　お願いだから立ち会わせて!!　僕もマックイーンの手当をしたいんだ!!」
「手当……？　ああ、そう言う事か。気持ちはわかるが手術室に入れることは出来ない」
「そんな!!」
「だから……」
そう言うと先輩は自分のワイヤレスピンマイクをテイオーに渡す。

「それから手術室のスピーカーに声が流れるように設定する。そうすれば中のマックイーン嬢に聞こえるからな。君はマイクに語り続けろ、それでいいな？」
「うん……お願いだから絶対にマックイーンに伝わるようにしてね」
「任せろ。行くぞ」
背中を押されながら控室に入る。

？　？　？　？　？

手術室の中は文字通り怒号が飛び交う戦場だった。
「彰か。不味い事態だ。静脈系の枝からの出血が止まらない。パックは届いた……まだのようだな」
一瞬顔を上げたがすぐにマックイーンの止血作業に入る、これまでに見たことのない青ざめた表情の院長。武田さんも額に悲痛な曇りを帯びた表情を浮かべている。
「残りを希釈して……フィブリノゲン濃縮製剤と輸液を増やして何とかなるか？」
「ですがこれ以上のフィブリノゲンの投与は……」
「……何か手はないのか、何か手があるはずだ」
……限界までは計算上あと３００ｍｌあるはずだな。なら！

「あと２００ｍｌ採ってください!!」
「すでに４００ｍｌ採ってるだろが!!　ダメだ!!」
「でも、このままじゃ、マックイーンが!!」
「医師としても、一人の人間としても、みすみす危険にさらす様な真似は絶対に認められん!!」
　モニターを見ていたデイジーギャルさんが声を上げた。
「血圧低下!!　これ以上は!!」
「クソッ!!　やむを得ん、１５０ｍｌ追加採血だ」
　急ぎ採血を行い、マックイーンに輸血を行う。
「何とかこれを希釈して、血が届くまで保たせろ!!」

？　？　？　？　？

「血液は未だ届かないのか?」
　室内にいら立ちの声が上がった。
　先ほどからテイオーがマックイーンに呼びかける泣き声が手術室に木霊していた。
時々テイオー以外の声も。

「院長!!　あと１５０ｍｌ追加してください!!　希釈すれば何とか」
「もう限界だ!!　これ以上採ったらお前が死ぬ可能性があるぞ!!」
「なら、せめて１００ｍｌ!!」
「くどい!!　ダメなものはダメだ!!」
　そんなやり取りの最中、更に。
「血圧再度低下!!」
　悲鳴のような報告が上がる。
「どこだ!!　何処から出た!!　塞いでも塞いでも!!　クソッ!!」
　焦燥感に満ちた悲痛な声が手術室に谺した。
　院長が平坦な声をだした。
「あと、１００ｍｌ追加だ。……判ってるな?　確率は半々だぞ……。クソッ！　なんでこんな事に!!　万が一があったら兄貴に顔向けできん!!」
　院長、いや、叔父さん、ごめん……。

？　？　？　？　？

　採血中はもちろん採血が終わっても、もう立ち上がることができなかった。

どのくらい時間が経ったのだろう。時間の感覚も次第に麻痺してきた。
（これは…まず…か。マックイーン、ごめん……ミス……ったか……も……かし……たら……もう……あ……えな……）
意識が朦朧としてくる。
そんな時だった。
遠くで騒がしい声が……。
朦朧とした意識下でもそれは理解できた。
遠くでその声を聞きながら僕の意識は暗転していった。

第27話

「……暑い、な……」

一週間振りに病院に続く門をくぐる。

マックイーンの手術の時はあんなに冷え込んだと言うのに、完全に暑さが戻っていた。

額の汗を拭い、僕は建物の中に入った。

中に入るなり、ゴールドシップさんと出くわした。

「おう、彰じゃねーか……」

「……ご心配をおかけしました……」

「……いいってことよ。それより……具合はもういいのか？」

気遣わしげなゴールドシップさんの視線に、少々ばつが悪くなる。

「……もう大丈夫です。いつまで寝ていても……仕方ないですから」

「そうか……。無理しなくてもいいんだぜ。マックイーンだって、想い人のそんな姿見たらよ……」

「……はい」

浴場に向かう通路で清一さんに捉まった。
「おう。彰」
「あ、こんにちは」
「……もう大丈夫なのか？　随分やつれた様だが……」
「……ええ。いつまでも寝ていられませんから。暑いから少し体に堪えますけどね」
似たような事を訊かれ同じように答える。
「そうだな……。あの時はあんなに寒かったのにな」
「はい……」
「……元気ないな。……気にしているのか？　あれも運命だったんだよ……」
「……そうかも知れませんね。でも……」

清一さんの暖かい視線が今の僕には痛い。
廊下の喧騒から逃れるように、入院患者用の部屋がある上階へ上がった。
通路の半ばに設けられた休憩所の長椅子に腰を下ろし、温泉療養で後一週間程滞在予定のテイオーから貰った『ハチミー：薄め』が入った水筒で喉を潤す。
「……やっぱり体力がなくなっているな……」
自室からここに来るまでで息が上がっていた。
院長への挨拶は少し休憩してから行くことにする。
「……といっても、ゴールドシップさんと会っているからな……」
あまりゆっくりしていても、さぼっているように思われるだろう……。

その時、

「彰」

何処からか、聞きなれた声が聞こえたような気がした。

「……まさか、な……」
　気を取り直して水筒を空ける。
「彰……。彰！」
「……まさか」
「彰……って、無視しないでください！」
　後頭部に衝撃。
「……っ！」
　振り返ると、
「はぁい！　お久しぶり！　……で良かったのかしら」
「マ、マックイーン！」
「きゃっ!?」
　僕の声の大きさに、声をかけてきた彼女が驚きの声をあげた。
「な、マックイーン！　何で、何でこんな所にいるんだよ!?」
「なんでって、人を幽霊みたいに言わないでくださいまし」
「何でこんな所まで出歩いているんだよ！　寝てなきゃ駄目じゃないか！」
「え？　大丈夫ですわ。杖も借りていますし」
　満面の笑みを浮かべ、二本の松葉杖を掲げて見せるマックイーン。

「そんな問題じゃなくて！　まだ傷が痛むだろう？」
「……えぇ、多少は。でも大丈夫ですわ。重い物持ったりしなければ痛みませんから」
「頼むから安静にしていて!!　僕の精神衛生に悪いから!!」
　悲鳴に近い声になってしまった。
「ですがデイジーギャルさんも『もう大丈夫みたいね』って仰っていましたし」
　デイジーギャルさんも匙を投げたのか……。
「……ひょっとして。マックイーン？　……暴れなかったよね？」
「どうでしょう？」
　……その顔で解った。
「だって退屈でしたし。手足動かさないと鈍ってしまいますわ。それに彰も居ないのでつまらないし退屈でしたから」
「マックイーン……」
「そもそもなぜ手術受けた私が大丈夫なのに、そこで見学していただけの彰が倒れるのですか⁉？」
「い、いや……そうなるのも運命だったんじゃないかなって……」
　僕はマックイーンの手術の途中で力尽き、昨夜まで安静状態だったのだ。
「なにが、運命、ですか！　目が覚めたらビックリですわよ。彰はいないし、皆はその事

聞くと黙っているし」
「えっと……」
「後でおばあ様が笑っていましたわよ。今頃は恋しいあなたの夢見て魘されている頃でしょうって」
頭をかいて誤魔化す。
「全く！　私、てっきり彰が私の血見て気絶したのかって思いましたわ！　恥かかせないでくださいまし⁉」
「面目ない」
会えなかった時間を取り戻すかのように、二人で話し続けた。
出会って日も浅いけど、これほど長期間離れていたのは初めてだった。
「私を想うあまり憔悴しきったと言う事ですから、許してさしあげますわ。あんまり音沙汰がなかったものですから私から行こうって思っていたのです」
マックイーンには僕が倒れた詳しい理由を知らせていない。
手術が終わった翌日に意識を取り戻した後、ご当主のアサマ様に『マックイーンがあなたが来ない理由を知りたがっています。手術が成功した途端気が抜けて倒れた。と言っていますが、マックイーンにあなたが倒れた本当の理由を話しますか？』と訊ねられた。

僕は否と答えた。
彼女が本当の理由を知ればきっと……。
アサマ様もそれは理解されている筈。だから誤魔化してくれたのだろう。
「……ごめん。って、マックイーン？　……だから松葉杖なんか借りているの？　冗談じゃないよ、早く戻って大人しく……」
「ええ。彰にも会えましたし、早くリハビリ訓練を再開しなくては」
「幾らなんでもそれは早いよ……」
「そうでしょうか？」
「まずは筋力が衰えない程度の運動にするべきだ。傷が塞がった後、温泉療養しながらリハビリ訓練だね。手伝うよ……マックイーンがまた競技場に戻れるまで。それまで無理な事は禁止」
「解りましたわ」
素直に頷くマックイーン。
「基本は大切ですから。それに早く走りたいですから」
「そうだね……」
「退院するまでは彰にお任せしますわ」
「……退院したら？」

「もちろん、お解りですわよね？　彰、貴方と一緒に復帰に向けた運動ですわ」

胸を張って宣言するマックイーン。

レースに復帰して大丈夫なのか院長や武田さん達に確認したが、今後は重篤な合併症を併発しなければ日常生活はおろか、競技にも支障はないとの事だった。腫瘍自体はあの後すぐに取り除けたらしいが出血箇所が多かったこともあり止血処置におわれていた院長たちが、血液製剤が届いた直後から今後の事も考えそのまま出血した血管の人工血管への置換手術を行ったらしい。僕が意識を失うのとほぼ同時に血液製剤が届いてギリギリだったバイタルも持ち直し、血管置換手術ができたとの事だった。因みに僕の血液は血液製剤が届いた直後に意識を失った僕に戻されたらしい。

マックイーンの場合は今までは運よく症状が出現しなかったものが今回たまたま出現したようだ。

そんな話を目覚めたときに聞いた。

？　？　？　？　？

マックイーンの抜糸を見届けてアサマ様や武田さん、トレーナーさん、マックイーンのチームの皆は帰って行った。

抜糸も済み、マックイーンの回復訓練が始まり数日が経った。
回復訓練と言っても、傷に障らない程度に病院の敷地内を歩いたり、傷の回復を早めるために温泉に浸かるだけだが……。
マックイーンの回復の早さには目を見張るものがあった。
本人の努力と同時に生まれ持った回復力が高いのだろう、日常生活では何の支障もなかった。
その事を誉めると激怒されたが。
「メキシコオオサンショウウオも真っ青な回復力だね……」
言い方が拙かったのだろうか？
「メキシコオオサンショウウオってその何処が誉め言葉ですか！　それに私は哺乳類！」
「じゃ、シカの枝角も真っ青の回復力」
「だから！」
「ま……そんな事はさておいて」
「おくな！」
「……いや、お腹減ったし……」
「……あのですね……。まぁ……私もお腹すきましたから……」

昼食を食堂で一緒に食べようと席についていたはずなのに何でこんな話になったのやら。

「ならいいね。頂きます」

「頂きます」

マックイーンが僕のメニューを見て顔をしかめる。

「あ……。彰、またそれですか？　好きですわよね、丼物。今日は……アナゴ丼？」

言われてみれば確かにマックイーンとここで食べた献立は全て丼物だった。

「そう言えばそうだね。食べ慣れているからかな？」

大学の寮で自炊していた頃は手軽な丼物にはお世話になっていた。

一口に丼物とは言っても種類はたくさんある。天丼、牛丼、カツ丼、豚丼、親子丼、他人丼。お金が入った時は、ばくだん丼や鰻丼や鉄火丼、海鮮丼。薄く切ったカマボコやシイタケを具材にして彩りに三つ葉やネギを加えた木の葉丼、甘辛く炊いた油揚げと青ねぎを卵でとじたきつね丼、油揚げと揚げ玉を卵とじにしたむじな丼も好きだったなぁ。鶏肉を使ったかしわ丼やカレー丼、中華丼。お金が無くなったら丼一杯の白米の上に学食のテーブルからちょろまかした刻み葱や紅生姜をのせたり、それも無くなると塩やお茶をかけたりして。自炊生活だと紅生姜丼を一番多く作った気がする。

「失敗だったのはパンを載せて丼にしたときだったかな。……パンも米も主食なんだか

ら分ければよかったんだけど、気がつかなくってさ」
　そんな話をしながら目の前のアナゴ丼を指差す。
「だから、こういうまともな丼物は僕にとって幸せの象徴なんだ」
　マックイーンは眉を顰め、目と耳を伏せ、申し訳なさそうな表情になった。
「……何だか、聞いているだけで可哀想になりましたわ」
「そう？」
　僕自身はそんなに苦にしているわけでもない。お金はあるにこした事はないが、おかげで食堂の丼物がおいしく味わえる。
「……栄養とか考えないと駄目ですわよ。……大の大人を一人にするのがこんなに不安になるなんて」
　溜息をつくマックイーン。
　ばつが悪くなり、切れていた水を汲みに席を立つ。
「あ……お水お代わり？」
「うん。マックイーンもいる？」
「お願いしますわ」
　食堂隅に設置されている給水器から水を汲み、戻る途中で壁にかかったカレンダーが目に入る。

「そうか……今日は」
　席に戻るとマックイーンが出迎えてくれた。
「おかえり」
「ただいま！」
　わざとらしいほど明るく振舞う。
「何だか随分元気そうですわね」
　呆れ顔のマックイーン。
「無理やりだけどね」
「何ですか、それ？」
「気にしないで」
　そう言いながら汲んで来た水を音を立てて飲み干す。
　そんな様子を楽しそうに見つめながらマックイーンが言った。
「いつも付き合ってくれて、ありがとうございます」
「どうしたの？　突然。……好きでやっていることだし、これも立派な研修だよ？」
「そうですか。……少しは彰の役に立っているのでしょうか」
「そんな事言わないでよ……僕が好きでやっていることだから」
「……好き……だからですか？」

「もちろん」
　そう言うとマックイーンが頬を朱に染める。
「……あの、マックイーン……」
「なに？」
　カレンダーを見て気づいたものの言いそびれていた事を話す。
「……今日って……」
　頷くマックイーン。
「ええ。今日が天皇賞の開催日……」
「そう、か……」
　マックイーンの夢を叶える機会だった。
　そのことを考えていると彼女が僕の顔を覗き込んでくる。
「マックイーン……？」
「彰？　私、気にしていませんわよ？　私の天皇賞春秋三連覇の夢は潰えましたが、今日の天皇賞はライアンかパーマーが獲ってくれるでしょうから。そうなればメジロ家による天皇賞春秋三連覇達成ですわ。私はドリームリーグに進み、そこで新しく目標を見つけ走り続けるだけです。彰も支えてくれるのですよね」
　そういうマックイーンの表情は明るい。

この明るさが、これまで幾度となく彼女自身を救ってきたのだろう。彼女だけでなく僕を含めた周囲も……。

「やぁ、食事中かね？」

食堂に入ってきた院長が、マックイーンを見つけたらしい。

「あ、院長。こんにちは」

「こんにちは、マックイーンちゃん。どうだね、回復訓練の調子は」

「良いですよ、すごく。だから、早く退院させてください」

「まぁ、後何日かは様子を見たほうが良いな。……それに、早く退院しても良いのかね？彰と会う機会も少なくなるぞ？」

「あっ。……それもそうですわね」

忘れていたと言う表情のマックイーン。

「そうだろう？　ああ、午後は温泉療養だったね。……そうだ、彰をマックイーンちゃんの担当につけようか？　二人で仲良く水着で温泉療養というのはどうだ？　ん？」

そう言うと院長は高笑いをする。

頬を朱に染めたマックイーン。

「院長！」

僕が上げた抗議の声を高笑いで黙殺しながら、院長は配膳場所に向かって行った。

？　？　？　？　？

その晩、病棟を見回りながら、何とはなしにマックイーンの事を考えていた。
回復訓練も順調で、直に筋力訓練に移れるだろう。
手術直前に見せていた弱気さもなくなり、退屈しがちな入院生活も上手くこなしているようだ。
患者がいる階から下へ降り、温泉に通じる廊下を見回る。
「……？」
待合所に人影が見える。
「誰だ!?」
灯火を人影に向ける。
「……マックイーン」
そこにマックイーンの姿があった。
「どうしたの？　こんな夜遅くに」
近付いてくるマックイーンの表情に怒りと哀しみの感情が浮かんでいた。
「彰……聞きたい事がありますわ。少し宜しいですか？」

「なに？」
「……今日の夕方の事です。私の手術中の事をお医者様が話していたのを聞いてしまいましたわ」
「何処で？」
「何処でもいいですわよね。患者がほとんど来ないところですわ」
「ふ～ん」
　気のない返事をしていたが、背筋に汗が滲み出るのを感じた。
「彰。あなたが倒れた本当の理由を教えてください。先に言っておきますが嘘を吐かれるのは嫌ですわよ」
　マックイーンが顔を上げ、真っ直ぐに僕を見つめていた。
「……どういう意味？」
「……質問に質問で返さないでください。私の背中に在った腫瘍の摘出時に私の状態が急変したと聞きましたわ」
「それは……」
「私の目を見てください。私の事、本当に大切に想ってくれているなら、誤魔化さないで」
　そう言って僕の顔を凝視するマックイーン。

……誤魔化す事はできそうにない。
「……ああ。急変した。でも――」
言いかけた僕を遮る。
「完全に取り除けなかったら私はこんなに元気ではありません。それは解りますわ」
「ならそれで」
いいじゃないか。と続けようとした僕に、
「……あなたが無茶をしたことも聞きましたわ。だから私が持ち直して手術を続行できたという事も」
そこまで言うと、マックイーンは縋りつくように僕の襟を掴んできた。
「無茶って何の事？」
最後の足掻きに過ぎない事は解っていたが、一応誤魔化してみる。
「私に限界以上の輸血を行ったって聞きましたわ。何でそんな無茶を!!」
マックイーンの目に光るものがあった。
足元に、ポツリポツリと水滴が落ちる。
「……莫迦……莫迦、莫迦、莫迦！」
「……マックイーン」
「……莫迦……どうして……どうして……そんな事を……」

後の言葉は嗚咽にしかならなかった。
その瞳から止めどもなく涙を流し続け、力なく僕を叩きつづけるマックイーンの姿があった。
「……自分の全てを賭しても君を助けたかった。……君は誰よりも大切な存在だから」
「……何で……何で……私が助かっても……あなたが死んじゃったら、私どうなるかわかりませんわ。……もう独りでいるのは嫌。……もう無茶はしないで。……私を独りにしないでください……」
「……ごめん」
恋人に心配をかけさせたことでなく、彼女の恋人である自分自身をないがしろにしたこと。その行為を黙っていた事を謝罪する。
「……元気になってくれたから、今回だけは許してさしあげますわ」
依然、嗚咽混じりの声のマックイーンだったが、確かにそう応えてくれた。
「ありがとう」
マックイーンの背に手を回し軽く抱きしめる。
「……莫迦」
微かにすすり泣く声が聞こえた。

第２８話

あの夜から数日後、マックイーンは無事退院した。

あの夜、泣き濡れたマックイーンを病室に送り、僕らはそこで一晩過ごし絆を一層深めた。その中で、マックイーンは学園に戻り、復帰に向けたリハビリを行うという話を持ち出した。

術後の安静を図るという事で学園からは退院後一ヶ月の休学期間を与えられていたが、彼女は学園で少しづつ復帰に備えたいとのことだった。

僕もその意見には賛成し、マックイーンは退院後、学園に戻ることになった。

？　？　？　？　？

今日はマックイーンが学園に帰る日だった。

約束通りの時刻に駅に来たが、彼女の姿がそこにない。

……どうしたんだろう？　まさか寝坊でもしたのだろうか？

「お兄さん!!」

佇んでいるとそんな声と一緒に背中を叩かれた。
後ろを振り返ると、大きなトランクを引いたダイヤちゃんとそのお付きの人達の姿があった。
「あれ？　ダイヤちゃん、どうしたの？」
「今日でお別れです」
そう言って俯き寂しそうな表情を見せるダイヤちゃん。
「えっ⁉？　　本当に⁉？」
「はい」
「また、急に何で？」
「お祖父様の具合も良くなりましたので、本家で静養することになりました。それで私も本家で日本トレーニングセンター学園入学試験に向けて勉強することになりましたので」
「そっか……寂しくなるなぁ。マックイーンも今日学園に戻るし」
「え？　……そうだったんですね。マックイーンさん、東京に戻るの、今日だったんだ……。もう少しここに居られれば良かったなぁ」
ダイヤちゃんの声はほとんど聞こえなかったけど、寂しがってくれているようで、その事が冬と違ってほとんど一緒に居られなかった僕の心にチクチクと刺さってきた。

最後になるという事で二人で思い出話に花を咲かせていると、ホームに入ってくる列車があった。
「あれ？　まだ列車は来ない筈なんだけど……？」
「臨時列車ですよ、サトノ家が用意した」
「そうなの!?」
改めてダイヤちゃん、というか、サトノ家の大金持ちぶりに震えが来ていた。
「それでは私はこれで……。……ウン……あ、彰お兄さん、ちょっと」
最後に乗り込むダイヤちゃんが振り返って僕を手招きしてきた。
なんだろ……？
「どうしたの？」
ダイヤちゃんに視線を合わせるように身を屈めた。
「彰さん、郷ではお世話になりました。これはほんのお礼です」
その言葉とともに僕の頬に柔らかい感触が伝わってきた。
ダイヤちゃんが背伸びして僕の顔を押さえて頬に唇を寄せていた。
「唇は恥ずかしいので頬でごめんなさい。それに不意打ちで奪っちゃったらさすがにマックイーンさんに悪いですし」
そう言うと身を翻し一目散に車内に駆け込んでいった。

そしてその後は一度も顔を見せることなくダイヤちゃんは去っていった。

？　？　？　？　？

それからしばらくして

「ごめんなさい。遅くなりましたわ」

通りの向こうからマックイーンが駆けて来る。

「遅いよ」

「ごめんなさい、二人に捕まってしまいましたわ」

あの二人か……仕方がないな。

「それでダイヤさんは……？　今日帰るとの事でしたが……？」

「え？　ダイヤちゃんのこと知ってたの？」

「ええ。……ひょっとしてもう？」

「うん、少し前に臨時列車で。あ、マックイーンもダイヤちゃんに会いたかったとか？」

「そうでしたか……。私は彼女とはパーティーかトレセン学園で会えるでしょうから良いのですが、一言言っておきたかったことがあったのです。でもまあ仕方ありませんわ。それよりもう少し時間はありますわよね？　遊びに行きましょう！」

ここで過ごす最後の時を楽しんで駅に戻ると、始発の車両が停まっていた。
マックイーンはこれに乗り東京に帰る。
「行くの？」
「ええ」
短い言葉。でも、その言葉を交わす間にいくつもの会話が流れていた気がする。
初めて言葉を交わした舞踏会。
互いを少しづつ知り、一度は失いそうになった事もあった。
そんな今までの想いが全て今の言葉に集約されていたような気がした。
「そうか……頑張ってね」
「彰もね。何時までも私を独りにしないで下さい。早く隣に立って私を支えて下さいまし」
「うん。頑張るよ。……マックイーンも焦らないで。何かあったら必ず連絡して。必ず支えになるから」
「うん……」
「僕も頑張る……。マックイーン、君に追いついたら……」
「そうしたら……」
「また……」

車両に乗り込むマックイーンが僕を振り返り、一瞬動きを止める。
「また二人で同じ刻を歩もう」
「ええ」
満面の笑みを浮かべるマックイーン。
時には迷い、挫折し、諦める事もあるかも知れない。
でも、もう僕もマックイーンも1人じゃない。互いを信じ、互いに支えあって生きていこう。
去り行く電車を見送りながら、僕はそう思った。

そして季節が移り……。

《トウカイテイオーだ！　トウカイテイオーだ！　トウカイテイオー、奇跡の復活!!》

そして……。

拝啓

時下ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

先日は日本ウマ娘トレーニングセンター学園の職員採用試験にご応募いただき誠にありがとうございました。

さて、慎重に選考いたしました結果、貴殿を学園附属医療施設のウマ娘スポーツ医療専門医として採用することに内定いたしましたので、ここにご通知申し上げます。競技指導教諭資格保有者であることを考慮し、本採用後に再度配属先について検討いたします。

なお、後日承諾書等の書類を提出していただきますが、詳細につきましては改めてご案内いたします。

〈ｆｉｎ〉